

ころをついてゐる處もあつて、笑つて居り乍らも、急にふつと笑ひが止まる。人のした事を笑つてゐる乍ら、よく考へて見ると、これは笑つてゐられないと考へさせる事もある。若いあなた達には、さう言ふ経験はないかも知れないが、我々にはよくあります。

日本の文學には、始めはたゞをかしいと思つたものが、よく考へて見ると、自分も笑つて居る事が出来なくなる。例へば芭蕉の句などにも、ちよつと見ては面白いが、よく考へると、寂しい感じのするものがあります。啄木も、さう言ふ歌を作つてゐる間に、眞面目な歌をつくる様になつた。自分の経歴を笑つてゐるが、その中に何とも言へない嚴肅感が出て來た。我々の人生には、笑つてすませることばかりあるではありません。啄木は、皆に共通な感情を歌にしたのです。彼が初めの頃つくつた人を笑はせる様な歌を見て、あなた達は啄木の歌は面白いと思つてゐるでせうが、その中のある物が、自分の嚴肅な氣持ちと、通じるものゝあることを考へられる事があつてせう。人生を反省する力がある。思ひがけない所から、われわれの生活の眞の姿が示されて來る。それは文學の效能であるが、それがなければ、文學は遊戯であると思ひます。今迄の人の文學が遊戯的であつたのは、この効果がなかつた爲なのです。次にあなた方が讀んで、氣持ちにしつくりとする歌として、

東海の小島の磯の白砂に吾れ泣き濡れて蟹と戯る

この歌は、調子の高いものと感ぜられてゐる様ですが、誇張がしてある。青年の悲しみの上に、

文學らしい條件を空想して、付け加へてゐます。

啄木は片方には、ふざけた歌をつくつて來てゐたが、だんぐ、眞面目と不眞面目との境界がつかなくなつた。そして、啄木は自然と、落ち著いた歌をつくる様になつた。

ふるさとの山に向ひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな

この頃になると、啄木には、嘘もかけねもなく、如何にも、その心の底にある嚴肅感がやさしさに充ちた調子で表現せられて來ました。

この歌をよむと、岩手山の麓に暮す者は、啄木ならずとも、この歌は皆の共通の感じを適切にうたつてゐる。悲しいか嬉しいかは歌つて居ないが、自然に衿を正す様な氣持ちになる。これは啄木の歌の「質」が良いからであります。其が文學の持つ「正しさ」です。啄木はだんぐ、歌は短いものだが、他の大文學と違はない純な人の心を動かす様になりました。

高き山の頂に登り何かなし帽子を振りて下りきしかな

私はこれを読んで、啄木ははじめて完成に達したと考へました。諸君達は、何にも感じないかも知れませんが、昔はこの様な歌を作るものはなかつたのです。私共の若い頃は、こんな歌は意味のないものと考へられました。この歌は單純であり、その良さを説明してくれと言はれるとちよつと困る。何か良いものがある。歌の内容は、日常の普通にあるものであるが、さう思つてゐるものが、人には重要なものである事が往々にしてあります。昔の文學はさういふ平凡な事は、歌

の題材に取らなかつた。しかし啄木は平凡なものを題材に採つて、それをこなして、却て我々の氣持ちに觸れしめたのです。これより人々は、激情的な事を作るより、世の中の平凡なことを歌ふ様になりました。啄木が亡くなつた明治四十五年前後から、歌は變化して來ました。これはある部分まで、彼啄木の力に由るものであります。苦しんでゐるうちに、知らず／＼のうちに達した啄木は、色々な歌を歌つてゐます。

さうして、かう言ふ所まで抜け出て來たのです。啄木に到るまでの間に、歌はいろ／＼な歴史を経て來ました。さう言ふ歌にも、眞實感といふものが需要でありました。其にもかゝらず、唯美しく、唯悲しく、或はそんなことに關係ない、悲しい時も、楽しい時も、おなじ調子のなだらかな歌をよむべきものだと思つたことも、久しい習慣です。

さう言ふことが、いろ／＼文學をよくしたり、わるくしたりする形を知つて貰ひたいと思ひます。啄木の先生は、與謝野鐵幹であります、鐵幹の歌に、

奈良の世は千歳の先に過ぎけるかあらずや花に佐保の風吹く

この歌は自然を、感情に流しこんでうたつてゐますが、この様な歌は、新しい歌を作りはじめてからの啄木には一つもありません。啄木は、人間や今の世に關係のないものはつくらないことにしてゐたのです。この歌と、啄木の足袋の歌とは大變違つてゐることがおわかりでせう。

江戸時代末期の歌人であつた香川景樹の歌に、

かすが野に若菜をつめば我乍ら昔の人の心ちこそすれ

と言ふのがあります。この歌は、人生もなく、又は、その個性など言ふものもありません。今の自分であつて、昔の人の心地がすると言ふ意味です。鐵幹の歌と、意味はほとんど同じであるが、感激は全然違つてゐるのです。鐵幹のは自分の心の動きを示さうとして、苦しんでゐます。さうして、歌が深く這入つてゐます。景樹のは經文の斷片を見るやうなものです。單に報告してゐるに過ぎません。これに據つても、歌と散文の違いがわかるのであります。これをあなた方は、どの文章はどの文章より良く、どの歌がどの歌よりよい、と言ふ様な事をする事はないかも知れませんが、さういふ事をする様に努めたい。同じ題材だが、入りこみ方の程度が違ふ。文學には、深い浅いがある。文學は自分の意志を傳へるだけではない。感情をも傳へなければならぬのであります。景樹の後の歌人として加納諸平と言ふ人が、同じ様な事を詠んでゐます。

引馬野の木の芽はりはら入り亂れ春日くらすは昔人かも
相當にいゝ歌です。

歌は簡單だが、かうして思ふと、表し方が皆違ひます。何故さうなるのか、如何にすれば我々のつかんだ事が、適切に表されるかと言ふ問題になる。一つの思想を表すには、一つの文章よりないと言ふ理想は誰でも持つてゐます。だが、これは、空想です。諸君も練りに練つて、これしか書けない、と言ふところ迄つきつめて書くやうにならねばなりません。現實に自分たちの考へど

ほりにゆかないでも、どんな方面でも、嚴肅な氣持ちであたらなければなりません。心にたるみをもつて文を書くと、讀む人にもたるみが出来て、罪惡感を持たせる。しかし、幸ひに諸君達は目前に、立派な先輩石川啄木を持つてゐます。その歌を見る事は、啄木を通じて諸君の生活を説明してもらふ事である。君達には長い將來があります。

與謝野寛を憶ふ

昭和二十五年
二月「冬栢」

昔びと 名すら覺えず。 残れるは、 泣くことありし その片頬のみ

古往今來と言ふと、歌の素質にあまり似合はぬ、おほげさなものになる。が——、ともかくかう謂つた歌をつくつた人は、與謝野寛さんだけである。

歌が如何にも愉しく、たのしさのあまり悲しくなると言ふ風な、謂はゞ歌の青年期に立ち還つてゐながら、大きさを持つたと言ふ趣きのある歌は、この人以外に作れなかつたやうな氣がする。そのうへ、この歌の内容に持つてゐる深い悲傷が、われ／＼の心を誘惑^{オヨゾ}する何とも言へぬ柔靡なものになつて絡みついて來る氣がする。ひと口に言へば、王朝の色好み——、それだけではすこしあらたまり過ぎる。何かかう人を唆る——室町小唄に完成せられ、江戸へ持ち越した清潔なうはきと言つたものが感じられる。小唄の持つうはきの律覺とでも言ふべきものを、歌に具體化しようとして試みたのは随分古くからのことである。

思ひ出づる折りたく柴の夕けぶり むせぶもうれい。 忘れがたみに (後鳥羽院)

思ひ出づるをりたく柴ときくからに たぐひしられぬ 夕けぶりかな (慈圓)
此贈答などは、小唄調でかけられたから、あはせも亦おなじ調子で行つてゐられる。相應な力量を示してゐる歌だが、みにつまされると言ふ處までに行つて居ない。與謝野さんのを見ると、片たる歌でありながら。その人をおびくものゝ深さが思はずには居られない。

おもしろきゑそらごとをも書きませつ。そこさだめぬ旅心より
かう言ふ調子があつたればこそ、かう言ふ生活も掘り出されて來たのである。これを見て心をどりを唆られぬものがあつたら、まづさう言ふ點で歌をたのしむ資格がないと言へる。相應に長い年月、かう言ふ歌といふより調子を却けて、禁欲主義のやうな顔をすることがよいとせられて來た。熊野旅行に随伴した若い歌人たちも、一人として、今思へばこれほど清いうはきを歌ひあげることが出来なかつた。

當時與謝野さんの技術力の逞しさは、少くとも新詩社の二代にそなはるべき人々には訣つてゐた。訣つて及ばない焦慮が見えてゐた。これはそれ等の人ばかりのことであつてはならぬ筈だつたが、何分にも晶子刀自の人望が、實質を遙かに凌いでゐた爲もあつて、まづ世間からは、不當に評價せられ勝ちであつた。それは今でも、間違つたまゝの定評となつて續いて來てゐる。これだけは改めたい。與謝野さんの爲にも、新詩社の爲にも、それともつと廣く、日本の短歌の歴史の爲に。

與謝野さんの歌は、『相聞』^{アヒヤコエ}が最高で、それ以後、詩における象徴詩の影響が甚しく見えてからは、何もかも幻想のやうに作りなされてしまつて、今から思へば、與謝野さんの本領を發揮する方面から遠のいてゐるやうに見えるのは、残念と言つても、これほど心残りなことはない。一つは、鷗外さんが歌に關心を深めて來たことが、悪影響を表したことになるのでないか。源高湛や腰辨當など言ふ名で、相當本氣にかゝつて來られた。その歌が概念的な作風である。

一體短歌には概念風な系統があるので、萬葉などでもさうした^{ウツク}作物にない作物もあるのである。それがその當時も、今も相變らず日本文學の問題になつてゐる、文學における思想的内容の有無と言ふ課題を、解釋したことやうに思はれた。そんなことの爲に、與謝野さんの歌も、概念歌に向つて數歩あゆみ出した。下のやうな程度でとまつたものなら、吾われはどんなにそれを名歌として喜んだであらう。今まで殆四十年、あれほど概念歌を指弾して來た時代にも、私は憚らなかつた。この二首を推讃する喜びばかりに。

大空の塵とは いかが思ふべき。熱き涙の 流るるものを

大名牟遲 少那彦名のいにしへも、すぐれて善きは人嫉みけり

萬葉調とは與謝野さんも言はなかつたけれど、世間の萬葉調と、かはる所はなかつた。

與謝野寛論

昭和二十六年八月「三田
文學」第四十一卷第四號

與謝野さんのお話をするのには、私は餘り適當な人間ではございません。それは只今の歌壇では、明治三十年代以來の、歌人の人別といふやうな考へがまだ残つてゐます。殊にその新派における最古の派別といふのが、最はつきりしてゐるのです。其區別によると、私どもは根岸派、今の言ひ方ですとアララギ派のものと云ふことになつて居ります。アララギ派・根岸派のものが、新詩社・明星派の元祖の與謝野さんのことを言ふのは、だから、不適當だといふことになります。新詩社がアララギ派に對して、理會がなかつたやうに、アララギ派に、新詩社派に對する理會のないのは當り前です。そのために互に知り合はうとせず、互に一度も言ひ合せたことなく、勝手にゆきたいところまで行つた傾きがございます。文學としては、それでも結構、或はそれが本たうだと言ふべきものかも知れません。だがそのために、互に餘り理會がなさ過ぎたといふところが多いございます。私はほんたうのところは、其ほどはつきりした派別に立つてゐなかつた人間だつたかも知れないのです。徹底した文學からすれば、まことに不幸な立ち場にゐた訣になりま

與謝野寛論

す。私の歌の系圖から言ひますと、大體根岸派に屬するものですけれども、私のほんたうの心の歴史からいふと、明星派——新詩社派にも非常に關係してゐると思ひます。だから、或はこのくらゐな年頃のもので、アララギ・明星兩方にわたつての話をするのは、私などが一番適當なのかも知れない。それに私がお話をしようと思ふ與謝野寛さん、つまり鐵幹さんとは、だいで暫らくの間、三田の慶應義塾で同じ國文學の教師をしてをりました。餘り年が違ひ過ぎますので、若い者の生意氣さで、尤今ぢや若い者ではありませんが——その時分與謝野さんと比べれば、ずつと若かつたものですから、與謝野さんをば蔑ろにしてをつたことがあるかも知れません。蔑ろにしたつもりでないけれども、今日考へてみると、もつと大切にしておけばよかつた、といふやうな感じがするのですから、蔑ろにしてをつたと言へるかも知れません。

私は實は根岸派でも、明星派であるより以前に、根生ひの歴史を持つてゐるのです。まう一つほかに服部躬治といふ先生がありました。これは與謝野さんと同門で——つまり落合直文門の一人で、とても變つた性格の人と見られてゐた方で、歌もたいへん變つた歌、變つてゐるんぢやない、當り前なんですけれども、ある點まで正式なよさを持つたものは、いつも流行らない傾向のあるものです。いつも流行の中心にあることが出来なかつたために、たいへん變つた歌を突つ張りとして、意地を通されたやうに見えました。私はその服部先生の門下なんです。門下と申しましたも、直接に習つたのは二度ぐらゐのものです。その後お目に掛かる機會を失つてしまひました。

そんな點から考へますと、與謝野さんとはもつと度々お目に掛かつてゐたのですから、かう言ふ所に縁の厚薄が考へられます。

私の若い時分に、服部先生の歌風・文學に懽らぬところが見えて來たんぢやございませんが、なんとなく服部先生は、弟子を世話することがもういやになつたといふ風な感じを持つてゐられる。その感じを受け取りまして、どうしようかしら、歌を廢めてしまはうかしら、それとも誰かに教はらうかしらと思つてゐる時に與謝野さん夫婦の面影が浮びまして、それは東京へ來て、東京の學生生活に入つた暫らくのあとでございましたらうか。その時分確か千駄ヶ谷の廣い空地を前にして、借家建ちの家が幾軒か並んでゐたやうな内の一軒にをられたと思ひますが、ずゐぶん年が經ちますので、四十年近く經ちますと、どうも私、自分の都合のいゝやうに記憶をば整理してでせうが、——ともかくさう言ふ御宅の邊をうろついたことを覚えてゐます。きつと、歌を見て頂かうといふ決心をして出かけたものと思ひます。そのくらゐ怪しい昔の事なんです。若しその時にもつと勇氣があつて、服部先生を思ひ切つて、與謝野さん夫婦をば私の師匠とすることのできるやうな氣持ちが出ましたら、その後の關係もすつかり變つて來てをりませうし、私なんかは叛逆精神の殆ない男ですから、或は新詩社派の忠實な最後の護り手として、今日をつたかも知れません。人間といふものは、眞に行き當りばつたりなもので、どんな風になつてゆくかわかりません。

さういふことですから、與謝野さんの作については熱心に眼を通してをりました。何しろ毎月發表される分量が、師匠服部先生より非常に多い。發表の機關もあり、發表のぺいじも多かつたら、我々に影響することも違ふ。私の師匠の發表せられたものは、月々と言ふ訣にいかない。年に何度といふ位、而も數が非常に少い。へんくつで人を嫌ふし、同時に人にもけぶたがられるやうな性格だから、發表する機關がだんく狭まつて居りました。だから作物を見る機會が、與謝野さんの方がどうしても多い。したがつて、自然私どもの歌に對する考へは、與謝野さんの考へで征服されて行くと申しますか、與謝野さんの考へに傾いてくるのは當り前です。さういふ關係ですから、與謝野さんに必しも好意を持たなければならぬ、といふ理由もなかつたのですから、やはり批判的にもなつてをりますし、それと同時に、尊敬してゐるといふ風に、極めて自由な氣持ちで、うまい作物を見ればうまいなあと正直感心しました。さう言ふ心持ちが、整頓せられずに、今日まで續いてゐる。與謝野さんにたいする私自身の批評といふものは、とても整理をしなければならぬといふことで、非常な好意と、相當な悪意と、——世間の無責任な批評や、殊に、もう古疵になつてゐた「文壇照魔鏡」に煩はされてゐたのです。そのほかいろ／＼な状態が混亂したまゝあるわけなんです。私がちよつと話して見ようとしても、どういふ風に言ひ表していゝかわからない。あなた方にお聽かせるといふと、私の考へどほりには受け取つていたゞけないといふやうな氣持ちが、話してゐるあとから浮んでまゐります。

だからこの話も、ひよつとすると、あなた方をば不愉快がらせるやうな、與謝野さんのある方面を言ふかも知れん、といふことを恐れてゐるのです。時間も區切りがありますから、そこまでゆく氣遣ひはないと思ひますが……。

ちやうど今日こゝへ來る時に、佐藤（春夫）さんが、新詩社の「明星」に登載せられた詩を嚴重に選り出された、新詩社の詩集を見てまゐりました。やはりその作者のうちでは、明らかに著しく鐵幹さんが、頭角を擡んでゐるといふ語が適當なほど旨い。そのうち殊に後世まで残ると思ひますのは「源九郎義經」をよんだ史詩です。これは非常にいゝもので、音脚に變化があり、非常に自由自在な句法を使つてあります。どうしてこんなに**む**を使つただらうと思はれる位です。殊にはじめの「住吉」は大變なものです。私もはその史詩が好きなものですから、殊に注意を寄せるのでせうが、又私が史詩を作つた遠い原因といふものは、與謝野さんのこの「源九郎義經」にもあるのだらうと、今度讀んで感じたくらゐです。只今の詩人の愛好する詩といふものは、できるだけ日本語の語脈を遠退いてをつて、しかも日本語として讀んで行つてよく詠る、といふ風な表現法をとつてゐるので、非常な無理な註文なんです、だがそれも一つの方法なんです。けれど、それに永久にとゞまつてゐるとしたら、健全な方法だとは言へぬでせう。ともかく與謝野さんの「源九郎義經」が多くの詩人から歓迎せられるとは思はれませんが、

しかし立派な詩であるに違ひない。いつになつても價值はなくなるない詩だと思ひます。しかし、昔からこの詩を必しも誰も彼も讚めたといふものではなかつたと思ひます。そのほかに、その時どきの詩風によつて與謝野さんの作られた詩が、その本（新詩社詩集）にも出てをりますし、その本に出てないのも澤山ございます。「明星」その外の雑誌にも出て、人を感心させましたものが多いのです。それらを見ると、非常に自在でうつかりすると、與謝野さんの詩の本領がどこにあるのかしら、と思はれるやうなことがあつたのです。蒲原有明の風にも似てゐる。薄田泣菫の風にも行つてゐるといふ風に、それで似てゐるんだけど、その似てゐると思ふ詩は、必與謝野さんの詩だけあつて、多くの場合ひとの詩よりいゝのです。つまり與謝野さんは、そのために摸倣の才だといふ風に、人びとに感じられてをつたこともあつたやうなんです。しかし或はこの考へ方は間違ひかも知れない。私はそんな形で與謝野さんを辯解して見たつて爲方がない。人間としてのおもしろさが亦そこにあると思ふのですが、此はあなた方から認めて頂けるでせうか。

日本人の持つてゐる文學といふものには、常に典型といふものがありまして、典型のない文學なんてなかつたのです。さう言ふ風に日本では、殊に典型を重んじてゐます。型を重んじてゐる。その型によつてものをするといふことを決して恥ぢない。型によつてするといふことは、むしろ誇りであり、古い時代ほど、其がもたらるであつた。それで與謝野さんの詩を見ますと、日本人の

心がよく表れてゐます。つまり、訣り易い語で申しますと、歌舞妓芝居なら歌舞妓芝居の型を見ますと、型を守つて今の役者がしてゐるといふのは、その型を創始した役者より劣つてゐるといふことではない。多くの場合、型を創めた役者より、その後その型を守つて来た役者の方が技術が傑れて来てゐる。技術をなぞつて来たために、かさなり重つて、そこに傑れた技術が生れて来たといふことが事實らしい。つい最近までをつた、或はそれより前に亡くなつた名優、だと言はれるやうな人の藝を見ましても、その採つた型が必しもよくないけれども、型によつて進んで来て、其によつて非常な力量を發揮せられたことを、我われに感じさせる。日本の短歌と演劇とは一つに言へないほど違ひますけれど、つまり典型をば守つてゆくといふことをば、日本の文學では決して間違ひだとして来てゐない。むしろ典型をなぞつてゆくことによつて、更に大きな文學が生れてくる。或は大きな作家といふものは、前からあるところの典型に従つて、立派な技術を發揮してくる、といふ風に考へて来てをつた。みんな口では言はないけれど、大體さう感じてる。日本人は論理的なもの言ひが下手過ぎましたから、言うてゐることが訣る程度で、實行してゐることが多い。さういふ點では、至極淺い理論で説明をしてをりましたけれど、實際においては典型を飛び越えるやうなものを、いくらも生んで来て居るのです。

與謝野さんが作られた詩を見ると、どうも與謝野さんの前の型よりは、一步出てゐるといふやうな場合が多いんです。それをばその當時の人が見ますと、やつぱり典型になつた作物と、與謝野

さんの作物との間の近さや、その關係についての判断が簡單に行はれますから、與謝野さんの作物の價値といふものをば非常に低く見ました。だから詩人としての與謝野さんは摸倣が巧いといふ風に考へた。だからその詩は、非常に不幸な評價を蒙つて居たのです。詩の歴史から見ても、かなり先輩で、早期の詩においてすら、二・三優れたものがあります。その短歌よりも、與謝野さんの詩といふものは非常に不幸でした。この意味において、與謝野さんの中期といふものは、もつとく見直してゆく必要があると思ひます。併し、詩のはうでは、與謝野さんの卓れた才能は、今後見直されてゆくことだと思ひます。

短歌の方では、勿論與謝野さんには卓れた門人は幾人もありましたが、だんく減つてなくなつて来ました。それに、與謝野さんの短歌における價値といふものには、絶對というては語弊がありますけれど、殆標準になるやうな評價が與へられてゐる。だから、與謝野さんの作物がこゝまで来て居つて、もうこゝまでのものだといふ風に考へられてゐる。それには以前行はれたごく皮相な評價が、與謝野さんの價値をきめてしまつて居る。人間も死後大いに評價が變らなければならぬ。實際そのまゝで通ると、もういつまでも、其評價は更らないものです。このために、與謝野さんのほんたうの敵手といふのは、正岡子規ではなかつた。かへつてその側にしじゆうをられたところの、晶子さんその人だつたのです。與謝野さんはだんく晶子さんを磨いて、そして結

る人を二人並べて——たとへば派手な人とくすんだ人といふ風に並べて行く。いつでも批評の爲方が決つてゐる。鐵幹さんと晶子さんについても、藝術の方面ではよく似てるんですけど、それでも二人を比べる點を見付けて批評してをります。此比較は單純過ぎました。それで、鐵幹さんはいつの間にか晶子さんに負かされてしまつた。世間がわるいのです。作物においては負けてないんだけど、鐵幹さんはさつき佐藤さんの話にもありましたとほり、哀しいことには、詩人としての素質が晶子さんの人間としての素質よりも、比べてみると、大刀打ちのできないところがあつたのではないか知ら。そのために、其が一つの考へ方を導いて、鐵幹さんの作物を非常に低く見るやうになつたのです。鐵幹さんのをば、弟子達——明星、新詩社派の人の間にでも、どうかすると、晶子さんより鐵幹さんの作物を低く見るといふ傾きがあつて、それが只今まで續いてゐます。今では必しもさうではありません。吉井勇さんだつて、鐵幹・晶子を正當に評價してゐられるし、白秋だつて死ぬる頃には、鐵幹はえらいよと、よく言つたものです。

私はそれがために、細かい一々の作物を擧げて説明をしなければなりません。またそのほうが面白いのですが、時間がありません。が、何といつても短歌では、鐵幹さんのはうが晶子さんより技術的には上です。歌人としては立派な技術を持つてをつた。歌といふものは技術だけで成り立つものでありませんけれど、少くとも日本の歌といふものは、技術ばかりの歌が昔から澤山ある。例へば、萬葉時代のある種の歌といふものは、技術以外には何も無いといふやうな歌がございま

局、晶子さんにまかされてしまつたといふ姿を、世間は見てゐる。晶子夫人の歌には、世間の人に訣らないらしいところがある。あのわからないやうに見えるものに、世間の人がかくも蹤いて行つた。世間の人には、此を訣ると思つてゐたのです。鐵幹さんの歌といふものは、訣り易い歌だと私は思ひますけれど、人をして訣りにくい歌だと簡單に思はせ、あきらめさせてしまふ弱點があつたのではありませんか。

第一にあの時代、鐵幹といふ人は短歌の上の第一人者だ。だからこの程度のいゝ歌が出たつて當然だ。さう考へてゐましたから、どの作についても、そんなに感心してしまはない。これは當り前だと思ふ。この程度なのか、其では何か物足りない、といふ感じを受けた。そこへ、晶子さんがうんとの上つて來られた。只今では、極めて平凡なところで、人が同感してゐる晶子さんの「君死にたまふことなかれ」といふ歌をば大變な攻撃がありました。此をあんなに攻めたのは、大町桂月さんだつた。その大町さんが、晶子さんの歌を非常に賞めました。私の記憶では、桂月の評と、横濱の山崎紫紅氏の評が、晶子さんの評價を安定させたのです。それから晶子さんが讚められて來た。晶子さんといふ人は、大町桂月によつて、歌人として讚美せられ、その後詩人として桂月によつて攻められたといふ形になつてゐる。で、晶子さんはだん／＼評判が高まつて來ました。其と同時に、鐵幹さんに對する評價は低くなつて來る傾向が見えました。それから、どうも我々の持つ癖で困ることなのですが、我々は何かと言ふと、評價の近い所に

す。古今集になつても新古今集になつても、その後の時代になつても、さうした技術以外眞に何も無い歌が澤山あつて、しかもそれが短歌の歴史の上でどうしても歌として本格的なもの、値うちのあるものと認めなければならぬ。どんなに口惜しくつても、歌がよいといふことが事實である。ことに、日本人がよいと言ふことより外にない。歌の判断は、日本人にさせる外はない。鐵幹といふ人は、歌がうまいといふことは我々百も承知してゐる。さう思つて居ながら、やはり、見るほど短歌がうまいのです。うますぎるのです。さうだから、或は世間の人が鐵幹を下げて晶子を高く見たいといふ氣持ちは、そこには或は鐵幹さんの技術の非常に巧みなところに憎しみを感じ、妬みがあります。世の中に、勿論妬みの中にほふかい悋氣といふ、何も關係のないのたいてして嫉妬を起すといふ厄介な性質がありますから、源氏物語を見ますと「公腹立たしき……」といふ語が出て來ますが、それなんです。自分になんら關係がないけれど、ある人が特に幸福だと、自分の人生が厭な氣がしてくる。それはさうした羨みの心ですが、それと似てます。もつと複雑なほふかい悋氣といふのがあります。歌も詩も何も作つたことのない人間でも、あまり人がうまいといふとやはり厭になつてくる。つまり自分の人生がはかなく見えるんでせう、あまり偉い奴があると……。確かに鐵幹といふ人はわれ／＼の人生をはかなく見せた。「こんな歌は俺達に果して出来るか」といふ反省を起させるといふほどうまいのです。

それは子規と鐵幹といふものは、しじゆう並べられてゐるが、世間でいふ技巧一つを問題にして來ると、鐵幹は子規の敵ではありません。

大空の塵とは　いかゞ思ふべき。熱き涙の　流るゝものを

大名牟遲　少那彦名のいにしへも、すぐれてよきは　人妬みけり

かういふ歌は、鐵幹さんの美しくかつ高い精神の出た歌です。勿論、鐵幹・晶子のお二人は、其等の歌の後、更に長く生きて居られました。必しもその歌が鐵幹の年齢の最後の歌ではありません。歌の歴史からいひますと、鐵幹さんといふ人は『相聞』時代の歌が一番高いところへ達して、それから降つて來て居る傾向が見えるのです。鐵幹自身のいゝ歌だと感じてゐる歌は、もつと晩年にあつたのでせうが、われ／＼から見ても、やつぱり『相聞』時代の歌が一等よくつて、同時に日本の歌としても、この鐵幹の『相聞』が、極めて高く到達したものです。

大空の塵とは　いかゞ思ふべき。熱き涙の　ながるゝものを

世間の人は、人間をば宇宙の塵のやうにいふけれど、どんなに反省して見ても、われ／＼の生といふものは宇宙の塵に過ぎないとは思はれない。論より證據、俺はこんなに人を思つて涙を流してゐるではないか——といふ歌です。

その時分、もう一方のアララギ派と見比べますと——アララギ派といふより根岸派と言つたはうがその時代に適切ですが——、根岸派では寫生論の勃興して來た時代です。非常に堅實な立ち場

を築きかけてをつた。本たうに盛んだつた時代には、さういふ概念的な抽象的な歌は嫌つてをつた。ところが、ほんとに今日になつてみますと、アララギ派の第一の人、これも後世に高く残るに違ひない歌人の、齋藤茂吉さんの歌などを見ましても、やつぱりさういふ境涯にあります。抽象的・概念的に傾いて來てゐる。他方からいへば、哲學的でもあり、ある深いものに觸れる思想的なものに行つてゐる。さうすると、日本人は結局、短歌の上ではさういふところに到達するもんだといふことになる。勿論此には、いろ／＼な引用がものを言つてくれるのですが——。即、どつちから行つても結局はそこへゆくのです。

大名牟遲 少那彦名のいにしへも、すぐれてよきは 人妬みけり

鐵幹さんもいろ／＼な世の中のことと煩悶をしたでせうけれど、時に胸が潤くなつて、かういふ歌を作ることが出來た。俺は人に憎まれてゐる、妬まれてゐるけれど、しかし昔から、日本の神代からさうぢやないか。神代の神といへば、大己貴・少彦名の御神がまづ考へられるが、そんな時代からずばぬけた人間は人の妬みを受けたのだ。さういふ點——實に、朗かな氣持ちが感じられるのです。さういふ歌を鐵幹さんは澤山作つております。さういふ境地まで歌が達してゐる。いち／＼擧げて説明してゆけば訣つていたゞけますが、しかし人間としての鐵幹は、その點まで到達してをつたかどうか、われ／＼にはわかりません。今日は、われ／＼以上に鐵幹さんに對して理會の深い方が集つていらつしやるのですから、これはその方々から説明して頂けると思ひま

す。けれど、ともかく、私どもは作家だから、作物が非常に高い點に達してをれば、ある點まで満足しなければならぬ。人間の裏打ちが出來てるか、出來てゐないかといふことは、いろんな段階において、いろ／＼に考へて行かねばなりません。しかし、ともかくわれ／＼は、鐵幹さんの作物を本たうに讀むといふと、そこに人間の一つの型として、典型として、われ／＼がさらにもつとよい人生を創つてゆく、よりどころを見出すことができると思ひます。で、ともかく鐵幹さんといふ人は、われ／＼をば非常に感激さし、又非常にわれ／＼の生をはかなく思はせる力があつた人なのだ。それにも拘らず、今このぐらゐな程度の評價でとゞまつてゐるといふことは、日本の文學のうちに、短歌といふものを入れて考へるなら、決して短歌の世界の名譽ぢやない。鐵幹さんに對して、われ／＼が持つてゐる評價を、もつと高めなければいけないと思ひます。

牧水詠歎

昭和二十六年四月
「短歌聲調」

暉峻康隆さんに會ふと、その都度、若山牧水を思ひ出す。それ程似てゐる訣でもないが、全體の印象が、何時からか、さう言ふ聯想を起させる事になつたのである。勿論生國が近いから、さうした風采の類似があるのも、不思議はない。性格・教養そのほか多くの點で、かけ離れてゐる方だが、一つの近似點を私は指摘することが出来る。薩・隅・日三國民種の昔を思はせるばかりの酒徒で、この兩文人がある事である。かう言ふ噂話は、暉峻さんが聞いても不愉快に思はないだらう。それ程牧水の酒は、人の心をほく笑しくするものを持つてゐたらしい。だが私は、つひに一度も牧水と話を交へた事が無いので、此點にふれる事はあきらめよう。不思議に、牧水といふ人について書いてみようといふ興味は、曾つて持つた事がない。それは此人の歌や人柄が、私を拒むのではない。考へてみれば、何所かかう親しさが、むしろ底の方をどんでゐるやうな氣がする。これはおそらく、此人の早期の作物を、まだ成熟しなかつた私が、喜び讀んだ印象が、こんな形で残つてゐるのではなからうか。

牧水は、一流の吟詠法を持つてゐた。これは誰よりも、土岐さんに聞けば、思ひ掛けない朗詠史上の收穫をする事が出来るに思ふ。だが私も知つてゐる事がある。早い頃の歌壇にとつては、私は單に忠實な觀察者だつたに過ぎないから、間違ひのない事は保證出来ない。ともかくも、伊勢の皇學館から、直井敬三と言ふ人が、私と同じ學校で、科の違つた高等師範部に轉入して來た。これが、牧水の同國人で、東京に來ても親しく往き來してゐたらしい。一躰、神宮皇學館には一流の吟詠法が行はれてゐて、月見の宴そのほかには、學生達にも歌はして居た。そんな訣で、直井君がその節をつたへてゐた。今でも大橋・大悟法その他の牧水門の諸君の歌ふあの節は、おそらく直井君を通じて、皇學館から牧水に傳つたものではないかと思つてゐる。同じ伊勢から轉校して來た吉澤武夫君と言ふ人も、なか／＼吟聲に巧で、此聲も、牧水に影響を與へたことを思はせた。直井・吉澤兩君と殆同期頃に皇學館を出た間島琴山氏は、今も無事深川八幡に奉仕してゐるが、皇學館風の吟聲を傳へた人である。だが間島氏の耳は學生離れして、はやく一流の琵琶演奏をはじめ、又伊勢の朗詠にも改曲を加へた短歌朗詠法を公表した。

君がうたふ十三 七つ。君はいつそれになるかや。やうむかやよ

牧水詠歎
など言ふ若い牧水の甘美な空想をこめた歌などが、友達の間ではよく歌はれたものである。かう言ふ牧水の恥かしがりさうな歌を、覺えてゐる私自身さへ恥かしくなる位、その間に、四十年近い年月が隔つてしまつた。

へ大きく轉廻して行つた爲には、啄木も勿論大きな役を勤めてゐるが、何といふことなく讀み過してゐた牧水作物の印象が、氣分的にその人々の心に残つてゐなかつたとは言へぬのである。唯、牧水の極めて古典から自由であつた歌風が、アララギにとつては没交渉な様に見えるのではあるまいか。又それだけ、アララギの先輩たちは、極めて頑固に見える外見を保ちながら、實は苦勞して、全歌風の綜合といふ事に努力したものである。

私がこんな「忘れ話」をし出したことは、新派短歌の歴史において、單なる逸話として見逃す事の出来ない「觀潮樓歌會」には牧水・夕暮の交渉が乏しい。その點で考へに入れてかゝるべき事も、考へからされてゐるかも知れない、と思ふからである。

後から見ると、牧水の歌には、相當に根岸派の寫生の影響があるやうに見られさうな氣がする。けれどもそれは、大體において、決してさうでなかつた。おそらく失禮ながら、學校へなど忠實に行かなかつた方だらうと思ふが、それでも早稲田に學籍を置いたゞけに、その學風や、文學における早稲田派の主張が影響してゐた。どうも、島村抱月・長谷川天溪などの自然主義論が、小説から詩に入つてそれを自由にし、ついで短歌へ來た。そして歌では、大きにその古典味を削り取つた。短歌は詩の様に歴史が脆弱ではないから、形式で破壊するに至らなかつた。が此爲事における前走選手は、牧水だと言つてさしつかへがないやうな氣がする。これは一方その師尾上先生の影響が大きにあつたに違ひない。けれども、牧水自身も、一切の古典美を扱ふ限界のぎりぎりまで來てゐたのである。牧水の古典力では、どうしてもその先は、自然主義にたよる外はなかつたのである。甘美な詠嘆も、その境地に出る一步前の姿であつた。

これを平易な歴史に直してみると、小説に手を染めて心裡の微動を歌にする事を悟つた窪田さん、古今でも新古今でもなく、又はいねでもない事をしみるゝ感じて、自然主義に投じようとした柴舟先生の後に、牧水がつゞく事になるのであるが、風靡した力は、牧水から出てゐるやうである。歌論も書いた牧水だけれども、もとゝ論理的根據を持たない彼は、幾度も後返りして、詠歎境に逍遙して、自分の歌を必しも自然主義化する事は出来なかつた。

だが啄木以前に、牧水の打つて置いた石は、相當な力を持つてゐる。根岸派の人達が、アララギ

哭く悲しみの、堪へ易きを思はずには居られない。この境地に會津さんを据ゑて、その傍觀を強ひる文學のむごさを思はずに居られない。歌壇人の認めると認めないとに繋らず、秋草道人調なるものが、完成しようとしてゐる。流派々々に歌多くして、益煩雜ならむとする時、之を推す理由は、明らかであらう。

會津八一氏の『會津八一全歌集』

昭和二十六年五月
十四日「讀賣新聞」

會津氏の美術史に關する研究は、多くの敬愛者があつて、其位置を高く保つてゐる。而も別に、短歌に對する造詣が深く、製作經歷の久しい事も、尋常の所謂専門歌人の上に出てゐる。其も今では、世間周知のことである。其だけに、歌人を以て居らぬ氏にも、既に數部の歌集があつて、時々の口占コウセンが、有識人の間に傳誦せられてゐるのに驚くことがある。

『會津八一全歌集』は、『寒燈集』以前の數種の家集を併せたもので、其に昭和二十二年以後の若干の新作が加つてゐるのである。歌を作り初めて凡五十年に餘り、其早く詠み棄てたものを拾へば、更に相當な分量になるのであらう。而も初期から、極めて洗煉せられた古調を驅使して、夙に一家の俳を具へて、素人作家と言ふ域は踰えてゐた。子規自ら教へざる子規門流の歌人で、所謂根岸派と並行する、自由古典派の孤立した作者として見るべき人であらう。其後愈熟して、元の簡素な線に豐潤な感觸を加へ、輕爽な音調の内から、柔軟なものを胚胎して來た。殊に戰鬩を蒙つて後、越後西條の僑居に居て詠んだ山鳩以下松濤・幽暗に到る六十首は、人生、聲をあげて

水行く岸の歌人

昭和二十六年
六月「林間」

水町京子さんの『水ゆく岸にて』を讀んでゐる。女の人に知り合ひは、數へるほどよりないが、その僅かな知人、それさへごく稀に挨拶をすると言ふ程度の人も次第に減つてゆく。此間も、川上小夜子さんがはかなくなつた。此人の若い情熱の歴史を聞くと、さう言ふ女性たちの二十・三十代の心を傷けないやうに護つて過して來たらしい、いろんな場合が浮んで來る。『水ゆく岸』を讀んでも、さう言ふ清い情熱の記録がうかゞはれ、又あまり若い思ひを恥ぢて取り捨てたらしい種類にも、相當記憶に値するものゝあつたことを思ひ出す。

とほつ人 病むといふなり。降りいでし雪は 吹雪となりゆくらしも

かう言ふ軽く言ひすてたやうなのに、今よりもつと時代自身の純であつた頃の、淡々しい思ひが出てゐる。事件を大事がつた様なものには、却て重苦しい感銘しか受けない。

春來るを 救ひのごとく待ち戀ひて、老いの姉妹が 煙草すふなる

上の句は日頃の生活で、下の句はある日の姿である。ちつとも歌の爲にあせる所などは見えない

で、而も深いため息が聞える。先の歌と此歌と、何年かの間にこれだけの違ひが出て來てゐる。

老い夫と 老い母と われと 言すくなに過すあけくれ 時にたへがたし

かう言ふ生活に安定して行くやうな明け暮れをわびしがつてはゐるけれど、そこにもう、どうにもならぬ深い安らひを欲する心も澱んでゐる。長い間、女性の歌が表現の自由を失つてをつて、戦争がすむと解放せられた様に自由になつて來た。だが解放せられたといふだけでは、ほんたうの自由が得られるものではない。作者も、作者の友人たちも、皆新しい方角にまだひはじめた。そしてそれが、今までもつゞいてゐる。『水ゆく岸にて』の昭和二十年以降は、その煩悶の跡のみ著しい。なほ數年の年月を置かなければ、よい持ち味も明らかにはなつて來ないであらう。何にしても此人などは、もつとからだが達者になつて、ほんたうの自分自身の歌の出て來るまで生きてゐなければ嘘である。

女性の事だから、さう自由に旅も出來ない筈なのに、此人は相當に羈旅の歌をもつてゐる。これが仲間の人たちと違ふ點。それにも一つ、山野に恣にある自然生の植物を寫す力量の深い事、これも他の人とは變つてゐる所である。さうした心美しさを持つてゐるのであらう。此は才能といふよりも、昭和のはじめの「三つ峠」などは、此歌集の代表的な作物群であらう。それから、もう少し新しい「冬芽」などがこれに次ぐものだらう。水町さんが、抒情詩の作者として最適當な質をもつてゐると考へたのは、單なる空想で、思ひがけなく自然描寫殊に靜物的な作品に、秀れた

ものを持つてゐるのに、はじめて心づいた様な気がする。これは古くから持つて来てゐた、故人古泉千櫨の影響が、極めて自由に出て来てゐるのであらう。

一人前に成長した後、千櫨の指導を受けるやうになつた此人である。相當腹の出来た時分に受けた指導である。だがいかに正直に千櫨の言ふところを諾うたか、たとへば「志摩の海女」の、

岩の上の焚火あかりて、かき垂れし海女のぬれ髪　しるく見ゆるも

身をかへし、海女は潛くも。夕浪に　蹠フナクラ白く見えてかくりぬ

吹きかはす海人の口笛　鳥かげの夕たゆたふ浪に　ひゞくも

どんなに無我の境にあつて、千櫨風を、自分の歌に持ち来さうとしてゐたかゞ諷る。故人の、おほまかであらかでゐながら、どうかすると、語句の上にある美しい鈍感を示して来る、——千櫨の、さう言ふところがこの連作などには、正直に出てゐる。個性を没却してかゝる従順性が、此人の歌をどれだけ清純なものにしたか、だがやはり人間である。個性はかくし切る事が出来ない。又それが正しいのである。

其について思ふ。これだけよい心構へを持つて居りながら、而も歌が今の有様にあるのは、女性が女性らしい物言ひをしなかつた二十年・三十年の間に、此人も、女としての盛時を暮して来た爲である。それは、歌々の大きな休止につき添つてゐる感動語「も」が、悉く男のいきから抜けてゐないことでも諷る。女性の細やかさがかくれてゐる。だが、さうしてその形態上の難點を問

題としないで、歌の内部へ入りこんでみると、どの點でも繊細な良さが見られるではないか。時の變化が、決して此らの歌を無價値にしてゐない。さすがに、時代の若さが此作者を今も驚くやうな境地に誘うてゐる。

水の上にかびて　一生ヒキはすぎにけむ人のおくつきか。川中の洲に

與田の浦の　やみのまやみに立つ波の　その墓じるしぬらす夜もあらむ

潮來・鹿島舟行の歌である。自分等と殆變らぬ生をもちながら地理性の違ひが、これほど生活を變へてゐる。驚いてはならぬことにも驚かずにはゐられなかつた心が出てゐる。語の驚きが過ぎて、第四句目の固定が来てゐるが、上の句は抽象的な抒情一途でありながら、眞實を持ちこたへてゐる。次の歌も「その墓じるし」が突如として現れるほかは、殊に此方には缺點が少い。「やみのまやみに立つ波の」決して新しくはないが、さうかと言つて、これ以上の表現があらうとは思はれない。

さうは言ふものゝ、若い世代の饒はしき。女性にとつては、夢のやうに楽しい時が流れた。作者などは、度々美しい筆名を花の衣のやうに幾つかとり替へた。中には、それをうらやみなぞつた女優すらもあつたと聞く。さう言ふ楽しい世間に、一筋に歌を守つて来て、さて心づいて見ると、その時代々の流行に遅れることなく、相應な作物を、この作者などは残してゐる。けれども、も一つよく見ると、これこそ大正・昭和の女流歌人が築いた歌風として、後世に傳へてよいもの

は、とう／＼築かれずにゐた。戦争がすんで、歌壇は騒然として、失はれた個性を取り戻さうとした。そのうち、その運動の殊にはげしく目につくのは、女性の歌における精勵である。水町さんは、その最苦しみ、最努めた一人である。だがなほ今日の作風で見ると、將來の正しい歌風にすぐに接続してゆくものとは思はれない。併しながらまう一息である。女の人が、自ら戦ひとらずに、優れた女歌が現れる筈はないのである。水町さんならびに同輩の人々は、自分の歌をよくすることが、世間の歌をよくし、更に世間自體をも良くする所以だと考へてゐるに違ひない。十字架を背負ふ覺悟において、作者などは、深く期する所があると信じる。

傳へたい人びと

— 短歌研究記者の問ひに答へて —

昭和九年十月「短歌研究」第三卷第十號

故人を傳へるのに、私の歌から書きはじめるのは、大變失禮な氣がする。

日向の海 とほ長濱に向き暮し 經がたくありけむ。ことの親しさ

私のももののだが、どうかすると、亡くなつた「秋山太郎」の作物の様な氣がする位、秋山の生活に即き過ぎて了つたのである。秋山は、國學院大學高等師範部を出て、日向高鍋タカカネの中學校へ行つて居た。私もあの邊は歩いた事があるので、秋山の生活が、私の中に生き／＼と感じられたのだ。高鍋のずつと上の臺地が、武者小路さんの開いた「新しい村」のある筈の茶臼原チャウスバルで、鶯が鳴いたり、木槿の自生叢があつたり、あつちにもこつちにも、全村退轉した痕などが、縣道に沿うてあつたりした。此は岡の道で、海沿ひを行くと高鍋邊の長い沙濱を通るのであつた。無理に行程を延ばせば、細島までの間に、若山牧水さんの郷里耳津あたりで、一泊することになる訣であ

る。高良山カウラサンの山内の温石温泉オンジャクと言ふ湯宿の長男に生れた彼は、國も山も隔てゝはゐるが、多分に、若山さんの影響が心持ちにあつた様な氣がする。歌その物はよほど違ふ。だが歌を作る心構へと
言ふより、もつと根本的な氣分が、どうも耳津の歌人の影響下にあつた氣がする。だから高鍋邊
にたとひ半年でも住んだ事は、彼の心を満したに違ひない。私が指導したのだし、人間が根本柔
順だつたので、歌風は私のものに似て見えるが、どう考へても、土地と時代とは考へないで居ら
れない。彼はまう一息と言ふ時に死んで行つた。つまり少しで吹き切れると言ふところで亡くな
つて行つた。其がいとしくてならない。

あれほど歌を愛して居た彼であつた。肝腎の私などが持たない程、深い愛著を歌に残して行つた。
今頃生きて居れば、歌に興味を失ひ易い私に、遠慮しながら、而も一種の快い正義派めいた心持
ちから、度々抗議めいた語を聞かせることだらうと思ふと、寂しくなる。故人の爲にも、勉強し
てやらねばと謂つた感傷が起つて来る。「くゞひ」第一卷第三號は、彼が高鍋から寄せた「山原
四十九首」を載せて居る。病氣を自覺して居る者だけが喜ぶ事の出来る日の光りと、野草の匂ひ、
姿態に對する鋭敏な感覺、其から縛られた禁欲の世界に向けての寂しみ、そんなものが、一ぱい
に漲つて居る。三首か或は四首新形式の歌があつて、最初に据ゑてある。

松林で 馬がいさむこつた。さるとりの芽は 踏みつけられるだらう。
いさむこつたが類型的な物言ひだが、山歸來の扱ひ方は、全然我々とは違つて居る。

咳き入れば さびしかりけり。草床に 草を掴みて居たりけるかも
健康な時代の我々は、思ひやりがなかつたから、「咳き入れば」を思はせぶりだと悪んだ。どう
もかうした一・二句のうづりに若山さん調があるのでないかと思ふ。ちよつと浮いてゐるが、今
では靜かに享け入れる事の出来る氣になつてゐる。

草原に おのもくは いねしかば、おのもくのかた 残りたり
何だか實生活以外に、病人らしい放恣な空想が這入つて居る氣がする。だがかう言ふ田舎の青年
の空想は、村に育つた彼であるだけに、概念でなく迫つて来る。

おごなれば、恥ぢて離れて居るをとめの かそけきしぐさは くるしかりけり
おごに處女の字を宛てゝ居る。をとめはをみなとしたかつた。しぐさは都詞の輕薄味を感じなか
つたのだらう。かそけきとくるしかりけりとは、普通の語の盛れないものを含んで居る。此時分
既に結核が大分深まつて來て居て、やがて辭職して久留米へ還る決心をして居たのだと言ふ事
を、念頭に置いて頂きたい。

もの言ひて 心おちつくさびしさを まぎらし難く なりにけるかも
少し定まつたものに從順過ぎると思はれるが、やつぱり流れこむ様に來る心は、私どもを悲しま
せる。もの言ふだけで満足して居た。其がもう出來なくなつたと言ふのである。
重々と 水を負ひ行くまをとめの背のしめりを見とめて さびし

此歌は、寫生から一轉化する所が足りないが、之を前に置いて考へると、

まをとめの立つるほこりのしづもりて、白き日ざしは 照りおもりたり

などいふ一聯の歌がよく訣つて來るのである。寫生はやかましく言つて居ただけけれど、我々の仲間は、どうも抒情に行つたり、敘事に自信を持ち過ぎたりして、一向へたな様である。

見わたしの 遠き臺地の果に接きて あかるき尾根は、なだれたりけり

下の句は、ほんたうの物を出してゐるのだが、上の句は寫生々々と考へ過ぎて、却て寫生でなくなつて居る。

人々を入れて 静けきこの森の晝餉の野火は、燃えゆるびたり

田舎が訣つて居る。歌は到らないけれども、此位に理會もない歌の多い世間である。「人々を入れて」は、若い者だけに、翻譯くさくに氣がつかないのである。賛成する人と不賛成の人が、半々にありさうな作物が随分とある。

仰ぎ臥し萱原に移る日の日ざし きはまる色の輝きにけり

うつゝなく人を戀ふる時 野の草の光りは やゝにゆるびけるかも

あなあはれ 草原が中に、ほのくくと脚のばす蟲を 見たりけるかも

麥つけに 子らが引き來る若馬の逞しきかも。赤き鞍置き

かう言ふ種類の歌、人によつてはもつと他の部類のものを抜くであらう。どちらにしても、病人

らしい目で、物に動されてゐる心持ちが、はつきり出てゐる。その以後のものは、斷篇的に「くぐひ」に時々出て居る。一括して其を選抜して、『下冰集』と言ふ二十一首の選集を拵へた時は、何だか選などする事は、むごいと言ふよりもつまらぬ事だと言ふ氣がしてならなかつた。

天つ日の光りたむろに、いきれたつかぎろひつめたき 枯れ草のみみぢ

「光りたむろ」は私の語感からは、氣になるが、全體としては誰にも同感せられる歌だらう。

鶏飼ひ女が聲の ほがらによばふ聲。うらさびしもよ。こだまして居り

夕ぐれを 山にあされる鶏のあり。ほのくとして 聲あはれなり

温泉宿の裏山・谷藪などに、鶏が這入りこんで埒還りを忘れてゐるのである。

醫師の家に、まゝをよばれておちつきぬ。晝の薬も 呑み忘れ居り

我が病ひ癒えむとすらし。宵々の寝つきは早くなりにけるかも

こんな頼みを抱きそめたうちに、やがて死ぬる時が迫つて居た。

日くれて、家に宿乞ふ人ごゑの ひとりにあらぬ聲を 聞きたり

あしたより鳴きつぐ蟬のおびたゞしき 山の家居に、還り居にけり

湯宿が四軒あつて、其中秋山の家だけが特別大きな構へであつた。小さな澤の中の温石の湯槽の中に湧いて居る温泉だつた。業病に利くのだとか言つて、木賃など拂つて逗留してゐる人が、音も立てずに暮して居る様だ。

一人なる人も去らせぬ。強からぬ我がからだと知れば すべてなく
こんな歌などを示した時分は、もうよつほど病状が進んで居たのだ。ことしの十月で、秋山が亡
くなつて九年になる。翌々年八月夏休みに歸國中であつた『鳥船』同人千家經麻呂が、また死ん
で行つた。亡くなつたのは、其従兄であり、幼少から扶養を蒙つた千家國造尊統氏の家に於て
あつた。

二

あんまり思ひがけない頓死をしたので、皆が色々な想像をした事は、實際である。長く東京府知
事をして居られた千家尊福さんの子で、元麻呂さんとは、腹違ひながらほんたうの弟である。あ
あ言ふ家の離散退轉の姿と言ふものは、元麻呂さんが居られるのに、言うてはすまないが、實際
痛ましい事である。經麻呂等の一腹一生の男兄弟は皆、母と離れて出雲の國造家に引きとられて
成人したのではないかと思ふ。國學院大學豫科に這入る年に東上して來た。さうして足掛け五年
ほど卒業を前に控へて、亡くなつて了つたのである。秋山だけ物にならずに死んだのが、今考へ
ても残念である。

皇國の 遠荒國よらうこくのそのかみを 我が大國主はをさめ給へり

「我が大國主」と誇らかに言ふ事の出来るのは、經麻呂等を措いて外にはない。かう言ふ古く正

しい血を襲いで生れては來たが、物質の上では官司家なり、教主家なりの扶養の程度を守らねば
ならなかつたのだらう。

人むれに 心ひかれつ。 たなそこの汗ばむ錢を 我がのぞき居り

「のぞき居り」が、おほまかさ子どもらしさを残してゐる。歌はよいと思はぬが、何か頻りに、
あがなひきれない物欲を感じて居るのだらう。

火のはたに手をかざしつゝ、 かすかにも 居睡るほどの 安けき心

「死」とある中の一首で、元麻呂さんの書かれた氣の毒な女きやうだいの人の通夜の時のものだ
と記憶して居る。「我も兄も こと言ひかねて黙深し」など言ふのもある。「火のはたに手をかざ
しつゝ」と言ふ言ひ方が、どうも若くて、何かかう果斷な所になかつた千家のむづ／＼してゐた
姿を、同輩「鳥船」の人々の目に印象してゐる。生母と言ふ人は、何處かの國に住んで居て、何
かある時は顔を見せに來た人の様である。

歸らむと言ふ我をとめて もてなしゝ母にし 遠く別れ來にけり

母ひとり 寂しき旅に出で給へり。 青桐の芽の日に日にとゝのふ

さうして、其人はまだ生きて居られるのだらう。

兄と我と おほく黙してくみ交す酒 盃に 満ちこぼれむとす

ひとり微かに 歌うたひつゝ とる兄の 盃の揺れの さびしくありけり

部屋内を這ひ歩み行く 足萎えの姉のそびらの 太りさびしも

感じ方は若いけれども、感傷と言ひ切れぬ純朴と憂鬱とさうしてある朗らかさがあつて、背景の興味など言ふものより、乗り出して居ると思ふ。此兄なる人などは、まだ豊かな世盛りで成長した。あの長篇敘事詩集を見ると、何だか清純な笑ひたいものがある。

弟と 姉と我とゐて、おのもく性たがへるが、さびしかりけり

經麻呂は、可なり啄木の影響は受けて居るが、此などは事實を注釋にすれば、單なる摸倣と言へない博大らしいものが出て來て居る。ひがみはなかつた様だが、時に非常に膨れて居ることがあつたと言ふ。

いさかひの後のきまづき。友のするしはぶきの聲を 憎く思へり

わが心 すべなかりけり。汝がなせるあやまちごとを 責むるにあらず

どこか不自由はしても、こせくしきらないで居る。

東京に居させじと 親の連れ行きし友の愚かも ひとごとならず

單に人事でないと感じただけで、生活の底から改める勇氣のない彼であつた。やつぱりそつと「火のはたに手をかざしてゐる」若者以上に出られなかつた。さうして、とうく死んで行つた。

をみな子は、幼けれども 思ふらし。つむりに觸れて、さみしきものを

かう言ふ神經を使ひ過ぎる所のあつたたちである。歌は、優れて居る。

赤松の幹を いだきて居たりけり。赤松の幹の匂ひさびしも

長濱の砂を手に盛り、手に盛りて、すべなき心を 黙し居にけり

磯ばたの砂のぬくみに まるび居る我がはかなさは、言ふことならず

そのまゝ啄木ではないが、啄木の影響が深いと言ふ事は争へない。言ひ替へれば、啄木から脱しようと言ふ努力と、若い心をどう言ふ風に撲つて行くか、その啄木によさと言ふものが感じられる。結局、經麻呂は長生きして居れば、抒情詩人として、可なりの所まで延びて行つたらう。どうも敘景では行けぬ様であつた。だからいくら鍛へても寫生などは不得意に見えた。

三瓶の 山の荒肌。まざくと 夕日照る見ゆ。風おちぬらし

これはよい方である。

遅れ咲く 曼殊沙華かも。土ほこりは、ちまたに白く 立ち居たりけり

連作を通じてよく意味のとれぬ所はあるが、相對死——心中——を憐んで作つたものゝ序らしい。此は抒情詩として成功してゐる。

朝間より雨ふり頻り ほの暗き土間にひるへる夕刊のしめり

しめりたる土間の榎に靴はきて、長雨のひと日を 旅立たむとす

夜どほしの雨降りつぎて ほの暗き土間の奥處に つばくら鳴くも

此等はやはり、抒情詩脈のものとして見て頂きたい。昭和三年九月、鳥船社同人の手で『青ふし

垣』一卷が纏められた。あまりあつけない死であり、若い人々に色々な問題となつて残つたものがあつた。選集を作つた事は、さうする事によつて、幾分でも此理由の諷らぬ憂鬱な襲ひかゝるものを解決しようとするにあつたらしい。一人々々に問ひ糺しては見ないが、皆きつと、「さうだつた」と答へるものと信じて居る。

黙しつゝ、ひそかに堪へがたし。もの言ひつゝも、疎み居にけり
一人をれば、雨ふり出でぬ。その音の、心にしみて、おちつかれけり

三

坪田満壽穂、越前福井市鏡川神社々司の子である。昭和五年三月、國學院大學國文科を出ると同時に、就職難の世間に苦しませるのが、如何にもいたましいので、私は當時鎌倉八幡宮司を勤めて居た親友に頼んで、假りに相州江島神社の雇員として、住み込ましてやつて貰つた。

なにとぞして、これを使ひやりくれと、手をつきにけり。友だちのまへに
普通なら大學出の學士が、自尊心を傷けられた風の冷い而も感謝はすると謂つた挨拶をする所を、子供々々した飛びあがり者の彼は、本氣から喜んで、其足で就職した。さうして早くも其十五日目に、あの岩屋の番所——蠟燭を出したり、賽錢を受けとつたりする——で、而非番の日に手傳ひに行つて居た所を、上から落ちて來た巨巖に撃たれて、今一人の當番の若い人と共に死んだ。

こんなはかない事はなかつた。私などは、こんな筈はないと思はずには居られなかつた。世間の人は、どう思うてくれるか知らぬが、歌はこれからと言ふところで亡くなつて、經麻呂ほどにもなつて居なかつた。伊藤先生——左千夫——の歌を讀む事を奨励した頃に頻りに歌を作つたので、先生の歌の焼直しなどが、大分あつた。人間としても、役人としても、其から歌の上からも、此からと言ふところで、唯の一雇員として過ぎ去つた。世の中があまりにむごい氣がした。

島の宮に仕へむと、心きまりたり。いくばくの物を、はこび來にけり

夕汐に、ものゝ音つたふ、かそけさや。島山風は、風ぎて居るなり

夕なぎの、ひと時明りを見つゝ居り。目にうつり居る水の面の色

棧橋を、續きて歸る人むれを見つくして、島の夜を思ふなり

ほのくゝに暮れゆく春の日の後を、思ふこと多く、我がなりにけり

此等の作は、その僅か半年の間のものである。さうして、何だかほんたうに有望なしこりの様なものが出来かけて居た事を思はせる。

潮騒以前

昭和十六年一月「あけ
び」第二十一卷第一號

ものあとかんがへがたくなりゆくを、いきのをにわがさびしまむとす

明治四十三年夏から、四十四年の秋まで、まだ若かつた私が、所在なく遊んでゐました。長い牢浪生活のくちぎりと言つてよい程、此生活が何時までも、私の心に印象して残りました。それだけに、此間にあつたことは、わりあひにはつきり憶ひ出されるのです。「潮騒」は、もつと後に出たのですから、可なり古いことになつてしまひました。

其頃、大阪朝日新聞の上に短歌欄が出来たのです。花田さんが、身邊に集つて来る歌を載せて行くと言つた極めてのんびりした気分のあるものでした。比露思と言ふ異色ある名は、其前から知つてゐました。三井甲之さんの「アカネ」によく歌を載せて居られたからです。東京を去る直前に、二度か根岸の子規庵の歌會へ出て左千夫翁や、若かつた茂吉さん、石原さん、千櫛等の方々に逢つてゐたのです。東京でこそ、根岸派が二つに割れて居ましたが、それが大阪まで持ち越すほど、まだ根岸派の歌風は、ひろまつてもゐませんでした。似た歌風の懐しさに、とりわけ心を

惹かれたのです。今では當時少かつた投稿者の名すら覚えてゐません。やはり「アカネ」から引いて、見知つてゐる東尾朴人・外山家人、此方々の作物に深い興味を持つて見てゐたことを思ひ出します。當時の朝日歌壇(?)は、茶席の記録でも見るやうに、同人だけの悠々たる喜びを傳へてゐたものです。かう言ふ短歌欄は、その後何處にも見ることは出来なくなりました。

其うち、此同人が山崎の妙喜庵に集つたことがありました。それへはじめて私も出て座末に列りました。此時の會衆は花田さん、東尾・外山兩故人、其に安江不空大人、其に私、此きりだつたと思ひます。山崎と近い向日町の先にある良峰に、遠縁の聖があつて、其處に數日居た記憶が新しかつたので、二首(?)か良峰の印象を妙喜庵にうつして作つたやうな歌を即題に出した覚えがあります。今も此雜誌の何處かに残つてゐる、詠而歸或は即景と言ふやうな題のとり方は、其頃にもあつたやうです。その時も、外山さんの歌に感心しました。何でもないことで、われ／＼には口まねも出来ないものがあつたのです。かう書いてゐる中に、東尾さんは此會に來なかつたのではなかつたか、と言ふ氣もして來ました。何、其ほど大した話でもありません。

花田さんにも其時が初対面で、とにかく我々が考へに持つてゐた新聞記者といふ者とすつかり違つて、しみ／＼とした物言ひや、思ひ深い感じが、何となく其頃の度ましかつた根岸派の行き方を聯想させる所がありました。

不空大人にも初めて逢つたのですが、此人を越して子規の心が聽ける氣持ちがして、あの文章

を朗讀せられるやうな咄しぶりに耳を傾けました。此だけの印象が此時一度に來たのではありま

せん。後々のものが重つて來てゐるのは言ふまでもありません。私の出た二度目の會は、住吉の南門の中にあつて、石舞臺と向きあつてゐる會所か何かであつたと思ひます。此時の世話人は、東尾さんだつたやうです。南河内瀧谷邊の此人が、どうして住吉と關係があるのだらうと考へた様な訣で覺えてゐるのです。その後又河内長野邊へ行つたかと思ふのですが、なぜか少しも記憶がありません。會へ出たのは此きりだつたのかも知れません。こんな氣の靜まる様な會だつたのですから、あれば都合して出ない氣遣ひはないと思ふのですが、或は花田さんの方の社の勤めが激しくなつて、そんな暇がなくなつたのかどうもはつきりしません。

私もその後次第に此關西根岸の歌壇と言ふべき集ひに疎遠になつてゐる間に、「潮騒」が起り、又「あけび」が起りして、花田さん並びに關西根岸の歌風が靜かに移つて來たやうです。

作家も若い人、年よつた人、多くの新しい方が加つて來られて、雜誌として少しの衰へも見せないのは賀すべきことです。花田さんが色々複雑な爲事の中をきりぬけて、これまで守つて來られたことに感謝せなければなりません。

此機會に申し出たいのは、あけび同人の間に外山家人さんの『樂水亭録稿』歌集部論講を始め頂きたい事です。關西根岸の歌風をさう言ふ風に研究して行くといふ事は、「新派短歌史」にとつても意義の深い勞作になるだらうと思ふのです。

人に預けたるもとの門弟子に寄せて、共にあらゝぎに在りし
時を偲び、旁彼詩社の先達諸兄の清鑑にも供へむと思ふ文

大正十四年
十月？稿

人に預けたるもとの門弟子に

十月號の歌（「橄欖」大正十四年十月號、由利貞三作二十九首）は、自由の氣持ちが出て居ますが、自由その物に囚はれて居ます。感じ方が、類型にはひつてゐる處は非常に危いと思ひます。但し、大分大きき、即ひれのついて來たのはうれしいと思ひます。

この大ききをきめの細やかな心の上に、ぼうとかぶせて來たら本物になると考へました。「人に與へる歌」はその人を心に置き過ぎてゐます。それで、歌がおつきあひぐらゐのものになつてしまひました。「百合の歌」のゆつさりと夜目にうつた處などは、人を目に置かなかつたら頗よい歌になつたものを、と残念です。由利流の姿と心を持つたのは、やはり一等はじめの歌でせう。これは外にないものです。

茂吉さんの四十幾首の中程の歌には、あなたの今の處考へに入れてよい苦勞の見えるものがあり

ます。その違うた領土を開かうとする、その努力は歌の値うち以上です。一首の歌よりも、十首のよい歌を導いて来ればよいのです。あなたは、一人に情熱を傾けると、他の者を憎むのがその愛人へのつとめだといふ道徳観を持つ人です。それもよろしい。が、茂吉さんの萬葉ぶりといひ乍ら、萬葉以外に一本調子の平坦で、内に力の籠つた作物を目ざして居る心を學ぶ事は、あなた及び私どもがさしあたつた全部の爲事です。但し、その良寛の古今を調合した調子に趨くのは、私としては忍びません。私は新古今から古今に出、それから言道・諸平に出た男なのです。それがあらゝぎで救はれたのです。その點の感謝があらゝぎと喧嘩をする氣を起させません。唯、もつと遠慮なく自分の行く處に行きたい心と、仲間内の變な誤解を言ひとく氣持ちの卑屈さを思うて、文學上の恩人たちから離れたのです。

私は又、あなたに、私のはげしい干渉と、寂しい文學者として埋れさせたくなく思つた爲に、杉浦さんのお口ぞへで吉植さんに預つて頂いたのです。

それに、も一つは、あの頃すべての弟子から離れたい氣がした事の訣のあつた事は、あなたも御存じでせう。その爲に、思へば長い、私の小田原暮しの時にも来てくれ、金富町の貧しい二階住ひにも毎日訪れてくれた十年近い二人の關係を、新しく吉植さんの上に移して、あの方ののんびりした氣性をうけさせる事が出来ればと、さうした效果までも欲したのでした。わたしには、わたしの處を去らぬと、見沼以外に相談役の出来る弟子は皆失ひました。けれどもそのひつそりと

した氣持ちを楽しみたかつたし、又今も楽しんで居ります。わたしはあなたを思ふ毎に、久堅町の信陽館の暗い部屋に、まだ軍帽の痕の白く残つた額を、うや／＼しく牛島や水木の人々にも垂れて、純な話ぶりの、併しやつぱりこれも軍隊から持つて来た切り口状の物言ひをしてゐたのを思ひ出して、懐しく思ひます。

あなたは東京へ歌を作る爲に來た人でした。生活よりも、又藝術家として名譽よりも、よい歌を作りたというて、私の様なものをたよつて來られた人でした。私も可なりしつこい方ですが、あなたの歌にしみついてゐる態度には、實はめんだうと感じた時々はあるつても、批評を粗略にする事を敢へてしませんでした。私の批評が丁寧すぎる癖を持つ様になつたのは、あなたの歌を世話やいた處から出てゐると考へます。

吉植さんに頼んだ上は、私はあなたの歌に干渉は出来ません。けれども、さとの實父が、時々筋向ひあたりの家の軒から手招いて、子をよびよせて、わるい物はたべるな、薄着はするな、いたづらをやめる、養家の家風に反くな、決していけない事をして養家に迷惑かけてくれぬ様に、と涙を流して言ふ位の事は、ありがちの事としてまづ見遁して貰へる事と、世間の道徳をこの場合、安易にとり扱うて貰ふのです。

どうぞ、大きな歌にこまかなぎめ、あらけづりでも斧痕から見えるもくめは、みつしりつまつてゐるものにして、或はなつて欲しいのです。するよりなる方が、もうあなた方の場合にはほんた

際です。よい方へ進むか、悪い瀬に乗つて流れて了ふかなのです。併し歌人として、次の時代を持ちこたへて行く一人であらうと言うて置きました。だからうんと勉強して下さい。近作にたとひ十首・十五首でも、世間をあまく見ない立ち場から、自信のあるものを用意して置いて下さい。今は實は少し弛んで居ます。歌の大きさも、多少その弛みから來た手をぬいた點に出て居る處もある様です。これは困ります。あなたは馬吉さんよりは遅れて居るけれど、たしか、浪吉さんなどより前からやつて居られたのです。私の様にきつい時はむやみ厳しく、あまい時はだらしない子煩悩な、そしてしつこい、今様の夫人たちによくある型の猫可愛がりに近い愛情が、門弟子を順調に伸びさせなかつたのだ、とつく／＼思ひます。あらゝぎ發行所に集つた昔の若い世話役や、投書家の方々は、赤彦氏の定見のある、不動の態度によつて育てられて來られたのでした。私も四・五年早く氣がついて、あなたを私の兄とも言ふべき發行所の赤彦氏、あなたから言へば伯父さんに當るあの方に預つて頂いたら、もつと早く歌心も伸びて居たらうに、私の干渉の爲に心がいじけ、又「白鳥」廢刊以後、人の歌をかれこれ世話やく事を厭ふ様になつて來た私の懶惰の爲に、自然心の張りを失はれた。此二つの悪い事の原因はみな私にあつたのです。あらゝぎ發行所で叩かれて居れば、簡明な伯父さんの教訓で、自分から工夫して自ら會得する事が早かつたでせう。こんな事は、あなたに誘惑となるといけません、歌人の世間の思はくも、もつと早くあなたを見はやし、尊敬したでせう。それは後の祭です。遅々ながら、昨年やつと猫可愛がりをふり

うでせう。なるといふのは努力よりも、技巧よりも心の持ち方によりませう。心の持ち方で底力のある純な歌が出來ませう。私の歌を茂吉さんの「あしびきの山澤人の」家から子どもが出て來たといふ「改造」の歌に比べて（木地屋の子どもの三首）やはり先輩だけあると恥ぢもし、おじぎをもしました。私にはやはり小哲學や、姿に囚はれた處があります。茂吉さんの歌にはたべてから齒にかすも残らぬ、水つぽいが、味のこもつた菓物の様な處には及び（ません）……今後もなか／＼あれまでは出られません。私のみならずあなたが、茂吉さんに學ぶのが急務である事に氣のおつきなさらぬ傾きの見えるのが、實父として少し氣にかゝり出したのです。今度の御歌などは、大久保・清水町・白鳥社時分の批評よりも高い標準から見たのではありません。それでゐて、あの時分より感心の語を私に出させなかつたのは、あなたの歌が、自由を得る前に既に自由を享樂して居る、社會主義の態度に似た心境から出て居るからではないでせうか。吉植さんは私に對する義理や、可なり成長した、養子の爲にある尊敬を持つて下さる處から、すべてを、あの方の氣性のゆつたりした處から、長い目で、廣い心で、勝手の發達に任せて居られる事と思ひます。あなたはもつと吉植さんから叩いて頂きなさらなくてはなりません。吉植さんも、私の爲にもあなたをびし／＼いためて下さる様に、その中、伺つて御頼みいたしませう。ある大雜誌の記者は、馬吉さんの歌を出したから、將來いつか出すつもりか、どうであつたか、わかりませんが、由利君の歌はどうですというて來ました。私は大丈夫ですが、今が大事の瀬戸

きる事が出来たのが、あなたの爲によかつたのです。あらゝぎ發行所に鍛へて貫はなかつた替りに「橄欖」へ縁づいて、これですこしは歌の公界も認めかけたといふものです。私は陰ながら喜んで居ます。あなたと面と向つてはあまりそんな事に觸れては話しませんが、あなたもわたしの心を察してくれて居るでせう。此上は、追ひてに帆をあげた舟です。併し、眞實の値うちが大事です。舊道徳に執する私は、實父の立ち場から、流行不易兩面の條件を備へた歌を、うんと脂のつた盛りに作つて置いてほしいのです。今ですよ。私もさうした作歌の機運の、心をつゝつくのには堪へない時が二度位はあつたでせう。それを例ののんびりと考へて、卑しむべき野心虚榮心だと壓へつけて了ひました。その爲に、『海山のあひだ』があんなみすぼらしい内容になる事になつたのです。もう脂の乗る時は來すまい。赤彦氏は脂ののり盛りが珍しい程長かつた人です。茂吉さんは今になつて、又更に所謂水の出ばなの時期が廻つて來た様です。古泉さんは、自分で世間を牽きつける様に努力なさらなかつた爲に、水の出ばなは、作者及び少數の人々が欣んで過ぎました。併し、今の沈み澄んだ心が、又底の泉が迸り出る兆を示して居ます。

あらゝぎ以外の人の内生活は知りませんから、よその方々には及しませんが、尊敬する土屋さんは、歌の價値に對して客觀が出來過ぎて、自分で脂を内訶させて了うた形です。最近の歌を見れば、非常に自由な、これまでの歌人の試みなかつた境地を、實生活に即して開いて行かうとして居られます。これからはたらく人はこの方です。岡麓さんは私から見ても叔父さんです。私は此

方と肩を並べて居る事に、始終氣恥しさを感じ續けました。けれども、岡さんの愛せられる世界を理會する人が幾人もありません。そのまどかな拍子を樂しむ事が出來ても、その心の髓まで立ち入つてゆける人は少いのです。岡さんの歌が欣ばれるのは、今の若い歌の公界の後つぎが、子や孫のめんどうを見る時にならねばわかりません。それほど、廣い／＼世界に物を見る様々な眼鏡を持つて對して居られ、おつとりした心で、柔かに包みこんで行かれるのです。今の世間には、ちよくらちよいとには理會者が出すまい。唯、その調子が、意外な方面に無理會ながら深い同情を持たれる様な事があるかも知れません。それは、あの方の歌集が出るとわかる事です。あの方の歌は、調子だけは無理會な世間人にも肌ざはりがしつくりとゆく處があります。これは岡さんの爲に、よい意味の欣びでお祝ひする事の私には出來ぬ、同情者たちなのです。その底光りが顯れるのは時機を待つ事です。

中村憲吉さんの領分は、若い時分に科學的に、評論する事に専一せられたとおなじ動機が心の中にあつて、始終科學的の正確さと、それから其上に、あの方の大學時代は、社會科學などが法學生全體の心を奪はなかつた時代でした。その替り、哲學がすべての現象を規定するといふ考へから、岩波書店が頭をあげた際でした。だから、哲學に縁のない科に身を置かれたゞけあの方の心には、哲學に對する憧れが深く潜んで居りました。

鷗外博士の正確を、李太郎氏を兄弟子として進んで行かれたと考へてもよい様に思ひます。他の

例では桑木博士などよりは、「美」の本質を窮めようといふ望みの強かつた處から、松本亦太郎

博士の型に入つて行かれた痕が見えます。これは中村さんも意識して居られぬ事かも知れませんが、今になつて古いあらゝぎをひつくり反して見ると、この考へが深まつてまゐります。それで、歌には宗教風でない、幽暗な世界の暗示せられて居る様なものが多くありますし、又酒を楽しんで居る間にも、始終目を瞑つて耳をすまして居る様な考へぶかい境地に、早くから入つて居られました。あの方は孤独感を持ちこたへて世間に對し、家族に對し、自然を凝視して居る人です。而も、それは後天的の努力が生んだ姿であります。生れつきの素質は、盛んな情熱と、自由を敬愛する傾向を著しく持つて居る様です。こすい小ざかしい心を、朴實な姿や語で包んだ田舎人に對する檀那衆出の人として、ある人々に對しては警戒の心を放さないと同時に、信頼出来る人には、極度にすべて任せる事の出来る美しい性情の人です。だから寧ろ、さうした氣のゆるしをふせる事の出来る人を求める心が、脇目からは、つきあひのよい様で居て、氣をゆるさぬ人と見られるのかも知れません。あの方などが、文壇に友人の一等少い人でせう。中村さんの水の出ばなは、三・四年前、山中の郷里に居られた時分から今に續いて居ます。初手は、私などはあまりに歌心の澄みきり過ぎて居るのに驚いて、中村さんは病氣して死にでもするのではないかと、危惧の心を發行所の兄さんにうちあげた位でした。その後やつぱりひどい煩ひがあつて、幸ひに元の中からだになつて、今は大阪でせはしい爲事をして居られます。孤独寂寥の中に、人間・自然に向

けての温情を包みこんだ心は、益々冴えて來る様です。

この點、土屋さんに似て違ひます。土屋さんは人となぢむ心をふり棄てようとばかりして居ます。歌は、近頃の變化で見ると、その點大動搖の兆を見せて居る訣ですが、人間としての親しみが加つて來た様です。が大體に、古い譬へですが、寒中の清水の感じです。中村さんのは、山の眞清水の秋に向ふ冷さです。この方の歌は、世間にも相當理會者を持つて居る様です。殊に知識の優れた人にそれが相に考へられます。けれども、若い人々の心には、心持ちは訣つてもしつくりと來ないといふ、青年の心をよせつける悪い意味の流行性が乏しい様です。而もあの方の同情者とても、ひよつとすれば、中村さんの多分に持つて居る情熱から來た感傷性に執して居るのかも知れません。

人に預けたるもとの門弟子に

あらゝぎ同人中感傷性を深く持つて居るのは、あの人と赤彦さんです。赤彦さんは之を潛めよう潜めようと努力して、今流行のあらゝぎ風の寫生歌を生む客觀態度を放すまいと努めて來ました。中村さんのは、感傷の眼鏡にうつる世間を科學化し、哲學化して、感傷其物の中に悲劇的要素を見出して、低級な文學に陥らないですみました。私などは、ひそか・かそかなど言ふ語を「悲し」「さびし」を翻譯する爲に、使ひはじめた次第です。「さびし」なども、茂吉さんの歌に幾つあつたと勘定して居りましたが、あれは、あの活潑で、ふさぎの蟲の時々かぶつて來るあなたの尊敬すべき筈の伯父さんの「穴」と言ふよりは、實父なる私に放たれた矢だと考へ替へて見ると、

の方の舉動は、そこにあらゝぎの方々には権力となつて働く訣です。だから、初手は變に感じて、次第に新發想を許された喜びに満足する事になります。ところがこゝで私の泣き言といはうか、悔み言といはうか、今まで家に居る金太郎に話したゞけで、——又ひよつこり上京した大阪の仲兄が、直覺して居て、あらゝぎを出たのはかうだらうと申したのには驚きました——誰にも申した事のない一番の原因を話さしておいて頂きます。氣持ちの上の問題などは大した事もないのです。其點からも、或は多年あまたの信頼を繋ぐ事の出来た元と思はれる私の學問の上の所得、その中には平安朝や江戸期の萬葉ぶりにそりのあはない言語・文章の理會と同情とが、製作の上まで及んで來勝ちなのです。新派の歌で、微々たる作者である私の使ひはじめた語や、用字が今では普通に行はれる様にはなつたものも少々はあります。元より、あらゝぎの先輩たち、それから、よその詩社の先進の方々用のはじめられた用語から見れば、幾十分の一にも當らない數ですが、そんな事もあつたのです。もると言ふ字に瞻といふ字を當てたのは、詩の南山の詩から考へて「守る」を避ける爲に用ゐたのでした。かそけさ・かそけしに一種の寂寥と、倦怠と、世間を懐しむ心と、涅槃の俤だけを寫し出したのは、あなたも御存じのとほり近年私をはじめたものでした。

古語復活論・近代語採用論を唱へた心の内には、さうした新派の傳習に對して、微かながら私の知識と、言語に對する選擇感が疼きをよんで居たからなのでした。その爲に、隨分失敗を重ねて

ためにもなり、又恥しい思ひもしました。茂吉さんの「さびし」は、環境が發しさせるといきが形を替へた語なのです。さうした背景を見ると、唯の人の使ふ「さびし」とは値うちが違ふわけ、あの方の「さびし」は、時々あの方の「心のをろ」にちらつく影なのです。そこを考へて下さい。さうして、近來一氣におし出さうとする製作態度から、一つ／＼の語よりも、全體の拍子が完全に單純化せられると言ふ處に焦點をすゑられて來たので、『あらたま』時代には避けて使はれなかつた語なども、盛んに用ゐられます。「や」を新派では嫌うたものですが、それを、ほんたうに新短歌の發想に適する用語例にすゑて復活して、さうしてこんなにはやらししたのは、洋行間際の茂吉さんが最初なのです。「や」はこれにつき纏ふ歌人の醸した月竝臭さと、俳人の匂ひづけた感傷性を含む語として、新派では憚つて使はなかつたのでした。歸朝後のあの方の歌の用語などは、さうした新派の棄てた若しくは避けた、殊にあらゝぎの用ゐた事を恥ぢたものにまで及んで來た事です。此點よくお考へ下さい。

かうした伯父さんの辛苦を考へると、その殻を破らうといふ努力があなた——あらゝぎの態度を守る事に最忠實であつて、而もそのあらゝぎの型にはひりきれない苦しみが努力感に轉廻して、他の先輩以上に、觀照寫生よりは寧ろ寫實の憂き瀬にもがいてゐたあなたの實父の育みの影響とから來て居るのだと思ひます。無理もない事です。茂吉さんなれば、あらゝぎの宿老のあの方なりやこそ、かうした自由をふるまひ、憚りを感じる必要がないのです。あらゝぎの先達であるあ

まゐつた私です。「めり」といふ語は、唯一個の疑問ある用例を除くと、平安朝に發生したものと云へると三矢先生も言はれ、私は萬葉の「めり」は助動詞でなく、用言の複合した現在完了形だと證明を遂げました。此語を一度あらゝぎ時代に用ゐて、まざぐと失敗しました。先輩達の意見を聞いても不同意でした。併し、他にも平安朝の語で埋れて居るのが澤山あるのを見棄てることは堪へられませんでした。それで私は、短歌製作の爲には、言語・文章に對する微々たる修養を呪ふ事もありました。私はかうして、古塚の底をほぜくりかへして、ちりぐらばらぐらになつた枯骨を斷片的に拾うて來て、これに生命を付與しようと思つた。その揃はないからだの幽鬼に、新時代の託宣を告らせようと、試みを久しく續けました。今も病的にその氣分はつき纏うて去りません。

その間に他の先輩方は、自分自身の活きた語彙から陣痛の苦悶を経た現代の心にぴつたりと來る語を多く作り出しました。赤彦さん・憲吉さんには殊にそれが多いのです。語ばかりではありません。私は文章の上にも、も少し、古代は勿論、中世・近世の發想法を採用して見ました。歌の姿の上に萬葉の一・二或は八・十あたりの詠みぶりだけでなく、もつと萬葉のすべてに互り、記・紀の歌の姿にも執りました。神樂・催馬樂以下梁塵秘抄などの姿から氣分などをなぞつて見たくなりませんでした。併し、古今・新古今等には、決して近づく氣はありませんでした。唯、玉葉・風雅を樂しむ事をわると思へませんでした。徳川期では、桂園派は、此派の歌をひねり出

す事が必修學科となつて居た學校に居て、私ほどあれを忌避する人間もない程、興味の持ち方が、てんで、ありませんでした。併し、學生時代に諸平を發見した時は歡喜しました。その學生時代の驚きは、半分以上色が褪めて了ひました今でも、諸平を眞淵の下に置く事は肯じたくありません。

子規から傳統的に「わが佛」として來た元義の氣魄と單純も、宗武のおほまかな、とぼけた様な味ひも、私には徳川期第一と推す程には感じませんでした。其癖、子規の『竹の里歌』並びに『竹の里人選歌集』は、私が小爲替を組んで東京の書店からとりよせた唯一の機會をこしらへた書物でした。さうして、早熟な中學生なる私——此は仲兄の刺戟によつたのは勿論です——は、當時既に「瓶にさす藤の花ぶさ」の氣分性を直觀して居た様です。「若松の芽だちの緑」も「紅の二尺のびたる」も皆二重丸をつける程に漠然とながら理會して居たのは、嘘や自慢ではありません。子規のひようげた、とぼけた様な、悟つた様に執してゐる様な讀みぶりにも、今とは違つた鑑賞法からかも知れませんが、胸すかす様に感じたませた心を持つて居ました。「がらす戸」の外の鳥籠の歌などの、靜かな、正確な、第一義に於ける寫生に徹して無意識ながら象徴に赴かうとした——あらゝぎ派態度の發足點なる、——味ひをも解して居た様に思ひます。今まで讀んだ歌集の中で一番度々くり返したのは、萬葉集と柿園詠草と、この假とぢの貧しい竹の里歌でした。何でも點をつけた痕などを見ますと、朱點・黒點などをいんぎでつけて居ます。だから、そ

の卒讀の度數は、今からは思ひ出せぬ程、度々だったのです。

さうした尊敬は、子規の世間相手の功名心、野心の盛んであつた事を、その後四年級頃に子規隨筆を見て、隱遁的道德——といふより寧ろ美化の境に入つた好尚——を持つた事を、私は知つて、その文學の值うちを少し感情的にへらして感じる事もありましたが、今までも、小澤蘆庵の歌に見る様なその俳句よりも、尊敬し、子規の名歌を早くより知り辨けて居た事を多少心に誇つて居る私です。而も、子規の推賞した二人の歌人を、一人は生活態度と作物との合致を喜びます。一は、眞淵・在滿等の添刪を経たものもありさうな疑ひを持ち乍ら、小ざかしい歌、調子の片上りなのを喜んで居た時代に、おほまかな一首に通じた調子を唯一人持つて居た事に個性を著しく出して居る點から、推す事をためらひません。併し、どうも子規の鑑賞法は同化する事、といふより寧ろ征服せられる訣にはまゐりませんでした。

中世の人で、子規は今一人を推して居ます。實朝です。實朝の歌も、一部分の作物は非常に氣魄が充實して居るに拘らず、大部分は、新古今にも歓迎せられない様な歌なのです。私は疑問を子規の味ひ方に持たずに居られませんでした。子規といふ人の鑑賞法には、正風の俳諧から發生した人生をある距離の處に据ゑて、沒交渉な態度で興がるといはうか、同感も持ち、自分らも其形を以て生活して乍ら、製作時には、美化といふ舊美學の理想にあてはまる超越味を、當時の大學派の美に對する考へ方に照し併せて、此を日本固有の美的情操と信じ、自分の文學論に、理論化

して、誰を相手にとる事も辭せない激しきで宣傳したのである。それで、外の鑑賞法も——複雑な性格の人であつたらしく、又讀書も多方面に統一なく互つて居た人らしいから——持つて居ながら、それを第一位に据ゑて、三井甲之さんの、茂吉さんを罵つた飄輕趣味——茂吉さんの歌を此考へ型に入れては、稍見當が狂ふ様である。『赤光』時代の歌は、血氣の青年のやるせないあきらめがすてばちな發想を呼んで、さう言つた形をとつた飄輕とも見え、耽溺とも見え、變態心理を谷崎氏以前に文學化したとも見えるが、中心の情調は、あきらめから來る寂しさと、一つを思ひ捨て、他を求めようとする衝動から出て來てゐるのです——に近づいてゐる。元義を愛したのも其、宗武も其規範に入つたのである。

實朝は、眞淵の推賞はあるが、その名歌もわりに人の喧しくもてはやさない處から、一つは萬葉ぶり復活の最初の人としての尊敬からして、多少囚はれた立ち場に這入つて行つたものかと考へると、實朝にも名歌といふべき萬葉ぶりの歌には、おほまかな小ざかしくない、飄輕と言ふより偉大な間拔けとも言ふべき悠々とした處がある。その調子と、それが規定する發想法に打たれて、他の流行を逐うた歌は大目に見過したものであらう。元々實朝だつて、師範者がなかつたとは言へない。師範者が替るか二人同時に頼んで居たとすれば、古風・今様兩様（古今・萬葉ぶり）を作り分ける事もあらうし、又其等の師範者の添刪によつて、一樣の表現法が二様に岐れた姿をとる事もある筈である。「八大龍王」の歌などは釋教の歌などにはあり勝ちな形式で、僧家の歌には、

やゝ自由律を認めて來た習慣が、公家の方にも試みられるほどに一種の歌風をなした。天台大師をはじめとして、多少音脚を無視した佛語入りの歌が如來菩薩の作としても現れ、僧侶の破調歌ともなつて來たのであります。

實朝と時代を等しく、境遇・宿命までも一つにした様な良經の如きも、「思惟時色 うき世の人を誘ひ出でよ。入於深山。思惟佛法」といふ様なのをこしらへてゐるが、八大龍王だけのおほまかさと間ぬけ方と氣魄とがないのは、事實である。ともかくも氣魄は萬葉風にも考へられるが、釋教の歌としてはあるべきはずの調子の強さである。

實朝が釋教歌にかなりの數を残して居るのは、王朝持ち越しの佛教の形式享樂、貴族の最上の趣味として尊ばれた宗教上の理會——寧ろ信徒の形をとる事が、上流人の意識を強める要素となつてゐたからである。——を銜ふ時代の傾向が更に深まつて、聽聞・質疑などの道樂から、經文の知識を銜ふまでになつて來てゐたのである。唐才——經世の爲の漢學素養のある事——だけでは誇れなくなつて、内典にも知識を持つて居るといふ社會的虚飾が行はれて來たと見られますので。京風に準據して、家庭生活を改めた武家出の貴公子が、京風俗をその儘にやまとうたをも弄び、此頃から鎌倉六波羅あたりの關東武士が公家生活をまねる事が流行しかけて、新古今の次の新勅撰集を「宇治川」と異名するに到るほどになつたのである——實朝はさうした仲間の中、鎌倉居住者として京風移植の先進のはいからだつたのである。だから唐才も、可なりあつたであら

うし、佛いぢりも啓蒙的教育も受けてゐたに違ひない。

實朝の萬葉は、畢竟基俊の作物が萬葉の影響が稀薄で、唯古今・萬葉の理會者といふので人を驚したのと、動機には大差はない。唯、萬葉學の進歩した時代だけに、理會と同感は基俊等の比ではない。その作物も、其から出發して萬葉の歌風に直觀が鋭くなつて來たのであらうと考へます。それに武家の出といふ氣稟が、萬葉ぶりに由る方が本音を出し易かつたのでせう。けれども、世間の交際上當用の歌風は古今風だから、自然其方の傾きが多く出て來たのであらう。必しも年月の新古に由つて新舊の態度を極めることも出来なからうと思ふ。

ともかくも、たけ優れた萬葉ぶりの歌には、誇りを持つて、萬葉にも經由、京の宮廷などに對しては、今様を以て、將軍家の面目を保たうとしたと見ればよくわかる。子規の推賞した歌（中絶）

一人の見た過現未

昭和八年一月「アララギ」第二十六卷第一號

アララギには、ずるぶん無沙汰をしてゐる。いつも、其を思ふとひそかに悔いを感じる。せめて知人の間だけでも、すべてが聰明であつたならと、いつも考へることだが、事に當るとやつぱりさうはいかない了ふ。

かういふ不自然な氣持ちが横つたまゝで時が移り、人の上に、色んな變化の來る事が虞れられる。さういふ有様で、赤彦を見送つた。千櫨さへもの言はぬ人になつた。互ひに靜かに考へると、何よりもまづ、深い好誼を感じる間であり乍ら、殊更にこだはつた氣持ちを保つて居なければならぬ、人そのものゝ世間があさましい。アララギを去つて時が経る程、美しい友情を取り交した側ばかりが、まざ／＼と目に浮ぶ。私は今とり止めもない、私だけに繋つた昔話をするを許して頂く。

「アララギ」の前身である所の「馬酔木」の出た噂を聞いたのは、大阪の中學初年生の頃であつ

た。その頃、東京での特殊な雑誌を取り扱つてゐる店は、大阪中に三軒——或は、四軒か——しかなかつた。私は根よく、月初め毎に雑誌屋を廻つて、「馬酔木」を問うて歩いた。かう言ふ事をくり返して居乍ら、此雑誌に限つて、竟に一冊も手に入れる機会に會はないでしまつた。そのうち、さうした關心が薄れて了うた頃、偶然、而も四・五冊を一度に發見した事がある。その年月は、今確かに思ひ出されない。處は大和宇陀郡である。古市場と言ふ村があつて、其處の神職の家が、私の遠縁に當つてゐた。伊賀大和境の高見山に登つた時の事、私はその家に立ちよつた。さうした家の息子であるに似合はず、京都同志社にゐる長男があつて、その持つて歸つたものだ、といふ書物の積まれてゐる机の上に、永く焦れてゐた「馬酔木」の、而も數冊を發見したのである。

恐らく發行部數の極めて僅かであつた筈の「馬酔木」が、宇陀の奥に數冊あつたと言ふ事は、昔の根岸短歌會にとつては、記憶せられてよい事だ、と思ふ。近年その雑誌の所有者であつた神職の長男と同苗の人を、前田夕暮氏の雑誌の同人の中に發見して、懐しく感じた。手を廻して聞いて見た處、其は、全く同姓にして、異人なるものであつた。

「アララギ」すらも、私は第一號から見たかどうかは記憶にない。唯青いらしや紙表紙の印象が深く残つてゐるのから見れば、多分、その頃から手に入り初めたのではなからうか。多分、神田

三省堂の西隣りにあつた上田屋の盛んだつた頃、その家か或は、東京堂で、ひよつくり見當てたのだらう。胸の踴躍だけは覚えてゐる。而も一號毎に、神保町へ買ひに出かけた様に覚えてゐる。あれを思ふと、「アララギ」に對して、全く誰一人知れなかつた時代の愛讀者の一人として、堪へ難い懐しみが呼び起される。

今から思へば、畏友古泉千樫の歌は、若者を牽き寄せる甘味があつたのだらう。本道の彼人のよさなど訣る筈のない、國學院の一書生が、「アララギ」を擴げてまづ目を走らせるのは、その作物であつた。その後、ひいき作者を次第に移して行つたが、その先輩たちに對して、末座乍ら同人の列に加らうとは、思ひもかけないことだつた。忘れもしない、子規庵の根岸短歌會の例會に出かけたのは、飯田町の學校を卒業する前後であつた。何でも、初夏のことである。

私は、効果あるこんとを作るつもりは、全くない。その初めての出席に受けた印象は、茂吉さんの書生羽織に懸つてゐた紙縫りの紐と、千樫の思ひがけなく歌人らしくなかつた、ぬつぺりした平おもてと、或はいつからさう言ふ執意を作つたのかも知れない所の、左千夫先生の大きな懐中時計と、あの近邊の仕出し屋からさし入れた特殊な辨當の形などである。この歸り道で茂吉さんが、私に對して、形容詞こほし（戀）の活用を木村正辭先生に承つておいてくれ、と託せられた詞を覚えてゐる。その後、年を隔て、逢ふまで、その責を果さなかつた所から見れば、或は、其が二度目に出席した時かも知れない。

私は根岸の會の數日後に大阪へ歸つたまゝ、滿四年あちらに止つてゐたのである。或は既に、何かの機會に、この雑誌に書いたかも知れないが、退京直後、旋頭歌十數首を出詠して、五首ばかり左千夫先生から採つて頂いた事であつた。その雑誌の表紙が亦、先に言つた青紙の印象を残してゐるのだから、我々の記憶はあてにならない。私は他の先輩方と違つて、不爲合せにも、左翁から手を探つて導かれたのではない。而も、是より四年程前、國學院の本科に上つた頃、服部躬治先生のお宅に、僅かな束脩を捻つて、弟子入りして二度か通うた。だから、出發點からして、根岸派一本で、通して來た者ではなかつた。此なども、後年「アララギ」を去る一因になつてゐるさうに思ふ。さう言へば、白秋氏なども、躬治先生を選者としてゐた雑誌「文庫」の、有勢な投稿家の一人であつた。その頃、同じ應募者の中に、信州諏訪の人として、諏訪脩文郎・柳の戸など言ふ人があつて、非常に趣きに富んだ歌を始中終選抜せられてゐた。後年ふとした聯想から、赤彦に、其等の中に、その匿名があつたのでないかと尋ねて、とんだ思ひ違ひだと悟された事さへある。

この話は、もう止めようと思ふ。なぜなら餘り私に即き過ぎて來た。「アララギ」に關聯することが、極めて稀薄であるから。唯ともすれば、創作動機のにぶり易い私、殊にあの當時を思ふと、

歌など楽しんで居れる私ではなかつた。その後とても、間歇的に休みの来る私の文學である。其をとにもかくにも、或期間殆、をやみなしに續ける事の出来る様に爲向けて下さつた先輩諸氏の志を思ふと、色んな考へ事はけしとんで了ふ。而も、最感謝しなければならぬのは、感傷そのものが文學價値を構成すると思つてゐた私を、殆根本から鍛へ直して下さつた事である。單に文學の上でない。人間としても、出直しであつた。大なり小なり、この雜誌と關係し、又手を放つて遠くへ行つた人は、數へられないほど多くあるだらう。だが大凡、其等の人も、この點のよい影響は持つてゐる事であらう。

私などに言はせれば、「アララギ」の文學は、成人の文學である。若輩な理論や、方法に煩はされる事なく、時としては、頑固すぎてさへ見える歩みやめなかつた。他の文學が、とつかけひつかけ、その主張・態度を提供してゐる間に、寫生一三昧で、未熟不鍛鍊な人々に、謂はゞ強い成年戒を授けて來た訣である。

私の知つてゐるだけでも、あの人が、と思はれる人で、「アララギ」の門をくゞつた人々を、可なり多く數へる事が出来る。たとひ、表面に於て意識する所がなくても、その人々の内界が、曾ての「アララギ」の素朴な理想が、根を張つてゐる事を看取する事が出来る。又、考へられなければならぬ筈だ。

をか目から見れば、「アララギ」は、今方に飛躍の時に會うてゐる様に見える。この時過ぎて顧みたら、或は大きな變化の痕が見られるかも知れない。だが今日までの所、その蹈みしめて來た行きあしは、ちつとも揺いでゐない。文壇を見渡しても、又文學史を通覽しても、此だけ、守るべきものを守り遂げた團體と言ふのがあらうか。

アララギ同人の後繼者に備はる人々の中、志ある方には、靜かに「アララギ」の進んで來た痕を、今の中に考へて置いて頂きたいと思ふ。其は、單に歌風の移り替りについて言ふだけではない。

「アララギ」特有のてくにつくの内容の推移を考へるのだ。此は、是非して置かねばならないことである。今まで、ほんの處、文壇の精神史と謂つたものはないのだ。

譬へば、今一番馳けぬいてゐる俳句の朋黨などを見ても、——あゝした發想法が、正道であるか、病態であるか、其は此場合、何の意味もないことだが——あゝ謂つた發想法をとつて來た過程は、是非考へて置かねばならぬ筈だ。さうした反省者を持たなかつた文學——或は文學にもならないものを多く含めて——は、其の、派生して來た徑路を文學史上に明らかにしない例が多い。俳句でも、早晚問題になる筈だ。其よりも、もつと大きな連歌や俳諧において、いくら論ぜられても、てくにつくの發生を考へる熱意が深くない限りは、單なる理會すらも出来ないではないか。つまり連歌俳諧史は、中斷した處から起つてゐる。

かう言ふことが、一派の文學の間になれば、其派の文學は文學史上に多くの疑問を残す訣である。譬へば、茂吉さんにはお咄した事だ。どうして、近來の齋藤氏流の律を持った歌が出て来るか。此は、作者自身の内證による外はない。謂はゞ茂吉さん自身、句讀——と言ふと、外的でいけな
いが——拍子を示して置かれる必要がある。其は、單に形式の歴史觀に根柢を與へるだけではない。鑑賞に全的に働きかけることだ。さうした細かな點だけでもない。單に一つの用語が持つて
ゐる僅かな陰だけでも、其が、「アララギ」の様になつた大きな朋黨では、互ひに助長する所が深
い訣なのだ。故人でいへば、赤彦の用語例でも訣る。私は、「アララギ」に止る小問題ではないと
思ふ。岡大人が、時々して下さる子規に關する断片的な話材でも、其が根岸派の考察にどれだけ
深い根據を與へて來たかを思ふと、何もかも此まゝに、唯時と共に外的の昂奮に押されて進んで
了ふのが、怖しくなつて來る。

現に、土屋氏などの作風で考へても、既に新態に移らうとして、今その模索最中——と言ふより
も、氏においては、既に解決はつき乍ら、如何に享け入れることが出來ようか、人々の理會を試
みてゐる——である。かうした微妙な動機などは、是非記録せられねばならぬものだ。私は、此
せつばつまつた今を言ふだけではない。もつとく廣く、「アララギ」に對する反省を深めて行く
ことを言ふのだ。創作動機に與る所なき單なる歴史を望むのではない。かう言ふ點の明確な詮議
は、更によい力として強く作物の上に蘇ることゝ思ふ。

私の最初の計畫に、まう一个條あつて、不完全な文章も、やゝ意味を纏めるのだつたが、今はあわた
だしく筆をすてる。好宜を持つての深い理會を請ふ。

去七尺狀

昭和十三年十二月「短歌
研究」第七卷第十二號

舊師武島羽衣閣下。

飯田町の古い校舎で、今は亡き友人と二人で、あなたから一週間二時間づゝ一年に涉つて、御垂教を授かりました。其も三十幾年前のことゝ過ぎ去つた唯今からは、夢のやうな懐しい追憶になりました。あの一年間に教へて頂きましたのは、確かみんちえすたあ氏の文學概論で御座いました。當時自然主義が文壇を蓋うて居る頂上で、すべての文藝態度が、根こそげひつくり覆された頃でした。其で、私の教はりました翌年、おなじ講義を聴聞した野々口、井淵、太田——皆今は亡くなりました——などは響を揃へて時間毎に、先生の講義に反抗して、後で得々と青年らしい自慢をするのでした。つまりあの數年間が、日本の文學者を本物に鍛へ直すか、もうそのまゝ錆び果てさせるかと言ふ岐れ目だつたのだ、と今では思ひ返されます。當時それほど、文學の事も何も知らなかつた白面の書生であつた私どもは、先生の讀まれる本の行間から流れ出る先生の聲に、聞き呆れて居ました。だが正直を申せば、時代は畏しいもので、世間知らずの我々でも、實

はみんちえすたあ氏の理論には、反感を抱かずに居られなかつたのです。事毎に反對を強ひられてゐるやうな氣のしたものです。其後の文壇は、自然主義が幾度もくく吟味し直されて、あの流行の正しかつたことが、愈、明らかになつて参りました。みんちえすたあ氏の考へ方は、私どもの頭だけに長く残るだけの事になつてしまふことでせう。追憶のよろしさは、恥しいことも、さもしかつたことも、汚れきつたことも、一樣に光明にあてゝ考へ直すところにあるのだと存じます。かう言ふ意味において、先生から教はつた事にしなやかな回想のなめしをかけて感じてゐるのです。

私どもの出ました國學院の大學部と申すところは、豫科二年、本科三年の間に、百數十人の先生がお見え下さつたことです。其でつくづく、昔の寺子屋風に、一人の先生に、學も行も見て頂きたいと思ひ歎じたことが、幾度だつたか知れません。其中でも、三矢重松先生から授かつた事は、一生感謝しつゞけても御禮が申しきれません。まづ人間にして貰ひました。私は學者であり、又歌人であることよりも、人間らしい考へや行ひが、少しでも出来るやうになつたことを喜んでゐます。次は金澤庄三郎先生です。學問の上において、三矢先生と、金澤先生との感化は、今考へても恐しいまでに、私に印象してゐます。

先生には残念ながら、其程時長く接することが出来ませんでした。其で勢、——甚申しにくいことですが、お人がらとしての懐しさの外は、影響らしいものは残つて居ません。その後友人花輪

君から、先生のおだしい御性情などを承つて、懐しきは深めて居りました。

お免し下さい。百幾人の先生に對して、一々等分に感謝を捧げるといふことは、人間として出来ることでもなし、又其をしようなど言ふ正義派の人間があつたら、却て人情を失つた人間になつてしまふでせう。先生に答状を上つて、お考へ直しをして頂かうと決心するやうになつた一つの理由はこゝにあります。舊師に對してつべこべ抗辯するのは、道でないやうな氣を私の中に棲んでゐる昔氣質が起させます。三矢先生金澤先生と謂つた間がらすと、私は理も非も御座いません。直に屈服いたすこととせう。だが、あなたに對して、さう簡単に自我を棄てゝまで、御説承引せねばならぬとなりますと、今の世の數十百人の先生に事へるといふ師弟道からして考へ直してかゝらねばなりません。勿體ない事ですが、其で一言、舊恩師あなたの御反省を促す勇氣を振ひ起しました。其でなくては、學問が腐敗します。理不盡な事を言ひかけられても、他生の縁と謂はれる袖の行きずりの懐しみによつて、學問の正理を、犠牲にせなければならぬのでは、抑學問の面目が何處で立つのです。

本居宣長翁は、賀茂眞淵翁に對して、叱られてもくゝ抗議質問の狀を出して居られます。「さうさせて頂かねば胸のはちすが開ける氣がしない」と謂つた風の美しい、又謙遜な語の裏に、激しい氣を迸した抗議を書かれたのです。先生は眞淵でおありになつても、私は宣長を以て自任する者ではありません。だから、此から申すことも、本居翁の申し狀以下に謙虚な心持ちのあること

をくみとつて頂かねばなりません。

今一つ、其も、歌をあなたから一年でも教へて頂いたのなら、其としての禮儀は保ちたいと思ひます。現に、千葉胤明先生には、豫科一年生の時、常に學校課題の歌に點を加へて頂きました。其だけの縁で、今まで幾度も、海上胤平翁の先蹤を追はうと言ふ公憤の志をさへ壓へとほして來たのです。「千葉先生にすまぬから」かう言ふ心持ちも考へて頂きます。若い者にも、昔風な義理人情は行はれて居るので御座います。

説明の都合で、語氣が不遜に傾く所がありましたら、其はお許し下さい。さうした機微のお訣りになるだけの教養と、東京の眞中にお育ちになつた先生の聰明に信頼します。

葛の花 踏みしだかれて色あたらし。この山道を 行きし人あり

『まことに幼稚ないひかたの歌である。「ふみしだかれて色あたらし」では、色だけが惜しいといふ事になる。白くさいた葛の花のふみしだかれてゐるのが惜しいといふ事であらうから、かやうに曰つたのでは適當してゐない。』

心なく山道ゆきし人あらむふみしだかれぬ白き葛花
などなければならぬ。』

失禮ながら、御文章をすつかり引きあひに出させて頂きます。さうしないことには、人間の弱さ、

自分の都合のわるい處は顧みて他を言ふと謂つた形になることもありかねませんから。又、世間の人にも、どちらに正理があるか。枉げて物を言つてゐるか。師匠か弟子か、と言ふことを明らかに見て貰へると思ふのです。世間の思はくなどは、實は、私ども問題にもして居ません。世間は世間、私は私なのですから、そんなことはどうでもよいのですが、後進のまじめな人たちが、私の申す所をば、少しでも自分たちの作物や製作態度に引きあてゝ反省してくれる機會を作ることもならうかと思ふのです。

「幼稚な云々」の表現に對する總評は、あなたがさうお感じになつたのですから、致し方は御座いません。此は時をおいて見て、自然お考へ直しの時節の來るまでうつちやつて置くより方がつきません。

「色だけが惜しい云々」のお話は、お師匠のお話とも思へません。あたらしはなる程、あつたら惜しい、といふ語に佛を残してゐるやうな用語例の續いた時代が長かつたのは勿論です。だが、「新し」と言ふ用語例を用ゐても、間違ひでもなく、風雅——かうした境地も、我々は愛します。だが其を風雅といふ感じ方では受けとらないのです——でないといふこともありませぬ。

葛の花の落ちたのが踏み蹂られて間もない。其赤みを帯びた紫の花房が、道の上に滲ました色もそんなに變らずにある様子なのです。なるほど、色が惜しいとか、勿體ないとかでは、ものになりますまい。又そんな處に愛惜の心を寄せようとする作意の心持ちは、私どもの排して來た所なのです。つまり先生が、さう言ふ感じ方・味ひ方・作り癖に馴れて入らつしやると言ふことになりはしないのでせうか。甚失禮な申し分だとは存じますが、さうでも御辯護申しあげねば、あなたのお感じ方がひどく磁氣の嵐を起してゐることになるのです。第一、「色だけが」と仰つたお氣持ちは、甚あたじけない話で、乃公ならば葛の花を全體を惜しむのだ、と言ふ口ぶりに察せられます。

其よりもつと、先生に對して甚申し上げにくい申し條ですが、言はずに隠して置く訣にもまゐりませぬ。「白々さいた葛の花」「ふみしだかれぬ白き葛花」。あちこち風雅の旅をなさつて入らつしやる先生とも思はれませぬ。白い葛花など言ふものは、ある訣のものでは御座いませぬ。葛の花は、古典にもよく出てまゐりますのに、あなたは紫に咲くことを御存じなかつたのですか。誰だつて神でない以上は知らないことだらけで、私などは殊に痛切に、又常に冷汗の流しどほしなのです、葛の花位は知つて居つて頂いてもよいと存じます。又、第一古い弟子の歌だからと言つて、添削に事を缺いて、ありもせぬ色彩を葛の花に與へたりなされては、直された者がさうで御座いますかと申されなない訣です。葛の花の色を御存じなくば、白とも何とも仰らなかつたらよかつたのです。御評言ではありませんが、「かやうにお直しなさつては、適當してゐない」と申さねばなりません。

先生。そつと申しあげます。藤には白藤もあります。きつと其思ひ違ひでせう。ともかくこの愚

作のお評は、全部残念ながら、お落第です。

私自身のつもりを申しますと、此歌には散文詞をとりこまうと言ふ計畫があつたのです。其でしかだかれてだのといふ、所謂殺風景な感じのある語も入れ、色あたらしなど言ふきつぱりし過ぎて感情の流動を堰きとめる嫌ひのある詞なども使ひました。行きし人ありなど言ふぶつきらぼうな投げ出した様な表現も試みたのでした。もう随分昔の作物ですが、當時の心持ちを覚えてゐましたので、申し添へました。若し、此點に觸れられたのなら、一應先生の直觀力に脅えを持つたでせうのに。先生は日本橋の眞中のお生れですから、芝居はお嗜きの事と存じます。伊賀越岡崎の幸兵衛住家で舊門弟正太郎の唐木政右衛門が、幸兵衛の腕前を讚美して「まだお手のうちは狂ひませぬなあ」と申すではありませんか。どうか、舊師匠山田幸兵衛の狂はぬ腕を見せて頂きたいものです。さすれば、正太郎は、撃たれても叩かれても、喜びの涙に咽ぶことでせう。御添削は御苦勞かけました。一應はお禮の御挨拶を申し述べます。さて、禮儀は禮儀として、困ることがあります。

「……色あたらし……行きし人あり」ですら、因果關係が露骨に感じられはすまいかと案じて居た位ですのに、先生はもつとむき出しに申されました。「山道ゆきし人あらむ」と推測し、更に其人のふるまひを「心なく」と味をつけて見て居られます。踏みつけてある葛の花を見て、心ない山人のわざを思ふと言ふのは、作つた感情です。又近代の歌人がくり返してゐる類型です。そ

んなに見ないで、唯自然の中に、殆自然と同じ様に蹂躪せられた葛花の色に、心をとめる事が出来ないのでせうか。

外國の美論や藝術論や、文學論の本は數限りなく讀破なされた先生です。類型がどんなに藝術の毒であるかと言ふ事は、御存じになり過ぎて入らつしやることを疑ひません。だが、短歌では誰しもうつかり類型の誘惑にかゝるものです。どうか其だけはお注意願ひます。

ともかく此お手入れも不成效です。第一、白き葛花では、盲劍法の感じでした。うっかりすれば、政右衛門もとばしりを受けます。まあ殺生な虐殺式の切りつけ方です。澤井股五郎式の大刀筋です。彼實録でも、存外手の内がよくなかつたやうに傳へて居ます。どうか幸兵衛なり、政右衛門なりの本格式の劍法を使つて頂きたく存じます。

むら山の松の木むらに 日はあたり、ひそけきかもよ。旅人の墓

『一首要領の得られぬ歌である。第一「ひそけき」など言ふ語は、存在してゐない。「ひそかに」とか「ひそやかに」といふ立派な言語があるではないか。又「ひそか」といふは、こつそりと秘密にといふ意である。旅人の墓がひそかにありとは何の意とも分らぬ。又日があつてゐれば、中が明るくなるから、ひそかなる理由もない。旅人の墓も突然である。端書がなくては十分の了解が出来ぬ。よろしく

むら山の松の木むらに日はさせど寂しきかもよ旅人の墓

と改むべきである。』

この評は、前のよりは、大分本格式のお物言ひで結構です。先生の周囲の人たちには、なるほどとうなづく者があるでせう。

まづ第一に、端書がなくてはと仰いました。此は御深切な見方で、短歌ではさうなくてはならぬいことで御座います。端書の価値は、所謂新派——名譽な稱號とは思はれませんが——の間でも、根岸派では、早くから申して居たことです。だから御覽下さい。私の歌集『海やまのあひだ』の「供養塔」と言ふ章には、

『數多い馬塚の中に、ま新しい馬頭觀音の石塔婆の立つてゐるのはあはれである。又殆、峠毎に、旅死にの墓がある。中には、業病の姿を家から隠して、死ぬるまでの旅に出た人のなどもある……』

と長過ぎる程の詞書をつけてゐるのです。『海やまのあひだ』さへ御覽下されば御垂示は、春の日の氷と融け去つたでせうのに。

問題にしないならともかく、問題にする以上、詞書があるかないか位、お調べ下さらないと變では御座いませんか。あるものをないとい仰るのは、大變迷惑に思ひます。私だからよいものゝ、外の人だつたらどう申すでせう。ひたすらお沈思を冀ひます。簡単な選集や、又そこらに散らばつてゐる赤本屋出版の本などを準據に遊ばしては、慎重なお人がかゝはります。恐らく先生の

お傍に出る若い人などが、問題になりさうな歌を擇んで、お手もとへさしあげたのでせう。どうか、その邊の御注意は、今後とも願はしう存じます。

口はゞつたい申し分ですが、私は詞書は、短歌に風情を添へるといふ點に重きをおいてゐます。詞書に安んじて、獨立性のない歌を作るやうなことはせぬやうにして居ります。「要領を得ぬ」と仰いましたが、どちらかと申すと、要領を得過ぎて、にほひが乏しいのぢやないかと案じて居た位なのです。まあ併し、其は人々の感じ方一つなものですから、爲方はないと致して置きませう。實はさう言ふ處を徹底して、理會して頂けるやうにするのでなくては、文學の科學的研究と言ふことが行はれないのですが、如何に何でも、先生に對して、賣り語買ひ語式に、子ども扱ひな申し出は、私には出来ません。

「ひそかに」が「こつそり」を第一義としてゐるらしく見えることは事實です。ですが、其が常に、第一義でなくてはならぬと言ふ理由はありますまい。出来るだけ、古典的な用語例によつて行くのが本道ですが、古典學者の知つて居るだけが、古典の眞の用語例ではありません。古典學者は、古典の一部分しか知らないのです。其は、僭越ながら私も、身を以て常に痛感してゐる所です。だから、近代・現在の學者の作つた辭典や、古言梯・古言譯解や、乃至は雅言俗譯・俗言雅譯式な書物にないからと言つて、なかつたとはきめてしまはれないのです。其邊の御調査はよくお届けで御座いませうか。又今頃、幾ら雅言ばかり使ふにしても、第一義ばかりを固守し

て居るおつもりも御座いますまい。ともあれ、あることの証明はむづかしく、ないことは、用例の見出されるまでの間は、ないでおし通されると言つた、かたはな學問の爲方がのさばつて居る世の中なのです。文獻に見つからないと謂つたところで、絶対になかつたことではなく、文獻に残つてゐる方が、實際用ゐられた言語の何百分の一、何千分の一、何萬分の一か訣らないのです。歌集にないと言ふことは、わりあひ樂に言へませうが、物語日記からはじめて、鎌倉・室町——江戸までの間の言語は、文獻だけの調査すら、まだとても行き届いて居ないので。殊に用言では、ある活用だけは文獻に出て、おなじ語の他の活用は現れて居ないと言ふこともあるのです。其と又反對に、ある活用はあり乍ら、ある活用は備つて居ないと言ふことも勿論ありますので、一概な事は申されません。私も、師匠がお二人とも語學者でしたから、言語文法の研究は、決して疎かにはして参りませんでした。御安心下さい。たとひ短時間でも、あなたに教へて頂いたと言ふ體面を汚しはしませんから。又第一、そんなことがあつては、過ぎ行かれた三矢先生にも、また御健在の金澤先生にもお叱りを受けませう。あなたにお叱りを受けるまでも御座いませぬ。ですから、まづ、言語文法の方面は、私にお任せ置きになつてよろしいでせう。口廣い申し條ですが、専門でこそなければ、此で訣つてゐる方々には、語法・語學の方の學問の信用も、少々はあるので。だから、あなたから中等教科書式の啓蒙文法を、今更教へて頂くには及ばないので。又そんなことを教へようとなされるのは、抑、師匠權の濫用だと存じます。三矢先生や、

金澤先生すらも、語學上の事で、啓蒙的な方面を私に説かうとなされた事もなく、安心して下さつて居りました。どうかその點は、御放念下さいまして、文獻に用例があるかないかをよくお調べ下さいませう。「誰某がさう言ふ説だ」では、先生、あなたのお説として力あるものでは御座いませぬ。『ひそかに』とかひそやかに、といふ立派な言語があるではないか』と仰る處を見れば、此形にも、靜かとか、幽かとか、寂しとか言ふ義のあることをお認めのやうに察せられます。が、すぐ後に、「ひそかに」は「こつそりの意」だと、言はれましたのは、唯、ひそかなりとかひそやかなりと言つてもよいではないかと言ふ御注意なのでせうか。「ひそけき」「ひそけし」と言ふ活用が、完全に備つて居つたかどうかは、私も初めから疑問にしてゐたのです。だけれども、形としては當然あつてもよい形だし、——さうだから、あつたと言ふ様な非科學的な事は考へて居ません——又あつたかも知れないし、又ないにした處で、造語といふことが御座います。先生あなたは絶対に造語がいけないと仰るのでせうか。其なら、その方面のお相手はお断り申し上げます。何故なら、昔から優れた文學者——私を言ふのではありません——で、造語した者は多いのです。造語も規則正しく、あるべき形を逐つてして行くなら、文學作者として當然許されてよいことなのです。其も學問もなく、又文學情熱の低い黄口の輩が、むやみに造語するのは困ります。唯今の世間通用の新語見たやうな、情ないことになります。ですが、——たかぶつて申すのでは御座いませぬ。およろしう御座いますか。私ども位でも、文學に與つて居り、言語に對して苦勞し

て参り、其を學問として又研究して來た者が、此程度の造語すら出來ないとすれば、あまりにをかしい事にはなりは致しませんか。其とも、「ひそかき」「ひそけり」とでも申すなら、お叱り下さい。どうも、私自身でも反省すると、ひやりとする事がよく御座いますが、弟子の中や、又世間の若い人の造詣を見くびり過ぎる弊が御座います。どうも少し、私を「吳下の舊阿蒙」扱ひになさつてゐるやうです。

學問上に、そんな語を用ゐたり、又論理は合つてゐるからとて、證明なしにその存在を主張したりしては、いけないにきまつて居ます。だが文學では、この位のゆとりはつけて頂かなくてはなりません。よし、又、先生がつけなないと仰つても、私どもはどん／＼脇目に見過して通るでせう。第一は、私も此で、文學者のはしくれで御座います。今日ある語に文學者の造語から出たものが、一つもないと仰るなら、仰る御勇氣があるなら、御主張は御主張として、お認め致してよろしう御座います。單に啓蒙文法から申されたのでは、何だか此頃子どもの弄ぶ竹の機關銃を打ちかけられたやうな氣がします。幾ら先生の仰せだからと言つて、お義理にも、だあと死んだ眞似が出來ますものですか。「ひそけき」は理くつに合つた造語でも、感じがわるいと仰るなら、其は理由は立ちます。其點は、私も苦勞して、この生々しさを消さうとした覺えがあるのですから。「ひそか」はこつそりと、祕密にといふ意を仰いました。此も無理です。辭典の初歩的な書き方をそのまゝ鵜呑みにすれば、さう言ふことにもなりさうです。おなじ辭書を引くなら、この頃出

來の辭書が皆孫引きする雅言集覽を引いて頂きます。其よりも更に、原書から集めて來て頂ければ結構です。個性から出た用語例の比較研究が出來ませう。もつとずつと古く、類聚名義抄や伊呂波字類抄などに當つて貰ひたいものです。獨特なさうして謬らぬ意義の把握が出來ませう。此は世間一般の作者たちにも、申したいことなのです。

日本紀に澤山「ひそかに」に當る用字のある中、『願』の字を用ゐた部分は、大分ひつそりと言ふ意義に傾いてゐる様です。つまりひそめくと言ふ語、あれと同様な使ひ方です。多少意義が展げられても通用するものです。だから、こつそりだの、祕密にだの言ふ語そのものは、普通の内證に隠れ忍んでの用語例でないものにも、擴張して適當な譯語らしい假の妥當性を見せるでせうが、内實は違ひます。「願」の字は「言」の義の語を下に伴ふのが普通で、さうでないのには議論があります。だからひそめくと言ふことが決ります。ひそめくは靜かに物を申すのです。類聚名義抄「謐密シツカナリ」と音註、訓註があります。靜かとひそかなりとの關係が知れると思ひます。

願^ニ以^テ河内母樹馬飼首御狩^ヲ奉^ニ詣^{シテ}於^ニ京^ニ而奏曰……(繼體天皇紀)

此「願」は後の奏曰に對してゐるので、ひそかにの義があるのですが、「以」で受けてゐる爲に普通「領」と言ふ字に作られて居たのです。だから、こゝはしのびにとも訓まれかねない處です。

肆宴。爾乃情盤樂極、間^ヲ以^テ言談。願^ニ謂^テ皇后。曰……(雄略天皇紀)

此は御睦び言をさすのです。さゝやきです。

既而餘黨猶繁、其性難測。乃願勅道臣命……（神武天皇紀）

まだ／＼ありますが、こつそりとか、祕密にとか直譯すれば出来ないことはありませんが、顧の字義から言つて、親近なる人に私語する状です。

お擧げ下さいました「ひそやかに」の方になると、餘程「ひそめく」に近いので、ひつそりしてゐる様子、もの寂れた様なのは、申すまでも御座いますまい。同じ語の音韻を別にした「みそか」の方は、祕密に・忍びにとの意義に傾いてゐるのですが、「ひそか」の方は、大體に「ひそ」と言ふ語根からして、靜謐を示してゐるやうです。「ひそく」となど言ふのが其です。最初は細細とした音の擬聲だつたのが、副詞のひそか及び音韻分化したみそかでは、多くは祕密にと言ふ風を感じられる用語例が殖えたのだと信じます。其でも、元來のさゝめく、ひそめく、義は失はずに續いてゐたのです。ひそかに・ひそけくが訣らぬと仰るのは、どうかと思ひます。

日があたれば中が明るいから、ひそかでないと言ふのも、先生だけのお方のお話とも思はれませぬ。日があたつて居ればこそ、しんとした松村の墓の様子が強く印象するのです。譬へば秋の日を例にとつて見れば、よく訣りませう。照つて明るくても、しんとした感じは愈出るではありませんか。此が夏の日光でも同じことです。しんとして居る松山に當つてゐる日は、やつぱり落ちついた寂しさを感じさせます。「寂しきかもよ」と直して頂きましたが、勿論心の底には寂しさ

があるのですが、目にうつり、耳に感じた印象が歌ひたかつたのです。村持ちの山で、而も家々のとよみも聞えて來ない山裏、松の木むらの幹々に日が照り中つてゐる様子なのです。明るいからこそ、あなたの仰る寂しさも増すのです。此が薄暗いとか、雨がそぼ降つてゐるとかだつたら、どうなるのでせう。歌にするまでもない類型です。

旅人の墓も、突然だとの仰せは、最初の申し開きで釋けたことと思ひます。又、旅人の墓をそこで發見したのでから、突如とした感じがしたところで、不自然でもありませんし、何も全體の調和を破るやうな据ゑ方はして居ない筈です。どうも感じ方が、土臺から逸れて行つて入らつしやるのではないかと思ひます。若いまじめな學生が、「綜合詩歌」を讀んで、「又日があたつて居れば……」の處に讀み到つて、笑ひ出しましたので、こちらが恥しくなりました。どうか、頭から不十分な歌——つまらぬ歌かも知れぬが——つまらぬ歌ときめてかゝらずによく考へてから、御添削を願ひます。其でなくては、どちらが直して居るのだから訣らなくなつてしまひます。

ところで、直して頂いた方は、平易になりました。一應は感謝しますが、「日はさせど」は困ります。先生もつと上手に添削して下さい。日はさして居るけれど 寂しい と對照的に持つて行くのは、やはり類型表現です。そんな安易な風に歌はねば讀者に訣らぬと仰るなら、そんな讀者は、當方から忌避いたします。文學を墮落させますから。又さう言ふ讀者を心において、お作りになり、お直しになつて居るのでしたら、之をよいしほに御翻意遊ばしては如何ですか。さうすれば

私が叱られて却て、先生の文學がお浮び出になる訣ですから、私の受難——ちと誇張が過ぎますが——が讚へられてもよい訣になるのです。さうでは御座いませんか。

こゝまで書く中に、「短歌研究」の編輯員が、之をとり立てに参りました。「ひそけく」についてはまだ書き残しが十分にあり、其よりも肝腎、今一首「冬深く山はものげのなかりけり」の愚作のお添削を頂戴するか、のしのお返し致すか、その筋を書いて、弟子も此位の理くつは言ふと喜んで頂かうと思つてゐました。又最後まで親友として信頼してくれた古泉千樫の歌の爲にも、お添削を吟味してやりたいと思ふのですが、今日のところまづ此までに致します。

何分先生は、五行や六行でお書きになつても、お受けする方では、何故かう言ふ作り方をしたかを述べ、又お語の條理の立つて居ない點の御反省願はねばならないのですから、長くなつて實は私自身第一困りました。痩せ犬でなくても受け身のものは、損な分に廻る訣です。

後は又、暇を見て書かして頂きますが、くれぐれも先生を輕んじてこんな事を書いたのではありません。口答へするのを禮儀らしく言ひまはして、書かうとするのでもありません。どうもあなただの仰り方が、ちとおよろしくないから、忙しい時間を、何とか彼とくしてこゝまで書きました。此處で申し添へて置きたいことは、わたくしどもは十分禮儀をわきまへて居ることです。先生が——私如きはどうでも、齋藤さんのやうに、専門外ながら國文學に關して相當の著述があり、語

學上にも發見を持つ人や、古泉千樫のやうに物を澤山讀んだ人間で、立派な文學者である人を、ちと軽く扱ひ過ぎられた嫌ひが御座います。此は言ふまでもなく非禮です。私如きは、そば杖にいゝ先輩並みのお叱りを受けたことにはれがましさを感してゐる程です。

禮儀の學校で育ち、現に禮讓の教育を若い者に施してゐる私です。少々私情の、後髪ひかれる感じは御座いますが、先生に向つて御参考までに、新しい禮讓を説かして頂いたつもりで御座います。此が御垂示のおうつりです。

こんなことが申しあげられるやうになつた過程には、先生のお力もあるのですから、此際又更めて厚く御禮申し述べます。

新萬葉集の文學史上に持つ意義

昭和十二年五月「短歌
研究」第六卷第五號

われ／＼の時代に、——と申すよりも寧ろ、この意義の深い三朝の聖代に一つの勅撰集もないと言ふ事は、どうかすると寂しい氣もしたものである。つまり歴史——文學史的に見て來ると、興るべきことの興らないやうな心遣りが感じられるのである。

宮廷文學が、斯新コトしい御代の氣を佩びて、五百年を経て再興することを待ち望んで居たのである。さうして、其は多少空想を交へて申すも畏いが、前代とは稍俤を異にしたものになつて現れることであらう。かう考へて居た。宮廷文學と庶民文學との響きを交し、影を相重ねたものであるはず。五百年前までの庶民の生活と言ふものは、誠に微かなもので、宮廷の御事業に一臂の力をも添へ奉ることが出来るほどの位置にも居ず、又、やつと武家群が認められた以外には、まだ其々の社會としての姿さへ纏めて居なかつたのである。其が、其直後町人群が頭を擡げて來、其が分化して、色々な團體を作つた。さうして其社會の文學と言ふべきものが段々出來て來た。其だけ全面的に文學を知つたのである。其が短歌の側にもはたらきかけない筈はない。だから庶民の歌

が次第に盛んになり、殊にこの三朝の間において、新派短歌として、量的に言へば、無比の榮えを示した。質的に見ても、文學論の素地が出來てゐる時代だけに、謬らず「文學」に這入つてゐるものが多い。唯、短歌の本質と聯關深き「感激」の點において、第一期古典時代と言ふべき——短歌勅撰以前には劣つて居ないとも言へない。が、勅撰集時代のどの時期と比べても輸け色が見えるとは思はない。

だが、欽定事業は、其が如何に美しい事業であつても、下よりは彼此申すべきではない。唯靜かに時の到るを待つべきであらう。其と今一つ、今日のやうに、歌の分派の多くなつた時代に、眞に古今集よりも、新古今集よりも、もつと文學的に遺漏なき欽定事業を成し遂げようと言ふ段になると考へこまれる。單に宮廷歌人ばかりでは、此三朝に行はれた歌風のほんの一部にしか觸れない虞れが持たれる。其では畏れ多いことである。宮廷と庶民とに、眞に廣く涉つた集を撰ツクる爲には、選者が第一、問題になつて來る。

事實は、何時の時代の勅撰集を見ても、當時の歌風・歌人全體に涉つて、圓滿な選抜が行はれたかと言ふと、文學史がさうでないことを示してゐる。何時の世にも選者々々による所の傾きが見られるのである。だから大いに各流の選者を網羅することに努められたこともあるが、概して、今謂つた傾向は著しく見える。

明治・大正・昭和の大御代今に到る間、勅撰の御企てのなかつたことは、頗遺憾な事でもあるが、ある點では、かうした偏傾を生ぜしめまい——と申すも畏い聖旨がそこに籠つて居るものと拜察することも出来る。

新編古今集でとぢめた二十一代集の末の勅撰集からは、凡五百年を經過してゐる。此間に撰集の形態も、自ら變つたものが望まれるやうに向つて來て居るだらうと思ふ。

今度出る『新萬葉集』は、さうした意味において、新しい御代の勅撰集の形を考へる爲の一つの大きな記念事業を期すことになるだらう。さうして又、此が完全に、比較的に完全に出て來て、昔の准勅撰の集にも近い出來ばえを示す事になつたら、全八卷のこの集が、眞に三期の宮廷・庶民の歌壇が協力した文學的偉蹟を濟すことになるのだらう。

有家卿のことば

——新萬葉集おぼえ書き——

昭和十二年十二月「短歌研究」第六卷第十二號

有家卿のことば

隱岐本新古今集を見て行くと、やつぱり有家卿の選出した歌は、だめな様な氣がした。今一度詳しくくり返して見なければ、何とも言へぬが、さうした記憶に間違ひはない。今度、新萬葉の選歌をして居て、自身、有家卿になつたやうな氣が、頻りにした。其だけ、ごく素直な氣で、出来るだけ正しい選をして見ようと心をきめてかゝつた。新古今集は事實において、延人員十人以上が手がけて居るのだから、實際は、まづ今度の撰集と似てゐる。私はさうした心構へから、あまりに謹嚴な點をつけ過ぎたのではないかと思ふ。でも我々如きが、初めから自由な態度で選つてかゝつたとしたら、どんなに多くの數を抜き、どんなにだらしない選歌集をしあげたことだらう。歌主の方々にはすまぬが、どう考へても、私のとつた方針が、私としては、最正しいものだったと言ふことだけは、間違ひない様な氣がする。

死んだ赤彦は、——千櫓も始終言つたことだし、私も現にこの目で見たのだから、誤りはないと

思ふが、選歌に臨んですばらしく澄みきつた判断力を發したやうである。殆ど、ぐづぐづすることなく、どん／＼と採否を決定して行つて、其で狂ひなく、よくない作を除いて、よい歌を残して行つたものである。其を私がせなければならなくなつた。選歌總體を休暇中に見てしまふには、一日四千乃至四千五百首位見なければ追つゝかないのである。つまり長歌の分までも短歌に入れ換へたとして、凡萬葉を一日一度づゝ見るか、或は其以上の成績をあげて行かねばならなかつた訣である。學校の休暇は、前後三ヶ月はあるが、かゝりが少し遅れた爲、學校がはしまつてもやはり、爲事が澤山残つて居た。さうして其頃になると、日に千首は読みあげることが出来ないほど、精力が磨滅せられたやうになつて居た。其でもやつと出来あがつた。其幾日か前から、すっかりあがつた瞬間の喜びを豫期して、唯あせるばかりで、一向はかどらなかつたのは、よくよくかひ性のない男である。さて愈百首が五十首となり、十首となり、最後の一首に點をかけた時、驚いたことには、心が何の喜びも、解放の寛けさをも感じなかつたことだ。あまりくたぶれたからであらう。

其頃は山から歸つて、家に籠つて爲事を續けて居た。庭なりとも見るでもなく、唯ぼかんとして居た。もう私の此から先の一生に、此だけの爲事をするとはなからう。私が生れて唯二件、一つは大正三年の四月から十一月頃まで、金澤庄三郎先生の教科書の材料を集め、若干の参考書を書いた。其と今度とが、私として精力を賭けてした爲事であつた。金澤先生の分は、参考書を三

冊書いたら、もうどうにも神經衰弱が、意識に上るほどになつて、拜辭してしまつた。其はまだ分量や、爲事の性質から、新萬葉集よりは、樂だつたのではないかと、今にして思ふ。其でもよく新萬葉集をしあげたことである。何かに禮を言ひたい心持ちがした。私は歌の師匠服部躬治先生を思ひ浮べた。私の知つた限りで、最鋭く聴く選歌の爲事をして居た赤彦を考へに持ち乍ら、ちつとでも外の音や、噂を聞かぬやうにして、清醇な心を持ち続けようと努めた。其間に支那における戦ひは、段々大きくなり、北から南の方へも擴つて居て、今になつて勉強して新聞や雑誌を讀んで見ても、大局が頭に這入らなくなつて居る。

若し、選出した歌が、一萬首で止つたら、よほど優れた集になるだらう。歴代の勅撰の中、最優秀な作物の集つたものでも、總體の半分はよい歌がない。歩合ひはとつて見ないから明らかに言ふことは出来ぬが、古今も新古今も、名歌と駄作とのふり合ひを考へて見ると、非常によい方の數はへつて来る。最出来のよい玉葉集の四季の部ですら、一首對一首といふ風には行つて居ない。勅撰集だからと言つて、やつぱりさう言ふ風に出来がよくばかりはない。寧ろ、今言つた程度なら、新萬葉の方が、文學史に最價値を高く持ちさうな氣がする。一萬五千首程度なら、どうだらうと考へて見る。其でもまだ忍べるだらう。どうかもう其以上にはしたくないものである。

私が遅れて居る間に、選歌を早くすました方々は、もう先月のこの雑誌に選歌の後の感想記を出

して居られる。私は最後になつても、よいものを選びたいと腹を据ゑてゐた。唯ひたすら頭の向きの變らぬやうにと念じて居た。終りに近づいた頃とう／＼難澁がやつて來た。東京日日新聞と婦人公論の選歌とが、こゝ二月分ほど先を越してあつたのが、もうあとを要する様になつたのだ。其を大急ぎでかたづけ、さて再新萬葉の選歌に戻つて見ると、さあ大變。心の調子がすっかり狂つて居るのであつた。どうしても二日前までの心が還つて來ない。もう此で投げ出して、後は九人の方々の選ですまして頂くより外はないとくちをしあいきらめを持ちかけた。其でも尙囁りついて居た。すると、ふつとある機會から新萬葉を選んで居た數日前の心と近い境涯が、心の上に乗んで來た。其から眞に脇目もふらずに、此爲事をし遂げた訣である。尤、最後に臨んで避け難いある會合に出たので、危く又頓挫が來ようとした。選歌もかうなると、實際創作と似た心理を迫るものだと思はないで居られない。

私には、一つの空想に似た考へが浮んでは消え／＼した。文藝の意義と高い使命が、段々正當に評價せられる世の中になつて來た。残るは短歌の持つ歴史と、民族性格とがつり組み合つた普遍性とが、早晩は認められるだらう。さうして美しい晩節を全うする運命が、此國民文學に廻つて來て、新葉集は望めなくとも、一連歌撰集なる菟玖波集がさうであつたやうな勅撰にせられたに似た待遇が、何時か此集の上にも加るのでないかと言ふやうな、おほけなく或は夢のやうな幻を描いて見ることがあつた。

だが此は、實作するものにとつては、難澁な問題である。尠くとも、アララギの寫生風が風靡した時代は、新しくさうして進んだ文學論が作物を推し進めて居る。だが、其以前の新社の作物を新社的に活して見ることが出来ないか。此は、一アララギ、一新詩社の問題だけではない。啄木風、牧水風皆さうである。さうして又更に現在行はれて居る各流派の上にも、同じく考へられることである。

過去の作物を、其々の時代において評價すると言ふ前田氏風の考へ方は、其點非常に心切である。だが出来るなら、三朝五十年に通じる準據を見出したかつた。併し其はなか／＼出来ることではなかつた。人を例にとつて言ふのは今の場合避けた方がよいのだらうが、作家としては全くの過去人になつて居られるから擧げてよからう。たとへば、久保猪之吉さんの場合である。此方の作物のあるものが、事實において、新派の向ふ方を明示し、新しい感激を同人の間に催したことは知つてゐる。其久保さんの作物が最後に近くなつて思ひがけず出て來た。さうして其中の數首は、今も尙、最新しく正しい標準を以てしても點を加へることが出来るのに出會つた時は、私はしん底から喜んだ。かうなければならぬ。私は深い安堵を覺えた。新しい立ち場が過去を葬らずにすんだ快さである。併しかうした事實は、偶然と言つてもよい幸福で、中にはさうばかりも出来ない人々があつた。

出来るだけ各流派を各流派的に活すことを心掛けた。併し勿論據る所の中心は、現在の正しい批

判と思ふものによつたことは勿論である。そんなことは考へてはならぬ。かう思ひながら、私は此撰集を出來るだけ嚴正なものにしたいと考へて爲事を續けて來た。

此集は三朝に涉つての名歌を遺漏なく列ねることが、元來の目的である。だが一方明治・大正・昭和の短歌史から見た意味をも忘れてはならぬと考へた。明治に評判高く、其に追隨した作物に幾多の優秀なものが出たと謂つた歴史的意義深い短歌は、載せるのが正しいのではないかと思つた。其が、大正となり昭和となつて、鑑賞法が移つた爲に、多少疑ひのあるものなどには、殊に深く考へを持つてかゝらねばならぬと考へた。其は、一つは名歌であつて、又一つには歴史的な偉大な作物でもあるとの二つの資格を兼ね備へたものであつて欲しかつた。此考への爲には、爲事にかゝらぬ前からとり越苦勞をした。我々の今の標準は正しいに違ひないけれども、明日の標準となり得ないやうな事もないとは言へない。歴史が其を證してゐる。現に新詩社盛んであつた當時の名歌と謂はれたもので、今日價値の疑はしいものは随分とある。今日最高の標準に据ゑられてゐる作物でも、明日が日みじめな運命に遇はぬとは限らない。だから今日の鑑賞を萬全と過信して過去の作物を貶するといふ様な場合、其が常に正しいこともあり、又一時の眞實に過ぎないこともあるだらう。此は文學史者の持つ懷疑だけではなく、事實なのである。新萬葉集の撰歌の方針も、あまりに流行に偏つてはいけなない。派によつては、直觀的に批判の浮ばない作物の多い團體がある。又人によつても、さうした作風の人があつた。此には尠からず惱んだ。一首の歌にかける時間の數倍、十數倍を費しても、ぴつたりと鑑賞に調節せられて入つて來ない。技巧を立て前とする流は概して此が多かつた。

又派によつては、今も擁してゐる多くの歌人の中に新風と舊風とが明らかに分れて居て、其前期風なのは、明確に觀照する寫生風であり、後期式に屬して居る者は、音調が張り、單語に概念語が多くて、抽象的な作物が多くなつて居る。而も此二つの間に通ずる格調がまだ存して居るといふやうな事實も見た。此等は皆其派々々の中における事實で、派を離れて見ると、極めて縁遠い派と派とが、其末においては、却て、其自身の本流とより親しく近よつて居ると謂つた姿すら見た。

外の方々もさうであらうが、私の思案にあまつたのは、連作の處置である。連作は連作の形式にある所に價値の大半はある。だが、此集では一連作のすべてを列ねて行く餘裕はない。だが連作が新派の短歌において、特に意義を持つて居る以上、何かの方法で連作式の連環表現の俤は傳へねばならぬ。此二つのかねあひを兩立させて行くと言ふことが、選歌の方法の上の一つの技巧となつた。つまりある作家の連作の中から、更にある歌とある歌との間に緊密な生命と、表現の連續線を新しく發見せねばならぬやうな場合もあつた。だが多くは、連作中の優れた歌は、其をき

り離して記載して十分に生命を全うすることが出来ると言ふ、極めて平凡な事實を、新しく又見直したに止ると謂つた事だつた。

寫生風の勢力の盛んな時代だから、古い儘の部類を立てると、やはり四季の歌はありあまるほどにある。「戀歌」は豫想よりは多かつた。でも勅撰二十一代集その他の何に比べても、減つたことは事實だらう。其部類に新しく加つて來たのは、えろちしむの物である。戀歌萬能と見えた新詩社の長所も短所も、併せて此處にあつたのである。戀歌を補充する意味から、新詩社の歌を採つたものが多い。

今までにない部類は疾病である。斷片的にはあつたとしても、今度のやうに多く出たことは、豫想外であつた。——實はさう言ふのが迂遠でもある。勅撰集の戀歌が數卷を占めて居たのに替るのは此部である。陰慘と言へば陰慘である。明治時代の文學史家は、日本の短歌に悲觀分子が多いと言つて、常に非難したものである。新萬葉集を後世見て、疾病の歌の多い事を社會の不健康に結びつけて、論難する人があらうとも思はれる。其爲に豫め辯じて置く要がある。今までは病人でも四季諷詠・戀愛・詠歎の歌を詠んですまして居たのだ。自分の生活外に風流韻事を置いて考へて居たのが、病人は病氣の生活の中にはけ口を見出した訣である。唯肺病の歌に、わりあひに溺れてゐる者が多いのに、癩患者の方に、眞實を擲んで、其を過不足のない表現で示してゐる

人の多いのは、思ひがけない事であつた。

職業の歌は、昔は撰集に現れることは稀で、別に一部門として、職人歌といふ習作集が多く出た。さうして大抵は、歌が土佐風で行くから、職人歌は浮世繪よりは古いと謂つた姿である。今の時代の職業には新古二様ある。百姓は最古風であり、商人が其次である。其上に新しく工業者・労働者が一つの職人界の勢力となつて來た。歌にも、農民・町人共に労働者の歌が見えてゐる。農家の歌は、歌の性質上くらしづくであり、商家の物はまづ同じ傾向である。が、題材として直に詩となり易い角が尠いからか、其職にある人も多いのにわりに作物は少い。官吏・會社員などは新しい職人だが、此も亦他に題材を求めたものも多くて、生計の歌を詠んだのは多くない。多いのは、工人・労働者の歌である。此は全く新しい生活法を持つて居るのだが、此方面の作家は啄木等から吸收したものを育てゝ來て居る。歌の形式破壊の方面に出て行つたものが多いので、定型に残り又立ち戻つたものは、思想と形式との間に相尠する矛盾が常に現れてゐる。此派の歌には相當なものがあつたが、其極めて傾いた者は、大抵文學よりもいでおろぎい露出の詞章であるものが多い。

文學である以上、優れたものは、たとひ選者の思想と正反對なものであつても點を加へて採るのが當り前であり、又其覺悟で居たが、いでおろぎいが、作物を文學にしなかつた。だから、激し

いものは何の他意なく、單に文學としての標準ばかりから、採ることが出来なかつた。此は私どもの様な民族性格の發展どほりに歩むのを正しいとし、備ひ思想を以て生きる準據としないものにとつては、大いに安んじ得た訣である。なぜなら文學に裏切ることなく、公明正大に處置する事が出来たからである。

旅の歌は相當にあつた。つまり舊式の驕旅歌の部類は十分出来る訣だ。さうして恐らく、此部に多く名歌を見出すことが出来るのではないかと思ふ。但し、名は旅でも旅人の氣分の薄いものが多いのも事實だ。哀傷歌即挽歌は、此亦病の歌に肩を並べるほど多い。此には疾病の部と通じるものが多い。唯、死の直前まで歌つて居たと言ふ意味で、辭世——概して喜ぶべき傾向でない——自弔と謂つた意味で、哀傷と謂はゞ謂ふべき部立てに入るべきものも段々ある。

無名作家を紹介するのが、今度の爲事の當面の目的ではない。でも明治・大正・昭和に涉つて、じやあなりずむを超越した作家が相當にあると思へるし、又流行圏に居らなくとも、立派な作家が居たとしたら、其自身また儼とした三朝短歌史の事實なのだから、どうしても此は、新萬葉集の副目的の重要な一つと考へてさし支へはないと思つた。たとへば、和泉國の故外山家人さんの如きが、其である。全然世間の人が知らぬ訣ではないが、此まゝではあの人の特殊な——子規の本格的とも言ふべき一面を伸べて行つて得た作物群が忘れられてしまふ。かう言ふ歌壇に影響を

與へなかつた人も、作物からすれば、どうあつても、明治・大正の歌壇の消極的な一面と見られるのである。

又たとへば私などは、どちらかと言へば、歌壇的でない存在と言へる。私の教へ子などには、殊に歌壇的な名譽心を思ひ棄てさせて來た。歌人であるよりは、人間であつてほしかつたからだ。さう言ふ人たちの多くは、歌壇に片影をも出して居ない。教へ子としての手ほどきの初めから、其覺悟はさせてゐるのである。だが、既に卅歳を越した者の中には相當な作家も居る。かう言ふ事實を自分だけ知つて居る私は、無名作家の力量ある人が居ないとは言ひきれないのである。

たいぶらいたあ印刷の原稿の多くは、名を書いてなかつた。だから、其中に多くの無名作家が隠れて居るやうな氣がした。開いて見れば存外知名の人であるかも知れないが、其でも尙若干の歌々には、どの流派とも違つた核心を持つた優れたものを見た。舊根岸派か、舊新詩社の落伍して獨り楽しんでゐる人か、將又さうした流派を超越して、純粹に萬葉を愛慕し、自分の歌を發見した人ではなからうかと思はれる作家すらあつた。

かうした事實は、我々の萎微しようとする選歌の心を刺戟してくれたのだが、反對に存外類型の作物が多く——と言ふよりあまり多過ぎて、どうしても、標準を立て直さなければならぬと言

ふやうな氣が起つて來たことであつた。だが餘程進んだ後、さう言ふ心が兆して來たのでは、もうどうも出來なかつた。やつぱりはじめ立てたものを、頑固に守り續けた。だが人間の爲事の悲しさ。刻々にめぐりが移つて、必しも終始一貫した態度をとりをふせることが出來たと斷言するだけの自信は恥しなからぬ。だが私としては、此で精一ぱい以上であつた。

もう此から先の一生に此ほどの量の爲事をするにはあるまい。さうした經驗だけが意味を持つとも言へる。

有家卿ではあつても、かの通具卿でなかつたことを纔かに誇りとする。

歴代勅撰集と新萬葉集

昭和十三年二月「俳句研究」第五卷第二號

若松の芽だちの緑 長き日を夕かたまけて 熱いでにけり

私もあゝ言ふ風ないゝ聲だといゝんですが、「わかまつのみだちのみどり 長き日を夕方まけて 熱出でにけり」正岡子規の歌で御座います。が大てい御存じのはずと思ひます。此子規の歌でどれが一番いゝかと言はれると、前の歌と合せて三首の歌が、誰の頭にも浮んで來るでせう。時間がありませんから此歌だけについて申し上げます。子規が非常な病氣に陥つて、からだの苦しさに耐へながら、かう言ふ歌を作つた、と言ふ事は非常に感銘をうけます。先程も幕のかけ裏で承りました、千葉翁のお話の皇太后様の、

つれづれのともとなりてもなくさめよ行くことかたきわれにかはりて

と言ふ御歌。今度の新萬葉集を選しまして、殊に、變つた感じをうけましたのは一番病氣の歌が多い事、癩病或は結核の人の歌がたくさん來たことです。結核の歌については、既に前々から歌があつて入り易かつたのです。其内であなた方がぞつとなさるやうな歌があります。

我々若い時分に、日本の歌と言ふと、どうも悲觀的で、「何とか……秋の夕暮れ」と言ふやうな悲しきやうな不健康な歌に充ちてゐる、と學校の先生から聞かれたことです。

日本の國の文學に對して自信をなくしたやうなもので、若い時分の學校では、國民としての自信をなくさせるやうな教育をしたやうな気がいたします。これはどうもいけなかつたと思ひます。新しい時代に疾病の歌は恥ぢとは思ひません。つまり今迄さう言ふ歌をつくらなければならぬやうな境遇にゐる人も、歌を作る時は、風流な歌とか、戀の歌とか言ふものを平氣でつくつてをたつたけれども、それらの人が、自分の一番問題になつてゐる苦しみを歌に詠んで、安らひを感じてゐる事が出来る、と言ふ事になつてをりますが、此意味で一番いけないものをして此集の特徴にしてゐる訣であります。固より此集は、そんな暗い歌許りではない。明るい氣持の歌が幾十倍もあるのです。それから、昔から持ち傳へられた優美を成長させたものもあります。それから、明治・大正・昭和に新しく出て來た特異な風の歌もたくさん御座います。それらはこれから先、皆様が御覽になつてお決りになることです。斯う言ふ風な病氣の歌が出て來た訣はどう言ふ事かと申しますと、一つは正岡子規がさう言ふ風に、苦しみながら平氣に歌を作つて居た、其態度とその作品。それがだん／＼病氣を歌に近づけたのです。丁度正岡子規が唱へ出した新派の一派の歌風が、大正・昭和の歌風となつて、萬葉ぶりの生活氣分を欲する世間につれて、盛んになつて來ました。つまりアララギと申す歌の派です。根岸派——其後は、アララギ派の歌風が

癩病に苦しむ人々は、定めて世の中を呪うて情ない歌を作るだらうと思はれませうが、あの御歌から感じましたのは、新萬葉集がだん／＼出て來て御覽になるとよく訣ると思ひます。大變その歌が來ましたが、讀んで非常な安らひを感じます。健康な我々すらも、其を見て非常な安らひを感じます。かう言ふ風に病ひに對して素直な氣持ちでをられるのは何處からくるか、と言ふ事を考へたくなるのであります。此本を段々讀んで行つて、「今度の新萬葉集は困る。病氣の歌集だ」と言ふやうな考へをもつ方があるかも知れないから、初め斷つておく必要があると思ひます。今迄の勅撰集を見ましても、固より癩病らしい歌は御座いません。肺病になつてをたつたものもあつたんでせうが、それらしい様子も止めてをりません。其他古い時代の歌集でも、さう言ふ様子は餘り見ないと言つていゝだらうと思ひます。所がさつき皇太后様の此御歌を頂いて感激した、と言ふやうな歌が續々出て來ます。私はそれを見て、非常に世の中が明るくなつたやうな氣がいたしました。我々はいつでも、自分達だけが幸福な生活をしてをるのに、何處かの世界に悲しい生活をしてゐる人がある、と言ふやうな事を思つて安らひを感じないことがあるものです。所がさう言ふ境涯に安らひを感じてをる人がたくさんあると思ふと、非常に喜ばしい氣持がいたします。今度新萬葉集が出來ました、其一つの特徴と言へば、さう言ふ點においていゝと思ひます。今迄の勅撰には、疾病の部なんて御座いません。所が今度の新萬葉集を、假りに部類を立てますと、疾病の部を立てなければならぬ程たくさんあつて、而も此部に又非常に明るさがあります。

も、西洋風をば自由にとり入れて、専らそれをば實作の上に現さうと、實作一方に一所懸命であつた。所が子規は理論を先立てゝ行くと言つた形。さうすると、丁度其頃、文壇で一方に坪内逍遙博士が寫實主義を唱へてゐられ、又一方には森鷗外博士が理想主義を唱へられて、此理想主義と寫實主義とが非常な争ひであつた。鐵幹さんの方は理想主義にだん／＼進んで行つた。子規の方は出来るだけ日本的な理想を立てようと思つて一途でありました。子規の書き遣したものをみるとよく訣るのであります。所謂理想主義と言ふものを大變けなしてをります。勿論其時分の理想は只今の語で言ふと、いでおろぎいと同じことでありませう。いでおろぎいをもたない文學は駄目だと言ふ人もありますが、いでおろぎいによつていゝ文學の生れる事はあるけれども、いでおろぎい其ものがいゝ文學ぢやない、と言ふ正しい議論を子規が既にしてをりました。で、此結果、鐵幹さんの方は、ろまんちつく方面へだん／＼進んで行つた。此世の中になく美しい世界を求め、何でも彼でも皆自由、此世の中にあるもので言ひ盡せない美しさを求める——さう言つたものが新詩社派の出て來た。併し、此内にいゝ歌のないわけはない。鐵幹さん、晶子さん、其他の人の歌にもいゝのがあります。それと、我々は出来るだけさう言ふ歌をば洩したくないと思つて、及ばず乍ら、苦勞しました。所が子規の方は、つまり、西洋うつしの理想主義に反對して寫實主義に向つた結果、根岸派の寫生の歌を生むやうになつたわけで、只今迄寫生と言ふのは歌をつくる第一の態度と考へられて來てをります。併し、どちらにしても、萬葉集と言ふものを

正岡子規の傳統をばついでをるので御座います。だからさう言ふ歌が繼承されて行く。つまり、病氣の歌がふえたと言ふのは、ばらどつくすに聞えるかも知れぬが、アララギ派の一つの功勞かも知れない。所が一方見ますと、此新萬葉集には、戀歌が非常に少い。應募した内には随分いろいろ戀歌が御座います。時には恥しくて、どうしてこんな歌を見てゆかなければならぬのか、と思ふほどの歌もあります。それほど自由になつて來ました。けれども日本の歌としては、傳統のある戀歌は、只今の所正しい歩みをしてゐないやうに思はれます。だから、新萬葉集を御覽になつても、比較的戀歌が少い。出てをるのは此内で精選してあるはずで、此戀歌がずつと伸びて來ましたのは、つまり新詩社派——與謝野鐵幹さん、與謝野晶子さん等の歌が戀歌を發達させたとも言へるのであります。丁度明治の短歌が興りました時に、子規と鐵幹さんの間に激しい論争がありました。一時風靡してゐた新詩社の歌が、いつの間やら根岸派の歌に變つてしまつた。新詩社の歌は變らないが、世の中の歌が新詩社派から根岸派に變つて來た。自然、新詩社特有の戀歌と言ふやうなものが、だん／＼影を薄くして行つた。さう言ふ變つた所が、今度の新萬葉集に見られるのであります。勿論新詩社派の歌、アララギ派の歌、其他いろ／＼の古くからある派の歌も出て居ますが、こゝでわり合ひ一番面白く思ふのは、子規と鐵幹さんの若くて元氣のあつた時分の考へは未だに續いてをる處です。子規と言ふ人は、どうしても日本的な理論を立てなければならぬ、斯う考へた人なのです。鐵幹さんは非常に日本的のやうに見えてをりますけれど

言へば、古今集から後、平安朝の百年程経つた醍醐天皇の御代の古今集から丁度五百四十年経ちまして、南北朝のしまひの後花園天皇の御代に新古今集と言ふのが出てをります。丁度二十一、此二十一の歌風がまあ代表してゐると言ふ風に、非常に大ざつばな影響のやうであります。皆人間と言ふものは違つてゐるやうに、いろ／＼のものゝ上から、勝手々々に探してとつてくるんですから、萬葉ぶると言つても、いろ／＼の内から、いろ／＼變つた摺へ方をしてゐます。

歴代の勅撰集——二十一代の勅撰集から、めい／＼勝手な歌風を時代々々の人がとり出してくる訣です。それで、結局やはり二十一代集の内でも、一番最初の古今集がいゝと言ふ事になつて、古今前派とも言ふべき歌が江戸時代の末から盛んになつて來まして、今日一派が續いてゐる訣です。明治時代に這入つてから、もう古今ではいけなくなつたんだから、又萬葉へ行つたらどうか、と言ふ考へに向いた。實は此古今集以後の歴代の勅撰集と、新萬葉と比較研究して見た所で、それは何の役にも立たないのです。存在は存在として、別個の價値と歴史とを持つてゐる。其を照し合せて見たつて幼稚なことです。唯此だけは考へたい。新萬葉集が歴代の勅撰集其他の歌を並べた文學の中において、どれ位の地位を占める事が出来るか、此事が一番の問題だらうと思ふ。

此等の勅撰集を見ると、まづ今日の文學に對する考へから、大體に於て狂ひの少いのは、玉葉・風雅の二撰集です。新古今には、流行があまりに歌壇を吹き靡けました。さうした例には、たとひ個々の作者としては優れた人が多くとも、一人の正しい指導者があるよりも悪い結果を見るの

中心としての運動だつたのです。鐵幹さんのなくなられる少し前、鐵幹さんは『萬葉廬詠草抄』と言ふのを出してをります。これは鐵幹さんが若くて、まだ新派の歌に入らない時の作だつたさうです。それを見ますと、非常な萬葉ぶりであつたが、それがだん／＼荒つぽい歌になつて來て、又轉じて、星や、すみれ、紅や紫の歌をつくり出した。此初めの歩み方が少し訣らない。鐵幹さんの晩年と言ふと、何ですか大正に這入つてだん／＼歌が古典的になつて來て、萬葉張りの歌、或は記・紀の歌謡の影響をうけた歌をつくられるやうになり、結局萬葉と言ふ所へ這入つて來たのであつて、子規のは萬葉をばわり合ひに早く摺んだ。子規も最初から萬葉を摺んだやうに見えますけれども、これもさうではありません。だが、子規の歌を見ると、鐵幹さんよりは早く萬葉を摺んだのであります。

新派の短歌は、どれもこれも同じやうに萬葉の影響をうけてゐる訣ではありません。其人々の性格によつて、或は其人々の生れつきによつて、皆それ／＼自分に合ふやうに、自分の組織に組み込んでゐる訣です。出てくるものは皆違ひますが、結局萬葉でなくても何でもいゝ。其人の内生活と、其を引き出す前代の歌がよければ、それでよかつたとも言へます。併し、ともかく今迄古今集以後の歌風をば一新するため、萬葉に飛びつくより外はなかつた。それで大體萬葉をば違つた状態でとり入れてしまつた。だから既に何年か以前から、非常に大ざつばであります。萬葉の影響を離れようと言ふ運動が非常に盛んになつて來ました。それで此萬葉より後のものと

です。新古今は部分的に優れた素質や素材が見られても、やはり一人のよい案内者を先立ちにした、玉葉集及び風雅集には及ばないので。古今集は、日本の歌人が文學理論を持ちはじめた——正確にはもつと古い、其を多少いでおろぎい化して用ゐてゐる。其がわるい。却てさうした事を知らない時代に出來て、撰者がいでおろぎいにはめて論じきれない權威を持つて居た、古い作者未詳の歌がよい訣なのです。新萬葉には、理論のあり過ぎるくせに、又文學としての本質を失はないものと考へてかゝつたのですから、其點で他の歌集にまづ、一步のり出してゐる訣です。新萬葉集は、只今の所一萬五千首位纏つてを、私等ははじめの想像では、一萬首程度なれば、今までの勅撰集にない立派な歌集が出來ると思つてゐた。今度は、選歌を多くして、一萬五千首になつた。其でも今迄の歌集よりはよいのだらうと思ふ。何故なれば、古今集と申しても、新古今・玉葉集と言つても、皆文學論的に穿鑿されて出てゐるのぢやない。其内に、いゝ歌が比較的に多いか少いかだけなんです。殊にこれらの集は一つの癖がある。新萬葉集も癖はないとは申されませんが、我々の考へでは、一萬五千首の中の多くは、新しい文學的價值をもつてゐると言へます。他の勅撰集に優れたと言ふ自信はもつてをります。併し、自信は本が出來上つた時にこはれてしまふかも知れない。とにかく我々は出來るだけの事は致しました。私は幸に健康ですが、中には大變健康を害した人も御座います。友情としてやるせがありません。まづ以上ざつと、新萬葉の選定の報告のあらかたを申しあげました。之を申す爲に大阪迄參つた訣で御座います。

民族のいくさびとに贈る

昭和十八年「三田新聞」
十九年十二月「鳥船新集第三」

今年も亦、選歌を學徒歌人の諸君に贈る。今度は、選擇の責めは、私一人で負ふ。そのつもりで、諸君の生活の中まで入りこんだ氣持ちで、深く見たつもりで居る。だが結果は、あまり期待をかけて頂いては、困ることになつた。どうも出來が、去年からは、大分落ちてゐるやうに見えるのである。一つは、此時勢に、よい加減な詠歎などに耽つて居る氣持ちになれなかつたのもあらう。さうも、考へて見た。

だが、歌の集つたのは、よほど以前だつたと見えて、學徒生活のつきつめて來た、昨今の雄々しい氣概などは、概ねまだ現れてゐぬやうである。世間のありの姿は、刻々に變つてゐる。學徒にとつて、張り裂けるやうな、痛烈な幸福感の、全身に充ちてゐる時である。若いあなた方に、毎日の様に逢うてゐる私の、將に老いづく身にも、しみじみ其を感じて、其血を以てする幸福を、あなた方から預けて貰つてゐるやうな氣がする。此時代に、生れたことの感激を、日々に新にしてゐるのである。

だから、こゝまで來ぬ間の製作物だからと謂つて、今少し、さう言ふ凜然たるものが、現れてゐてよいと思ふ。どうも其が、少し足らぬやうである。日本人としての感激の上に、別に學徒としての心をどりや、憤りが、もつと出て來てよい筈だ、と思ふのである。

X

一つは又、表現力の不足があると思ふ。さう言ふ痛烈な感謝と、敵愾とを、諸君らにして初めて持つことの出来る近代感の上に、吐露すると言ふことは、やはり適當な表現力が、前から備つて居ねばならなんだのだ。併し、學校十數年の生活の、忙しかつた若者なる君たちには、其だけの準備のある訣はない。だから全體としての時代感が、胸をはり裂き、溢れるやうにあつても、其を過不足なく表現することの出来なかつたのも、爲方ないと思ふ。

だが所謂「技工」と稱する今謂つた表現の段階は、諸君の情熱が、まう一段燃え立ちさへすれば、自ら解決もつき、其を経過したやうな姿の作物が、出來て來る筈なのである。我が日本の古い祖先の歌がさうであつたやうに、又世界の民族のもつてゐる古代の詩歌がやはりさうであるやうに、技工どころか、詩論も聞かず、歌話も耳にした覺えのない人々が、ちやんと技工の段階を経たと同じほどの、適當な表現を得た詩歌を後代に残して、今も感激を古びさせずにゐるではないか。記・紀の歌で見ても、東歌乃至は、防人歌で見ても、どうして此ほど、過不足ない表現を得たの

だらうとは、諸君だつて、度々感じられたであらう。其が、技工の理想とする所である。技工によらずして、自らなる感激が、技工の段階を突破する。さう言ふ境地に達する力は、古代人が持つてゐたし、又今日の若い學徒も、望んで興り得る筈なのだ。

X

戦陣に諸君が在る日すら、今日が今日まで、數年來續いて來た學内の演習をくり返してくれ、とは望まぬ。其では第一、戦陣の生活があだごとになる。學者であることが、今日までは、諸君の第一生活であつた筈だが、今は、優れた「民族の戦士」としての生活、其位置に居替らねばならぬ。其が又、學者である者の、此秋にしてとるべき正しい道なのだ。だが諸君は日本の若者であり、「大倭のいくさびと」である。紀元前後に涉つて、我がいくさびとのみ持つことが出來、又其を喜びとした「戦陣の歌びと」であることは、諸君も亦興る所の、大倭の祖先傳來の若男としての誇りである。「文化の戦人」と言ふ資格は、昔から今に傳はる日本の若い軍人の傳襲する「生寶」である。どうか、此生寶だけは、かたく／＼抱いて、戦陣の生活の間にも磨いて來て貰ひたい。

さすれば、其光榮は、諸君をよくするだけではない。諸君の兒孫或は、諸君の名を傳へる繼承者が、之を承けついで言ひ、永遠に日本の生活をよくする「戦陣の文化」として、後代に残すであ

らう。歌の選評などするよりは、多少なりと、諸君の爲になれば、と考へて贈る貧しい辭を、潔く受納して頂きたい。

萬葉維新

昭和十八年一月「毎日新聞」
七月「鳥船新集第二」

凡、百人一論といふ程、既に論じ盡された「愛國百人一首」に向つて、今更何を言はう。たゞ私は、この新しい「百首」を選んでゐる間に、日本の短歌史を貫く萬葉精神に、ある傾向らしいものゝ、あるのに氣がついた。言はうなら、其でも話すより外はない。

偶然この百人一首が、萬葉に初つて、維新の志士・學者たちの誠實な愛國歌に終つてゐる事に、豫期せざる結論を得た訣である。我が國の短歌の、爛熟荒廢した時に必、萬葉ぶりへの回顧が行はれて、そこに歌を通じて、此國の精神文化上の文藝復興が行はれて來た。その幾度かの歴史が、今度これをして居て、極端にはつきりと見えた訣である。これがもし、新百人一首を單に、百人の優れた作品といふことの外に、ある連続した意味を見ようとする人があれば、その人々の爲には、無表現の論文としての役目をするにせうと思ふ。短歌維新といふ、短歌復興と同じ意味に使はれたらしい、三井甲之さんの論文集の表題から得た暗示によつて、萬葉維新と言ふやうな、題目を設けて見たのである。

維新志士の作品が、多く萬葉調の短歌であり、または幾分でもその傾向のあるのは、どういふ理由からであらう。勿論、志士のうちに、萬葉を愛讀した人のあつたのも、事實として傳つてはゐる。が、この人々の總てが、萬葉を讀んだといふ程、萬葉が廣く讀まれてゐた時代でもなかつた。現に、幕末から明治へかけての、一流の萬葉學者の歌を見ても、多くは最低調な萬葉ぶりか、乃至は古今以下の、單なる優美調に過ぎないのである。さう言ふ間に、どうしてかういふ歌風の作物が、出て來たものだらうか。

さうして見ると、新しい時代を豫感した志士のおもひは、固定した學者の文字遊戲以上に、進んだ氣魄の文學をなすに至つたといふ理由も、考へられさうである。尤、志士のうちの歌人として、これまで認められて來た人々の歌が、必しも萬葉調に終始してゐる訣でもない。またさういへば、萬葉調である故に、名歌だといふ風に、私が言うてゐるやうに聞えるかもしれぬのは、少し困るのである。

併し、その時代において、世間一般の流風たる古今・新古今の末流より、更にもつと惡かつた調子であるよりも、氣品の高い、情熱の昂揚した萬葉ぶりが、この人々の内生活を表すのに、適當なものとして自ら擇ばれたらうといふ事は、領けさうである。

さうした志士の内の、有名な歌人以外に、譬へば、久坂玄瑞の如き、

たまもかる 富海の浦ゆ、大船に眞楫し貫き 都に上る

憂きことを つぶら／＼に思ほえば、君が御あがり かなしきろかも

時なれば せむすべもなし。武士の あはれ 我君も 母父も措きて

ますらをの 劔の手上とりしぼり、ひとり 言とふ夕ぐれの空

かうした文學上の生活が、一躰この人のどういふ經驗から出て來たのか。若くて學を愛した事も訣つてゐる。併し、これ程の歌が作れたとは、實は恥しながら、今度の選歌を手傳うて、初めて知つた訣である。勿論、かれきつたといふ境地ではない。齡から見ても、まだその年ではない。玄瑞の戦死したのは、廿五歳であつたが、廿五の歳に果して、私どもがともかく、これだけでも、萬葉調の歌を作る事が出來たか。かへりみて、氣恥しくてならぬ。私の話の徹底するやうに、わざとあげた前述第一首を見て頂きたい。當時の専門歌人にこれだけの情と、景とを兼ねた作風を示した人が、幾人あるだらうか。やはり、維新の大事業は、かうした第一流の人々の辛苦によつて出來上つたのだ、と心深く感じた。

「うきことを」の歌は、一・二句は前型はあるが、其をすつかり征服しきつて居るのが、下の句である。「つぶら／＼に思ほえば」と、讀み返して來ると、如何にも深い心が感じられる。どなたを悲しみまをしたのか、詞書きもないのでわからぬが、其事情が訣れば、尙一層深みがまして思はれるであらう。「おもほえば」と言ふ語つかひの誤用も、如何にも、今の萬葉ぶりの歌人にも、よくあることだけに、ほゝ笑ましく却て、眞實味を覺える。

「みあがり」は、近藤芳樹編纂の『江月齋遺集』にあるのだから、確かであらう。福本義亮さんの『松下村塾の偉人久坂玄瑞』の『江月齋歌稿』には、「君のみはかり」とある。此では何の事か訣らぬ。言ふまでもなく、誤りである。新百首にはひつた「とりはける大刀の光りは、ものゝぶの常に見れども、いやめづらしき」は、此本によつたのだが、この本は、歌にはなかく誤植や、誤字が多いから、これは訂正しておきたい。『遺集』には、やはり「いやめづらしき」とある。少し萬葉調過ぎるのを疑うた爲、わざ／＼此活字本によつたのが、過ちのものであつた。少文久二年十月九日妻女宛ての手紙に、中谷正亮を悼んだものと思はれる四首の中（『歌稿』には、松浦知新をもこめてある）、

秋深し。みやまの峰のみみぢ葉の　　過ぎていゆきしこの君　　あはれ

まつろはぬえみしことく　　まつろへむ時にしあれど、雲がくれにき

月清く　　秋風あだ寒し。くさまくら旅寝もさめつ。秋風さむし

は、しろうとらしいよさが十分に出て居て、よい。殊に中の歌はよいが、「雲がくれにき」は、類型をなぞつてゐるのだが、其すら好意がもてる程、おほどかである。

此消息には、

此春、安藤（？）一條にて召捕へられ候兒島強助と申宇都宮の人の一家内、和歌をよくよみ候事は、いかにもうらやましき事になん。此人は、町人のよし、承り候。實にはづかしきにて候。多用

ながらあらましうつして、おくりまゐらせ候……（是歌はまことに、なみだのながるゝほどのあはれの事にて、いかにも、かんしんなり。歌は心の思へる事をすぐに申すものなれば、いかほどよくできて、こゝろがつまりずては、なんのやくにもならぬものなり。……）

この手紙の事や、玄瑞の愛讀書などについては、貞文君から教はつた。『萬葉集代匠記』を『和字正濫鈔』と共に祕藏してゐたやうだから、其邊から來てゐる知識らしいのだが、實はもつと外にあると思ふ。今すこし提要めいたもので、わりに親しく、讀み返し馴れてゐたのだらうと思ふ。どうも此萬葉への觸れ方が、何か如何にも、愉快なところがあるのである。三年四月廿五日の分には、

眞木の立つ荒山中の山がつも、利鎌手な（に？）ぎり、夷きためな

何かかう、一間づゝ遅れるやうな行き方が、くろうとめかしくなくて、限りなく懐しい。

かくまでに　　あを人草を　　すべら（ちれたみし）ぎのおぼす御（神慮）こ（皇大君の御こころしかも）ころ（かしの誤りか）かも（歌稿）

いくたびもくり返しつゝ、わが君のみことし讀めば、涙（こぼる、）こぼるも（歌稿）

梅の花たをりかざして　　はるけばや。胸あきがたき賤が心を

うつせみのうき世のうきをはるけむと　　春の野にいでゝ、花を見るかな

あめ（あめつちと）つちも（歌稿）ともに久しく言ひつがむ。あやに畏き君がみことを

あなうれし。かずまへられぬ賤が身も、かずまへらるゝ時（にけり）來たれり（歌稿）

ふるさとの花を見すて、はるかなる旅にさまよふ この旅人あはれ
ものゝふの臣のをとこは かゝる世に、なに床の上に 老いはてぬべき
あなたなる峰の白雲 夕ぐれに見ればかなしも。世のこと思ふに
いにしへのことにしあれば思ひて ふみよそにみし讀みし(歌稿) そのうきことも、今は我が身に

常陸長岡驛、景山公遺愛の櫻

たくなはの 長岡村の夕時雨 心もしぬに、昔思ほゆ

山櫻 花もろともに散り果てし常陸男の 戀しきろかも

ひさかたの都の春は 如何ならむ。我の深山に 雪はふりけり

内股にひぢかきよせて 早稻刈りし民の子らさへ吾君にとりてまつらむ。春の野の芹(歌稿) 國し思へば

ちはやふる 人の醜草 かゝるかと思へば、我の髪さかだちぬ

吉田大人の事を思ひつゞけて

世の中のことし思へば、君の身のすぎにしことの かなしきろかも

かう言ふ歌口グチの外に、約二倍ほどの題林歌集風な、弾力の乏しい舊風の歌がある。

そんな中には、

思ふのみで、また年月を過しけり。いつか あげなむ。壯夫の名を

誤字ではあるまい。舊風の歌と、其に、かう言ふ何とも言はれぬてづな、たどくしい歌、か

う言ふ作物群を見てみると、全く自由自在な気持ちで、歌に遊んでゐた人の楽しみが思はれる。同時に、飛びぬけてゐるよい歌に伍して、幾倍数の、箸にも棒にもかゝらぬ歌を残した昔の人々の作物に、起りがちな疑問が、何でもなく解けてゆく気が、したことである。

名人上手と言ふでもなく、歌を嗜みながら、歌人らしくもなかつた久坂氏の姿が、今一度、その萬葉ぶりの上に、明るく浮き出て、拘泥なく笑うてゐる気がした。

思へば、私どもは、この大人の二倍の年の上に、更に數年を加へたほどの長さを生きて、なまじらけた歌など讀んで、思ひきつた事も、つひになし得てゐぬのである。

X

この外にも、新百人一首中に、例にとりたい今一人がある。

千代ふりし書フミもしるさず 海ウミつ國の守りの道は、我ひとり見き

及び、

仰ぎては天をもうらみ、俯うつふしてまた人をもとがむ。身みの苦くるしさに

世を思ふ言葉の梢高ければ、枝を鳴さぬ風にあたれり

これ等の作物については、相當にあげつらひの、選者の間にあつた事を記憶してゐる。そして部分としては、萬葉ぶりの中に後代オトコの氣分を含んだ語もあるにはあつても、全體として萬葉に迫る

強い氣魄が、それ等を捲き込んで淨化してゐる事は、誰しも感じるに違ひない。この人の、知られた傳記以外に、更に、この歌の強さの出る所を、我々は考へてみる必要があるのではないか。六無齋が狂歌様な歌や、堂上風なものも作つてゐた傍、かうしたものが出来たことは、誰も理由を説くことが出来まいと思ふ。かうして一人々々あげて行けば、その中に多く、限りなく美しい愛國の感情と、古朴な精神の相叶ふしらべに行き逢ふであらう。

×

今私は、維新の歴史を導いた事蹟の細目について考へずに、たゞ短歌の上に現れたものばかりから、其を感じ享けて見ようと思ふ。

檀原の宮に還り、更に天安河に還ることを冀つた復古の情熱は、一面から謂へば、我が國としての文藝復興と解することの出来る所もある。

併し、もつとはつきり、文學の上からいへば、短歌を以てする維新即短歌維新といふ事が出来る訣である。即、志士の人々の維新のおもひは、文學に現れては、萬葉ぶりの短歌となり、また同時に、斯の如き萬葉ぶりの短歌が現れなければならんだといふ事が、維新の大事業の根本に流れて居た強い情熱だつたといふ事が出来る。此意味において、この時期における、我が國の文藝復興は、短歌維新といふ語を以てすれば、違つた意味において、その特異な姿を示すことが出来る。

よう。

×

古今以後の歌風は、なるほど冷靜な立ち場においてみれば、純文學の表現の爲には、適當なものもある。だが、誠實な、強健な、その上、最純粹な、そして新鮮な抒情詩たる爲には、萬葉以上の歌風は、わが文藝の上に現れてゐなかつたのである。

だから、全然新しい作風を出すならば格別、古來の型によつて創作する以上は、この短歌維新の情熱は、何としても萬葉ぶりに出るより外はなかつたのである。即、萬葉維新があつた訣である。又さうした準備がなくとも、強く、鋭く、新鮮な感情に張り充ちた傑れた人々が、せつぱつまつて哮びあげた聲は、「音文藝」の印象を摸索すればするほど、どうしても、萬葉ぶりに近づかずにはゐなかつたのである。

だから、其人の準備に、古今以後のものもあつたとしたら、其人の精神における萬葉調が現れる様になつた力を察すべきだ。志士のうちには、萬葉略解を手離さなかつた人もあり、また寛永本によつて、大意に通じてゐた人のある事も聞えてゐる。が、其すら準備にない人があつたことは事實だ。併しそのこと以上に、何處からその萬葉ぶりを得て來たかといふことになる、私のかうした考へ方も、一往は省みられてよいだらう。かういふいひ方に對しては、色々な意見もある

だらうが、現在曲りなりにも、萬葉ぶりの歌が世に盛行し、その繁榮は殆、卅年にわたつてゐる。その中心は、何處にあり、誰々が感謝せらるべきかといふことも、私が言ふまでもなく、世間の人を知つてゐる。けれども冷やかに、今においてみると、その萬葉ぶりの新派歌人たちの作物の、偶然新百首の最初に出た萬葉歌人たちの生粹の古代文學とは、自ら行き方を異にしてゐる點が、感じられるだらう。その違ひは、維新志士の歌風と、今の歌風との違ひよりも、或はもつと甚しいかもしれぬ。

併しながら、新派萬葉歌人自ら萬葉ぶりと稱し、世間もある程度まで、それと認めて來た一々の作物についてみれば、我々の常識では、決して萬葉式だと認める事の出來ぬ多くの要素を、近來殊に多く加へて來てゐる。それでゐてなほ、萬葉ぶりではないといひ切れぬのは、結局この近代的な歌のうちに、萬葉或はさらに記・紀の歌謡に通じる氣魄が、満ちてゐる點を認めてゐるからでない、とは言へぬだらう。さう言ふ點に、私はいまだ全く、今の歌に望みを失はぬ訣なのである。

悲痛なる美を完成する人々

——特政百首——

昭和二十年八月二日「毎日新聞」

切實に、痛切に考へてゐると思つてゐたことが、現實にうち當ると、存外、切實味・痛切味に缺ける所があつたことを覺える。

日本精神・愛國心、その他われ／＼の感激を搖る語はその時々、痛切感を以て語つてゐるのだが、現實に直面するとその空疎だつたのに驚く。それ程現實の烈しさは、われ／＼の常の生活を蹴飛ばしてしまふのである。

特別攻撃隊の發生も、誰かはかつて想像することが出來たかも知れない。けれど悲痛な決意をもつて、現實にみんなみの海へ飛び立つて征く人たちを見た時、眞に奇蹟を見た人のやうに、われわれ日本人すら驚くのである。しかもそのわれ／＼の心の内に、特別攻撃隊員が現に生きてゐるのだ。そのわれ／＼自身にして、これほど驚き、感激し感謝する特別攻撃隊員の悲痛な精神は、われ／＼日本人にして、初めて自ら實現して喜び、また知己・隣人の實現するのを見て羨み喜ぶ

ことが出来るのである。

宮廷の御爲、國のため、かくの如く悲痛事を完成し、輝いて去つて征つた人々は、古い代々の歴史の上に、數多く見て來てゐる。この人々のふるまふ特別攻撃も、最激しい現實にしてしかも、懐しい古典的な行爲として、われ／＼の胸に印象せられる。

特別攻撃隊精神——美しい悲痛なる精神——の實現、宮廷の御爲にといふ美の一點に集中して、若い人々はいさぎよく散つて征くのである。

語こそ所謂特攻精神であるが、國民の過去數千年持ちつゞけた精神の、かうした秋に現れる、常なる悲痛の姿である。隊員のみならず、國民の總ては、その精神の輝く窮極の美を、完全に知つてゐる。しかもその美を更に完成しようとして、美しい歌を残して人々は過ぎて行く。歴史を負ひまた古典的に輝く特別攻撃隊精神なればこそ、最民族的で、また最古典的な詩型によらなければならなかつた。この選擇が、多くの心清き人々のすがた清らかな短歌となつたのである。

特別攻撃隊の悲痛なる美の精神は、これによつて更に永遠に傳るであらう。

所謂特攻魂——尊い精神までも、かういふ略語を以て表現する風潮はこのもしくないが——は、民族の特殊精神のつきつめた姿であり、それより輝き出た所謂特攻隊員の短歌は、個々の隊員の魂の日本的な形において、新しい生命を表した姿といふことが出来る。

詠進歌の新風

昭和二十五年二月二日
三日「東京日日新聞」

御歌會の預選歌に現れた短歌を見ると、以前とは相當違つた形を見せてゐる。ほど二年前までは、御歌所の歌風といふものがあつて、それが、日本の歌を明らかに二つに切り分ける勢ひをつくつてゐた。

すなはち「舊派の歌」と稱せられたものは、いはゆる、このごろの御歌所歌人の保持してゐる歌の文體だといつても間違ひではなかつた。もつと平易にいふと、御歌所あるために舊派の歌の生命が續いてゐたといふことになる。ところが去年から今年、ことに今年は、私のやうなものにも選歌の責任分擔を命ぜられたので、しみ／＼と、いはゆる御歌所の歌風を瞻る機會に遭遇したわけである。

あれほど根強く地盤を占めてゐた舊派の文體が、一萬餘首あつた詠進歌に、ほとんど見出されなくなつてゐたのは、信ずべからざること、しかも事實であつたから驚いた。

しかし、これは確かに良いことで、同時にその筋の人びとの、漠然ともつてかゝつてゐられるの

だと思はれる短歌に対する期待が、こんなに早く形をとつて現れて来たのだといふ氣がする。同時に今まで我われにも心づかなかつた、御歌所風の短歌といふものゝ行くべき方向が暗示——といふより、まう少し明らかな形で見えて来たのだと言へさうな氣がする。「改造」の一月號を見た人は、天子様の御歌をだれも見逃さなかつたらう。あの御歌の上に、搖曳してゐる一種の氣分といふものを感じたであらう。

それは、あの七首の御歌の、どれにもわたつて、ある調子感といふものが出てゐるので、結局あの搖曳するものを具體化すれば、これからの御歌の文體が具體化してくる。それは、もう明治天皇の調子とも變つて來てゐるやうである。どの過去の天子様の調子にも似てゐないものが感じられる。今の世間の歌人にもないものが、そこに棚引いてゐるのだから、誰の歌を参考になされたといふことにもならない。手取り早く言へば、宮廷の歌風の根柢になるものが、明らかに變つて來てゐるといふことが出来る。

いつたい、これまでの歌人の通念では、明治天皇の御歌は、それをかれこれ御世話申した桂園派の歌風に立つものとしてをつたのだが、そんなことはない。桂園派の誰にも、あの文體はなかつた。

今の天子は、明治天皇ほど歌をお好きにされてゐるか、どうかは存じないが、製作の數は百分の一にも十分の一にも、お達しにはなつてゐないだらう。だが、明治天皇の歌風を註釋にしてみる

と確かに明治天皇風から一歩變つた知的な要素があつて、しかも冷却してゐない暖い雲のやうなものを感じる。いはゞ宮内廳に根據をおく、これからの歌風は、今までも、さうであつたやうに、しかし、これからも天子様の調子に傾いて、みながこの暖い雲のやうな感覺を持たせる調子になつて行くとは思へない。

さきに言つたやうに、詠進する歌が、まるで、この二年間に豹變してしまつた、といふこと——まだ海のものとも山のものとも定らないといつた所はあるが、ともかく相當に自由なものになつて來てゐる。過去にもとらはれない、そして現在世間に一杯ひろがつてゐる各流派・各結社の歌とも違つたものだといふことは、一體どういふことだらう。これを相當の材料ばかりでまとめ行く考へ方からすれば、流派・結社の末輩、或は、それすら及ばない人たちが詠進してゐるからだといふ事實にもなる。だが大體、今ある流派・結社、各相當に價值や意義はもつてゐるけれども、あるものはあまり偏り過ぎたり、また平俗すぎたりして、それに一種の歌風としての權威を持たれては困るといふ風に感じることが多い。だから、さういふ殆ど素人の素人と見えるほど素朴な歌を詠進する人たちの作物個々に見れば、たいしたことはないやうでも、それらのものが群集して作つてゐる心的印象は、やつぱり一つの自由な未來を暗示する歌風に似たものを持つてゐるといふことが出来る。

つまり、それだけ新しい動きが個々の歌の上に現れて來たわけだ。それに、なまじ小手が效いた

り、玄人意識があつたり、先輩歌人の入れ智恵などが見られないことが、むしろ良いのである。早晚まうちよつと、どうかした文學的な衝動が起つてこなければ、この自由な歌風も結局意味のないものだが、ともかく今非常に解き放されたやうになつてゐることは事實で、だから舊派の地盤だと思はれてゐた、いはゆる御歌所風を構成する個々のものが變つて來てしまつてゐる、と言つていゝのである。

日本の短編の抒情文學には、玄人の把持してゐる部分と、素人が自由に遊んでゐる部分を認めてゐるものが相當にある。短歌などもそれだ。素人もどしどし、自由に製作する権利がある。これは歴史が認めてゐる。ひよつとすると短歌などは、素人ばかりの文學であつたかもしれない。それをいつか玄人といふものが出來て、それが立ちはだかるやうになつたのだといふことも出来る。毎年の詠進歌は、いはゞこの素人たちが單純で、ほしいまゝで、極めて自由に作つて行く、この原動力となるのがほんたうではないかと思ふ。こゝに、いはゆる御歌所へ集る歌に、從來期待をかけることが出來なかつた理由もあるし、同時に將來に希望をもつて良い理由もあるのだらうと思ふ。おそらく今後の御歌所歌風は、さういふ自由な歌人以外に、結社・流派の、いろんな歌風が入り亂れて、あたかも螢火のやうに、また散り交ふ花吹雪の如くなつて行くだらう。さういふさまざまの歌が結局総合せられて、世間の歌とは、また違つたものが出て來るのではないか。

昭和御製と宮廷ぶりの歌

昭和二十六年十一月、毎日
新聞社刊「みやまきりしま」

わが國の古代からあつて、今もなほ衰へを見せない短歌も、その初め、宮廷から起つたと言つてよい據り所はない。だが、その後の久しい短歌の發達の歴史には、宮廷の文化・宮廷の習俗が、大いに與つてゐる。神話に言はれてゐるやうな一元から、歌は出たものでなくて、我々の祖先の氣のついた頃には、もう幾つかの流れに岐れてゐた。しかもそれが始終交流して、地方の短歌は中央へ、中央風な短歌のある部分は地方へ、と言ふ風に循環してゐたことが考へられる。さう言ふ風な短歌の運命は、古代から中世へ動いて來た。假りに、短歌そのものに意識があつたとして、どうかして一度、中央の文化に觸れて、もつと高い、廣いものになつて來ようと言ふ目的が動いてゐたものと見られぬでもない。又それとは逆に、中央から地方へ流れ出て行つた形を思ふと、豊かなその力が押し出して、地方の歌を、清く、美しいものにして來ようと言ふ欲望があつたと考へてもよいほど、日本民族の住む都鄙の間を、短歌が絶えず循環してゐたものと見るのも、空想でないやうな氣がする。歴史的に、も少しはつきり言へば、地方の國々は、宮廷に對して誠

實を誓ふ爲に、それ／＼の間に傳はる古代以來の歌を奉つてゐた。それが宮廷に残り、固定したのが、オホツタ大歌である。さうして行はれてゐる内に、自ら藝術的な詞章・雅正な聲樂としての資格を備へて来る。そして「都の手振」を待ち望む地方へ溢れ出て、それ／＼の國風を清醇なものにした。これが、單純に文學ばかりを目標としてゐなかつた時代の、第一義的な歌の姿であつた。だから、萬葉の格調が半ば成立する前に、歌にはすでに、かうして主題的なものが定つてゐたのである。萬葉集を見てもわかるやうに、古代短歌の本格的な作風は、おほどかにして、明らかにして澄みきつたと言ふ所が、はつきりと見えてゐる。さう言ふ點に特徴があつて、それから導かれて、倫理的なものが兆しそめたのである。所謂文學の上に考へられてゐるやうな、思想だの、技巧だの言ふことは主題にならず、格調に重きをおく傾きが著しい。さうして、この格調を持つた歌が、柿本ノ人麻呂・山部ノ赤人のやうな宮廷詞人と言ふべき位置に居た歌人の、持つて居た歌の基準に近いものであることに氣がつくだらう。

後代の考へ方からすると、文學的な製作動機から、すべての作物が生れたやうに解せられる。併しすぐれた作物は、それより以前、多くの宮廷詞人の歌ひあげ、歌ひ傳へた歌々の綜合せられた姿を基準として生れた。凡さう言ふ姿を持つてゐた。其ならば、所謂萬葉調短歌の根柢になつた歌の元なる格調は、どうして成立したか。古事記・日本紀其他萬葉集に到るまでの歌の姿の基礎になつたものは、ほゞ推察することが出来る。即、古代の帝王や、皇妃、並びに其と格を近くし

た人々の作物の姿の、綜合せられたものとして現れた音律であつたのである。何天皇・何妃の作と傳へる歌が基本調となつて、それが幾多の替へ歌を分化させて來たものが、短歌の本格なもので、其を即宮廷ぶりとして居たのである。すべて歴史の上に、このやうにして古代人は、歌は宮廷にはじまり、その正調なるものは、宮廷の歌にあると考へ、それも亦、天子に近い貴人の作から出たもの、と考へてゐたことが察せられる。この音楽を主とした短歌の後に、文學を主とする短歌時代が来るのは、當然のことである。それが萬葉盛期以後の歌の特徴でもある。これより後は、個々の作家の文學的動機を主に見るやうになつて來て、やがて平安朝以後の古今集調の時代が来る。その時期になると、歌における宮廷ぶりは單に天子・皇妃ばかりの作にとゞまらず、大臣その他貴族・女房等の作物にも、その傾向が見えて來た。これ等は皆宮廷ぶりの末に列るものだが、各それ／＼の階級における特殊の格調、ついでには題材の扱ひ方、それが持ち來す感じ――、さう言ふ個性が著しくなつて來た。

その中、不思議な程、他と異つてゐるのは、帝王の御歌であつた。歌を讀むと同時に、その組みあはされた個々の題材の關係などを了解する。その先に、いち速く來るのは、外形要素――しらべが、まづ特殊だと言ふことに氣のつくことである。知識でもない、權威でもない、壓力でもない、おほどかにしてあたゝかに、清くしてまどかなもの、さう言ふ形式要素が、何よりも強く、我々に響くことに心づく。これはおそらく、我々の持つてゐる傳統的な短歌に對する直觀と言ふ

ものが、既に総合された感覚から出發してゐて、これが宮廷ぶりだと言ふことを、一刹那無意識に感じ、瞬間に他と判別することが出来るからであらう。だから、私の話は別に、神話を語り、呪詞を説いてゐるのではない。論よりも證據、文學史上の證據であり、事實である。次いでは、科學の裏書きが出て来るはずである。今上天皇の御製——私のうかゞひ得た限りでは、七十首ばかりであるが、それにすら、今申したことが、明らかに現れてゐる。

戦のわざはひうけし國民をおもふ心にいでたちて來ぬ

この御歌は、一見無技巧にお見えになる。併し歌の心の底にお持ちになつた「いたつき」は、何の感覺もなしには、これを詠んでしまはれる訣にはいかなかつたらしい。若い世代に育たれた一人としての心動きが、この歌の根柢にあつて、——ある種の技巧が、はたらきかけたと同じ効果を齎してゐる。謂はゞ無意識の技巧と言ふべきものである。それだけに、むだな感慨に陥つておいでゝはない。その點が、平易でありながら、我々の心を強くうつ新鮮な力量として觸れて來る。御製の中心になつてゐるのは、「いでたちて來ぬ」とおつしやつたところなのだが、併しその爽やかな、新鮮味だけが、清い印象となつて、私どもの心をお揺りなさるのではない。一旦さう言ふ印象をあたへておきながら、直にもつとおほまかな心、おほやうな心持ちに翻譯せられて、ひるがつて行く。さう言ふ効果の出て來る「いでたちて來ぬ」と言ふ語の美しさである。その點で

は、「國たみを思ふ心に」とある、古風なしなやかな表現と同じ位の効果を示してゐるが、この詞の新鮮味は、やはり昭和の御代の宮廷ぶりの、特異なものが、著しくお出になつてゐる、と言ふことが出来る。

潮のひく岩間藻の中石の下海牛を取る夏の日ざかり

この御歌も、昭和の宮廷ぶりと申してよいものを十分示しておいでになる。「潮のひく」と言はれたところから、一気に「岩間・藻の中・石の下」と言ひつゞけられたく、あひ、技巧的であり、才智的なやうに聞えるが、「海牛を取る」と言ふ、適切・不適切といふやうな境域を超えて、言ひたいところへ直入されたこの第四句——、氣の安いしかも一方に、ある重厚味を持つ句があつて、宮廷ぶりであることを感じさせずにはおかない。かういふところから推して考へると、宮廷ぶりに對して持つて來たわれ／＼の知識や、經驗が、歌々の宮廷ぶりらしさをきめさせることになるやうである。しかも明治・大正の宮廷ぶりだつたら、かう言ふ氣易さがお出にならなかつたらう。それは、古い傳統の上に、更に新しい傳統を築いて行かうとしていらつしやる、宮廷生活——その姿のまゝの出て來てゐるもので、深く信頼をおかけまをすことが出来る。

新聞のしらせをけさは見て嬉し湯川博士はノーベル賞を得つ

はかなしと人は見らめど博士らのいたつきにより世はすすむなり

四首同時詠の中の二首である。もと／＼何の束縛も、拘泥もなかつた、昔の宮廷ぶりの歌が、それはそれなりに、型が出来はじめで、末々は、自由性の乏しく感ぜられることもあつたのである。さて御製では、新しい宮廷ぶりの本道の自由自在な各面を示していらつしやる。その喜びは、この「見て嬉し」と言ふお語の土臺になつてゐて、如何にもゆたけさが充ち／＼てゐる、學問の自由を喜び、人間の自由を喜び、さらに宮廷生活の、輝く自由をお喜びになつてゐるやうにも感じられる。併し、何よりも昭和御製に通じてゐられる、お人がらのかぐはしき、それはかう言ふお心の幼さ——と言ふより外の表し方のない、朗らかさから出て来るものだと言ふことがはつきり見えて、それを感じただけでも、われ／＼の幸福感は、揺り上げられるのである。

後の歌は、抽象的であり、思想的で、特殊な生活内容のうかゞはれるものだが、學者として底に持つてゐられる御自覺が、かうした歌の上に顯れた訣である。それだけに、御自身の價値も深くお知りになり、又他人の價値をも、十分おわきまへになつてゐる。學者としては、淀みない心から、御自身に湯川さんをお竝べになり、又尊敬すべきものとして、博士の學問や、人がらを受け入れていらつしやる。

歌においては、どんなにむづかしくても、又堅くても、思想的な歌・生活的な歌は、抒情詩の部類に入るものである。御製で見ても、昭和の帝のお心に動くものが、はつきりと汲みとられる。

何にしても、この意味の宮廷ぶりの歌は、昭和御製にはじまると言つてよい。どうかこの後も、さう言ふ歌風を、宮廷に榮えさせていたゞきたいものである。今後の歴代天皇の個性の爲に。その學と文藝の爲に。「はかなし」とおつしやつたのは、澁滞のないお心にも、學問を見くびつてゐる者のあることを御存じなのである。併し、その人々をすら輕んじてはいらつしやらない。それは、一・二句に渉るまどかな調子が、そのお心持ちを示してゐる。

私どもが御製を通じて一ばんはつとした感じを受けることは、一つしか表現法をお持ちにならぬ——さう言つていゝ程、純粹無垢なもの言ひをなされることである。私どもがもし、一つより表現法を知らなかつたとしたら、どんなに清潔で明らかで、最正しい人間らしさを發露することが出来るだらう、といふ反省が起る。それは決して、空想ではない。かう言ふ美しい考へをしてゐるお人も、この世には、あるものだといふ信仰を、私どもも持つことが出来る。さうしてその「一人」が、日本人の間に立つていらつしやることだ。さう言ふ人が、人間を輕蔑してはならない、と言ふことを告げて居られる、と思はれることである。

廣き野をながれゆけども最上川海に入るまでにごらざりけり

かくのごと荒野が原に鋤をとる引揚人をわれはわすれじ

ざえのなき媼のゑがくすゑものを人のめづるもおもしろきかな

「廣き野」の御製——人によつては、芭蕉の影響を思ふものもあらう。われ／＼の知り人の中では、齋藤茂吉が、これに似た歌の姿をもつてゐる。併し、誰の影響も受けてはおいではならぬのである。昭和の天子の表現としては、これよりほかに、行き方がおありにならなかつたのだらう。其ほど、文學と、其ほかのものとのぎり／＼——境の線まで来て、はつきり踏みとどまつていらつしやる。私どもにして見ると、芭蕉に學ぼうとするのも、友人茂吉から影響を受けようとするのも、その點である。

ところが、どうであらう。御製は、それこそ、何のことなく、自ら靜かに、その境地に臨んでゐられる。

開拓村を見てお作りになつたその次の御製は、「われはわすれじ」の句に、在來の宮廷ぶりを感ずる人もあるだらう。それにしても、若しそれらの傳統を捨て、全然違つた新しいものに行つておしまひになつたとすれば、宮廷ぶりの根柢のないものになる。これが、宮廷の生活の古典的な、われ／＼と違ふ深さを示しておいでのところである。心深く反省なされてゐるのである。あまりに心をうつ現實、又あまりに確實に、自然のやうに動かないでゐる、さう言ふ人生に直面なされたのである。「われはわすれじ」「忘れてはならないよ」とお心に深くとどめようとせられた氣持ちの動きが、こゝに見られる。人によつては、何かにつけてあきたらぬ心を表現したがるものだ。このお歌には、ちつとも技術を感じないと言ふかも知れない。そのしたゝかに物を言はなければ、

的確な効果を感じることが出来なく思ふこと自身、反省しなければならぬことなのである。

つまり宮廷ぶりは、玄人氣質など言ふ不純なものゝ發生する以前の姿である。たゞ世の中に觸れて、ものを言ふすべを知り初めた天地のなしのまゝな少年と、一番完全なたゞ一つの物言ひだけを知つた人とだけが、ほんたうのことばを發することが出来るのだと言へば、訣つて貫へるだらうと思ふ。も一つ言へば、必しも適切ではないかも知れぬが、僧良寛が、世間から尊敬せられてゐるあの標準と同じ標準に立つてゐられるのだと言へば、大抵言ひ盡したことになるだらう。さう言ふ靜かなお心持ちに、自ら浮んで來る「笑み」は、眞にほの／＼とした、謂はゞ驚きに近いものであつたらうと思ふ。

教はつた通りを、熟練して書いてゐる女年よりの繪、人を感心させようなど言ふ考へのない女としよりの繪、それにいろんな鑑賞法を以て見る人々、さういふ人さま／＼の心におふれになつた時、一層心に解き難いものをお感じになつたであらう。ちつとも、人を批評なさらぬ方が、第一句を「ざえのなき」と言ふ句で初めてゐられるのは、才ばしつた手法と縁のない繪、それを見る人のをかしさと、その脇に立つて純粹無垢な好意を持つて、ほゝ笑んでゐられる御自身のお姿を思はせるのである。滑稽を意識して作つておいでではないのだから、この外につゝこんで言ふ必要もないのである。もし我々がこんな位置に立てば、このほゝ笑みを、苦く歪んだものにしてしまふことであらう。一つより、表現法をお持ちにならぬことのよろしさである。

淡路なるうみべの宿ゆ朝雲のたなびく空をとほく見さけつ
ゆめさめて我世をおもふあかつきに長なきどりの聲ぞきこゆる

二つながら、新年の御製である。中世以来の宮廷生活における古典的な感覚と、生活の類型とを、世々つぎつぎに歌うておいでになつたまゝの、本格的なものは、「ゆめさめて」にかゝるふことが出来る。宮廷生活にかゝることはない我々も、讀めば即、これ以外の深い生活まで、心に流れこんで来るやうな氣がする。

何時となく、我々の持つ生活、人間の努力で互に與^{アツカ}りあふことのある生活の中へも、立ちまじつて来ておいでになる。さう言ふことを、お示しになる歌が、一つ・二つと言ふ風に段々お出来になつて来る。「朝雲のたなびく空をとほく見さけつ」と言ふ句に溢れてゐる生氣——、其を放さぬ様にしておいでになるしづかな努力感、それが強ひて新しからむと思はれたのでなく、これよりほかに出す語がないと言ふ境地から、押し出しておいでになつた、きはめて自然な語である。歌の新しみの限界は、さう言ふ行き方にある、と私などは信じてゐる。さう言ふことも、人に教へようと言ふ風なお考へはなく、唯心につれて、語のまゝに、最素朴な表現をなされたのが、この作である。代々の歌詠みは歌をよみ潤らして今に至つてゐる。そして、歌の限界を越えてまで、歌らしいものを生み出さうとしてゐる。私どもの作つてゐる歌の時代には、古風と新風とが、渦

巻き漲つてゐる。かう言ふ時に、昭和の御製を拜見して、古代から中世へ我々の歌を指導した宮廷ぶりが、今において又新しく、私どもの反省を促してゐると見える、その姿に、考へないではゐられぬ。

敬語の形について

昭和御製の事を書くことになりましたので、敬語の用法に、今後の行き方を、考へたく思ひました。

其で、普通に使ふもの、あたりまへの行き方でないもの、又しみ出るやうな、私どもの懐しみが現れる様にとの考へから、以前なら、事毎に敬語にするやうな點を、出来るだけ平凡にして、ほんたうの敬意の溢れるやうにしたいと思ひました。この先、あなた方と、一緒に考へて行きたいと思ひますが、だが實際に、さう行つてゐるか、どうかわかりません。

『釋迢空集』追ひ書き

昭和五年九月改造社刊
『現代短歌全集』第十三卷

「故人」といふ熟語の持つ二つの用語例に兼ね當る人が、だん／＼殖えて来る。歌の上だけで言うても、赤彦もさうだ。千櫨も亦、曾て故人であつて、今は既に、故人になつてゐる。千櫨の爲の選集をしあげて、自分の分にかゝつて見ると、つく／＼に老いを感じる。獨り身の氣安さに、うっかりして、若やいだ心で暮してゐるが、今度も年譜を序でることになつて、ふいとふさぎのむしが頭を擡げて來た。まだ、歌に溺れてゐる。かうした反省が、水をさす。大正十一・二年、私の爲のよい朋黨であつた「あら／＼ぎ」に疎遠になつた頃、歌をあきらめようとしてゐた。其から、大正十四年、改造社から『海やまのあひだ』を出板する頃にも、亦、創作動機の鈍つたのを感じてゐた。あの本は、忘れがたみをつくる考へもまじつてゐたのだ。ところが、五年たつた去年の暮れになつて、また『春のことぶれ』を出すほど、歌がたまつて居た。家の鈴木金太郎がまゝとめてゐたのだ。思ひきりのわるいことだ、とつく／＼思ふ。

藤村・泣菫・有明の先輩以下詩の方の人には、豹變の出来る向きが多かつた。歌よみばかりは、知つた限り、さう屑く見きりをつけた人がない。歌は、日本人にとつて、一つの「ごうす」となつても知れない。新興運動・貧窮階級の文學を志す若い人たちがまでが、此もの／＼に囚はれてゐる。私だけの事でないかも知れない。けれども、人はどうあらうと、私自體にとつては、やつぱり未練である。かうして見ると、故人となつた赤彦や千櫨同様、最期までも、歌をあきらめることはなからう、と思ふ。

私の此集は、前に板行した二つの歌集の中から、抜いた。『海やまのあひだ』からは、私一己の愛著を物さして、恣な選擇をした。『春のことぶれ』の方は、私だけには、未解決な問題を含んだ連作風のを、主とした。だから、東京詠物集・昭和職人歌・門中瑣事などが、中心になつてゐる。短歌の滅亡を完全にさせる爲、次の様式と發想法とを發掘する爲の試みの中途にあるものだ。でも、傳統のもの／＼けが退散しさうもない私には、試みのまゝでしまひさうである。

歌に、今缺けてゐるものは、題材よりは、時代的感受である。さうして、持續性の豫期出来る新音律である。新しい生の論理をひき出さうするためには、東京詠物集や、昭和職人歌などは、見當のはづれた、まどろつかしいものかも知れない。

○

私は既に、この集を撰つた目安について言うた。自選歌集は自讀歌集を意味しない、と考へておいて頂かねばならぬ。大正六年に「あら／＼ぎ」同人の末座に加へられるまでは、感傷を恣にして

るた。此が、歌の本質に叶うたものとする、誤信はなか／＼壊れなかつた。其を飽くことなく指摘して、鍛へてくれたのは、赤彦である。そのおかげで、感傷を包蔵する様になれたが、一方發想の自由を失うて了ひ、音律は硬化して行つた。稀に、此戒心を外して作つたものは、極めて浮薄なものであつた。この二つの難點は、私にとつて矛盾ではない。

私はもと／＼浮薄な歌よみであつた。唯殆、投書家としての經驗を持つて居ない。三十歳を超えるまで、自身一己と僅かな知己との外に示さうとはせなかつた。其點だけは、私の自負であつた。「あら／＼ぎ」の精神をも、とりいれ易かつた。だが、「あら／＼ぎ」の舊先輩は、等しく此私の矛盾を見てゐた。赤彦門の高足竹尾忠吉さんの『春のことぶれ』の爲に與へられた非難は、甘んじて受けることが出来た。舊朋黨の一致した意見を正確に代表したもの、と思つたからである。此浮薄と生硬とは、私の「あら／＼ぎ」に居る間は、抜けきらなかつた。さうして今も、歩みよる事なく對立して居るのかも知れない。私は必しも、さうは思はないが。大正十三年、「日光」同人の數に入つてから、わりに心軽く歌に對ふ様になつた。

新しい歌の發表機關を得た喜びが、創作動機を唆つた爲もある。感傷を描寫して、悲劇的效果を收め得ることを知つた私は、急に世界の明るくなるのを感じた。自由に羈旅の哀感を歌ひ出した。でも、さすがに「さびし」「かなし」を露骨に言ふのを憚つた。「かそけさ」「ひそけさ」なる語に特殊の内容を持たさうとしたのも、其ためである。其でも尙、世間の人事には、「かそけさ」「ひ

そけさ」の明るい孤獨には包みきれない哀傷がある。私は、「さびし」「さびしさ」をも、あまり恥ぢないで言ふほどに、腹がすわつて來た。

私は、町人の子である。人事に、心を動されることが、頗深い。若くから自然に狎れきつて、海山の間の遊行を娛しんだ。けれども、山も海も見見る爲ではなかつた。そこに營まれるひそかな人生に觸れたかつた爲らしい。舊制約の下に、肅然と整頓した社會を見たかつたものと思ふ。だが私は、戒心の緩んだ時は、擾亂した都會生活を、而も敘事的に寫さうとした。此亦、私の持つ矛盾と見えるものだ。私は、都會人の心を、詩に遠いものと考へない。同時に、物欲を恣にした心の、惡むべき事を知つて居る。其ゆゑ、抒情的な傾向の物は、羈旅の歌に著しく、敘事傾向のものは、都會生活を題材とするものに多い。

○
大正十二年の大地震の直後、荒涼たる焼け原に立つて、舊様式の詠歎をはがゆく思つた。私は、これを短歌に近い四行の小曲に表さうとした。

焼け原に芽を出した

ごふつくばりの 力芝め。

だが、きさまが 憎めなくなつた。

たつた一かたまりの青々とした草だもの。

歌は減じる。かう言ふ考へを起す事自體、自身の作物の亡びを感じたしるしとも見られる。而も、此文學史的に意義ある『短歌全集』に、さうした作物を列ねる其事が、未練である。其はよく辨へてゐる。だが、事毎に矛盾を持つ私として、こんな不覺も敢へてするのである。

X

横網の安田の庭

猫一匹ゐる廣さ。

人を焼くにほひでもしてくれ。

ひっそりしすぎる。

其時は、此が短歌の次の様式だ、と思つた。でも、世間は、すぐさうした刺戟を忘れた静けさに戻つた。さうして、此時の昂奮は、詠歎の形に還つた。

我が心　むつかりにけり。沙の上の力芝をぬき、抜きかねて居り　（芝　浦）

國びとのうら荒ぶる世に値ひしより、顔よき子らも　憑まらずなりぬ　（増上寺）

その上、皆追憶を基調としてゐた。地震前の東京に對する微弱な憧憬を含んで居た。かうして次第に、荒く、鮮かな發想を望まぬ心となつて行つた。東京詠物集は、だから、近代生活を實感したものが少い訣だ。

昭和職人歌も、唯遊戯以上に出てゐない氣がする。ある試みをした、といふに過ぎない。態度もわるい。私の無能にもよる。だが、歌自體、更に、近代の生活に對しては、無能力なものかも知れぬ。

○

『釋逍空篇』追ひ書き

昭和十二年一月第一書房刊
「短歌文學全集釋逍空篇」

かうして見ると、よほど長い間に涉つての書き物が、集つた様な氣もするが、大體、大正以後のものを見てよい。其より若い頃のものは、散文は殊に見るに堪へない。歌は愛著の離れ難い所があつて、相應に残して置いた。大正三年以後、鈴木金太郎の、保存して置いてくれた材料が、塚のやうに積つて居る。私はたゞ手を束ねて、眺めて居るばかりであつた。印刷物の切り抜きは固より、未發表の原稿・講演筆記、種々雑多の物があつた。

今度、此叢刊の爲に、藤井春洋が一心になつて整理し、歳時によつて類別してくれた。夏白布高湯・那須大丸温泉で出來たのである。私は例のどほり腕を拱いて、溜め息ばかりついて居た。さうして、時にいらざる干渉を試みた。私のした事は、註釋だけである。其が又、頗春洋の爲事の手足纏ひになつた。其外に、私の責任を分擔せねばならぬ部分は、校正刷りに初校を試みた事である。此が校合の規準になつた訣だから、後校の煩ひをした事が多からうと思ふ。

ある團體の、年忘れの會から戻つて、ふつとふさぎのむしが心を掠めた。さうだ。私のこの集は、今見て來た諸君の隠し藝、あれ見たやうなものだ。本道には這入らない、未熟なしろうと藝が、如何にも雜然とある。こんなに迷うて來て、竟に何の爲出かすこともなくて、過ぎようとしてゐる。人が見れば蛙になれ。そんなことを考へたところで、もうおつゝかない。又、編纂のし直しをすれば、やつぱりもつと、ひどいものにするのだらう。

歌は、今までに出した二冊の歌集の外に、其以後の分も、二百首近くは、まじへてある。中には、全く日の目を見せなかつたものも、這入つて居る。

散文では、長い論文を短くちぎつて出したものが多くて、訣りにくい事が多からうと案じる。昔は、彫蟲の小技に耽つたこともあるが、思へば其頃はまだよかつた。岩野泡鳴以後、文學と文章とが、別々の道を歩いて來てゐる。私もいつか、心任せに書くやうになつた。其が表現を曇らしてしまつたのである。だが、讀者大方に、氣がねを覺えるのは、此點ばかりではない。

暮れの廿五日

『天地に宣る』追ひ書き

昭和十七年九月日本評論社刊「天地に宣る」

先年、ともかくも本にした『春のことぶれ』以後十三年、その間の作品集のまとまらぬ間に、ひよつくりと、こんな歌集を出すことになった。

私自身、とても一冊になるだけの分量はない、と考へて居た戦争歌集であるが、その氣でかゝつて見ると、少々みすぼらしいが、やつと體裁の整ふだけの、作りおきがあつた。

殊に、去年十二月八日、宣戦のみことのりの降つたをりの感激、せめてまう十年若くて、うけたまはらなかつたことの、くちをしいほど、心をどりを覺えた。けれども、その日直に、十首近く口につて作物が出来、その後も、日を隔てゝ幾首づゝ、何だか撞きあげるものゝあるやうに、出来たのである。此は、若い頃の記憶を外にしては、幾年にもないことであつた。

中には、感覺のこはゞつたのや、類型を出ないものもあるが、此等の即興に近い作物があつたので、少分ながら、この集も出来た訣である。

私どもは恥しながら、今まで、憂國の士のやうな、美しい詞を吐くをりを逸して居た。其で居て、

老いに近づいたこの年になつて、尙、國土や、軍團に對して、かくの如く愛と、念慮とを懸けて居たことを知ることが出来た。自身の表現によつて、自身教へられた訣である。國學の傳統正しい筋を襲ぎながら、空しく老い朽ちようとする私ではあるが、心は、虚しく消えようとして居たのでないことを覺えて、さすがに、さしぐむほどの歡びを感じる。

唯、私の多くの老いた、若い友人が、戦陣に趣いて、色々の思ひを、私にさそふ機會に値うた。中には、たふとく命過ぎた人もあつて、人間としての悲しみの、禁め難いものがある。此は、日本人相手に持つ悲しみであるから、誰も咎めてくれぬやうに。又、さう言ふ心を根柢から振ひ起すやうに、輝きみちた顔や、詞を以て、私の前に、勝ちの消息を寄せてくれる人々が多い。私は、たゞ歡喜と言ふより、もつと底深いおちつた、澄みきつた心を以て、其等の人及び消息に、次々に接して居る。だから、この感謝を多くの人々に捧げるに先つて、まづこれ等知りあひにおくりたい、と思ふ。此本をまとめよう、と思ひ立つた理由らしいものと言へば、實は、それ一つに歸するやうである。

于蘭盆の設けする日

『山の端』追ひ書き

昭和二十一年六月八日
雲書店刊『山の端』

536

今の世の幼きどちの 生ひ出で、問ふことあらば、すべなかるべし

世の轉變を、思ひがけなく見た。國學の系譜の末に列る私には、特にその思ひが深い。前月十五日の後暫らく山に入つて、ものを考へて見たけれど、思ふとほりの決斷もつかなくなつた。さうしてまた、山となぢみ浅き生活に戻つた。首陽の蕨を嚼うた考への浅さが、つくづくと省みられる。昔の「隱者」なら、こんな時、おびしい述懐を陳ねるだらうが、今の世の我々は、唯業さらしの姿を、次代を擔ふ幼き者等の反省の料に、留めおくほかはない。

第二部は、春洋の集『鶴が音』の抄本である。三千首に近い生涯の業蹟から、凡千首を抜いた右の集は、神田の四度目の焼きうちに亡びた。せめて五十首だけでも、一通りは、人目に觸れ易い形で、世に示したく思ふのである。戦争期の作物中、彼の生の後半を盡した軍旅生活に關聯深いものは、『鶴が音』再興の時を待つことにして、今は、さうした時代に深く生きた、若い心の動きを、

見るに足るものを遺すにとどめた。

年長く、身近く居たゞけに、私は、春洋の天稟の成長を、この目で見て來た。世間幾多の先輩の中にも、技工の上で、彼を蔑し得る者は、尠いだらう。敘景歌になると、私を遙かに凌ぐ力量を、近年明らかに示して來た。此點私は、とりわけ世間に、認めて貰ひたいと思ふ。私が若し、若干の残年を持つとしたら、彼一代の記念として、亦文學力のある人間も、世にはうもれて居るものだと言ふ證據として、彼の總著集を撰つておくだらう。時代の創作力を示した若者を、草陰に埋れさせるのは、不便でたまらぬのである。この私の心は、察して頂けると思ふ。

彼は元、能登國羽咋郡一宮村生れ、家は代々、同じ村の氣多大社々家であつた藤井氏である。出陣後、二十年の共同生活がなごりなくなる豫感の寂しさが、さうさせたのであらう。「どうでもよいぢやありませんか」と言ふ本人の語であつたが、私は、本家の主人異兄と相談して、家の人とした。私一代で絶す筈の私の家も、一時は、二代續きさうに見えたのであつた。其だけに、思ひが深くて、堪へられぬものがある。

昭和二十年九月九日、私が此追ひ書きを綴る時も、彼はまだ、公には生きて、現職國學院大學教授である。

路隅集の前に

昭和二十二年十月刊河出
書房「現代歌集」第三卷

538

この叢書の中に、小さな歌集を、をさめることにした。すべて發表の、昭和廿一年正月以後にか
かるものである。たゞ最近において、極めて、隱微な變化の起りかけて居ることを、自身感じて
ゐる。だから、今年に入つてからの歌は、多くはぶくことにした。しばらく靜かに、その趣く姿
を、瞻つて居たいからである。

百首を選び出してよんで見ると、此時期の歌には、皆どこか、亡き春洋を思ふ心に繋つてゐるや
うである。未練なやうだが、たゞ笑つていたゞく外はない。

釋迢空集のすゑに

昭和二十八年三月、創元文
庫「現代短歌全集」第一卷

釋迢空集のすゑに

『海山のあひだ』『春のことぶれ』『水の上』『遠やまひこ』の四冊、及び明治三十六年以後作『海
山のあひだ』以前の、未刊歌稿のうちから抜いたもの總計三百首である。これに類した書物とし
ては、既に改造社版現代短歌全集のうちの『釋迢空集』、養徳社版の『迢空歌選』其他がある。な
ほ出版するばかりにまよめてある『やまとをぐな』、並びにその後あちこちの雑誌に出しただけ
で整理して居ない、おほよそ一冊分の作品が残つてゐる。見方によつては、私などは、短歌にと
つて獅子身中の蟲と言はれてもよい。相當長い歌歴の間に、二度まで、短歌の運命を否定しよう
として來た。而も自らいまだに細々ながら、こんな作つてゐる。歌壇の友人は思ひやりが深く
て、さういふ私の眞意を察してくれてゐるので、それならば自ら進んでやめればよいではないか
と、叱つてくれた人もない。思ふに自分ながら、斯の歌の命數の盡きないことを望んで、ちつと
でもさうでない方角を開かうとする、念願を持つてした事なのであらう。

かう言ふ訣だから、作品の少い割に、歌は見識の有無を疑はせる程、頗變化して來てゐる。これ

539

は誇つて言ふべきことではない。が唯、世間の歌を知る人たちが、私のかういふところに心づいてゐないことを、時々考へることがある。こゝに集めた三百首も、さういふ側からも、見てもらひたく思ふ。

本格式に師弟の禮をとつたのは、服部躬治先生であつた。たゞいかにも縁が薄かつたと見えて、二度お目にかゝつたきりで、絶えてゐる。併し影響は、歌の上に多く蒙つてゐる。其後、根岸の子規庵の初期のアララギ歌會に出て、伊藤左千夫先生の指導も仰いでゐる。アララギ編集所に入りして、舊同人に接するやうになつた因縁は、かう言ふところにはじまつてゐるのである。其他古い各派の先輩方の歌には、見境ひなく影響を受けた。さう言ふ中から、果して、私自身の本音が出て來てゐるかどうか、まう一度きびしい僉議を経てからのことである。年がいつてから、さうつくづくと思ふ。

唯、今後の私の歌が、どうなつて行くか。それは世間全體の歌の向きを考へるより、一層むづかしい。世間今日の歌は、今のところ、少しづつ望みある方へ向つてゐるやうに見える。併しその世間の進みに随順することが、今日以後の私に出来るか、それとも狭いながら別個の境地をきり開いてゆくか、どちらにしても、自信を持つて言ふことが出来ない。

『鶉が音』 追ひ書き

島 の 消 息

硫黄を發掘する人々の外に、古加乙涅を栽培する數家族が棲んでゐた。其人々を内地に移した。さうしてそこに、後から／＼送つた兵隊で、島は埋まれてしまつたと言ふあり様であつた。春洋と、春洋の所屬する「膽二十七玉井隊」の一大隊が上陸したのは、昭和十九年の七月であつた。食糧なども、前からある隊のやうに、すらくと渡らなかつたらしい。——これは後に聞いた話である。

みんな一度はばらちぶすに罹り、島の硫黄泉で、腹を損じた。そんな間に、手紙やはがきをよこした。極端に變化のない生活の間に、書き知らせる事件を見つけることすら、なか／＼容易でなかつたことと思ふ。

其でも長短二十通に及ぶ島のおとづれを送つて來てゐる。

此は、唯その一部、島を渡つて四度目の手紙と、その外の數通のうちから、抜き書きしたもので

ある。

○第四回目の通信です。月に二回と限られてゐるので、今頃になつて、やつと……

○この頃、しきりに以前の旅行の記憶が、身に沁みて來ます。

琉球などでも、今行けば、あんなに楽しい所ではないでせう。併し、あれだけの廣さと言ふことゝ、あれだけの古い人生のあることゝは、そこに暮すあぢきない日々にも、何かなごやかな氣持ちがあることとせう。

○こゝは、殺風景なものです。人生らしいものは見られず、跡はあつても、昨日あつたといふばかりの新しい歴史にもなつてゐないものゝ痕跡しかない——自然と言へば、あまり自然に近い、この島の姿は、われ／＼の様な教養の偏した心には、さびしくて堪へられないものです。

○寝ても、覺めても、錢一文遣ふ方法のない生活です。財布はすつかり、守り袋に變つてしまひました。これが自在に使へるならまだしもいゝのだがと、そんなことを考へることもありません。道ばたにも、何一つあるではなし、唯興へられる食物を、事務的に消化してゆくばかり。

○水に恵まれぬといふことは、人間、何より苦しいことだ、と今度といふ今度、身に沁みて思ひ知りました。

○時々、風のやうに聞えて來る、獨逸の狭まつて行く戰況なども、皆の心をさびしくします。

○東京には、議會がはじまつてゐるとのこと。あわたゞしい世の中の様子も、眞の姿がわから

ないから、兵隊なども、時々やるせない氣がするやうです。

○學校の方なども、すつかり變つてしまつたことゝ思ひます。かう言ふ世の中に、どう押しきつて行くか、國學院と言ふものゝ持つ歴史の「力」が、見つめてゐたい氣がします。

われ／＼の様に、單純な任務に入つてゐると、批判も何もなく、唯なり行くまゝの世の中の、眞實を知ることのうちこんであるだけです。——一つの科學者とおなじだ、といふ氣がします。○もつと、人生のある大きな大地に渡つて行つてゐたなら、何とか心の満足する様なことも出来るのだらうのに。あゝ、何にしても、こゝはあまり單調です。

空に飛び立つ若人たちがふるひたつて、敵をほふり盡す日まで、之を育てあげる責任者の方々が、果して深い自信を持つて、戰つて居てくれるか、と言ふことが氣が／＼になつて來ます。此こそ、前線の皆々の持つてゐる不安ではなからうかと思ひます。

○幾日たつても、同じ太陽が、おなじ色どりの阿且科アヂの叢に、明々と照つてゐるのが、すつかり、今年の夏を、平凡に過させてしまひました。

○ほんたうに、われ／＼が日本人としての力をふるひ起す時は、東京あたりも、相當不安な状態にある時でせう。こんなことは決して、ある筈のないことだと、深い信賴を、日本の誰も誰も、持つてゐる筈なのですが——。

∴

昭和十九年十一月下旬到着

○最近、東京も時々、B 29機の來襲がある様ですが、どうぞ、氣をおつけ下さい。敵機は、爆弾の外に、機銃をよくつかひますから。無蓋の物に退避することは、その點から、あぶないと申さねばなりません。それに、爆風と言ふのが、相當にひどいものなのです。

○「鵠が音」、ありがたう御座います。われ／＼の様なものゝ歌集が、この時代に出ることさへ、勿體ないのに、其がすつかり、先生の手でこしらへあげて頂けることを、唯しづかな心で、考へて居ります。

∴

十二月上旬

つぎ／＼に闇をたちつゝ、爆音の遠ざかり行くが、涙ぐましきこの機みな 全くかへれよ。螢火の遠ぞく闇を うちまもり居り

爆撃機 朝の光りとどろきて、還り續ぐなり。島の空高く

○私のからだの現状を、はつきり申しあげておきます。最近、内地送還になつた矢部健治とい

ふもの——私の小隊の伍長だつた——が、ひよつとすると、電話を大森の宅へかけることがあるかと思ひます。感情の美しい青年ゆゑ、何とかして、彼自信の生命を守りたいと思つたのですが、幸か不幸か、飛行機事故で、負傷しましたので、適當にはからひましたが、先日立つて行きました。無事に歸りつくかどうか、彼の運は神に任せる外はありません。此が、宅へ行けば、くはしい様子を申すはずです。……

∴

十月二十四日以後

をち方の明けくらがりに、飛行機のえんじん 高く鳴りはじめたり

あまりにも月明ければ、草の上に まだ寝に行かぬ兵とかたるも 搬船を日ねもす守り、海に浮く 驅逐艦見れば、涙ぐましも

○向きて（北）か 石を積みたる兵の墓。照りしむ海に ひっそり對す あけ一時 蠅の唸りのいちじるく、頭上をうづめ 黒々のぼる

あまり、周圍や、氣持ちが變り過ぎて、歌が容易には、心に乘つて來なかつたやうである。此外にも、伏せ字にした多くがあつて、折角流動して來るものが、堰きとめられてゐる様に、讀む側

からは感じられる。作者として春洋はその間、實にもどかしかったことであらう。併し文字の上の文學がなくとも、頭に文學を活して行くことが出来たから、わりあひせつなく感じなかつたかも知れぬ。また、さう言ふ歌人で、彼があつたことを、記憶しておいて頂きたい。

幾度も私は、考へて見た。併しその期間の歌は、どれもこれも完成してはゐない。完成させようと言ふ意思は十分にあつても、併し彼の周囲には、小人數ながら、彼の命令のまゝ、死んで行かうとしてゐる清い魂があつた。この魂を見つめることが、彼の最高のつとめであり、意義ある詩を生んでゐることになつてゐたのであらう。歌人である彼が、歌を作ると言ふことで、第一義の生活することが出来なかつた時代である。さう、私は思つてゐる。かう言ふ風に、彼の心を思ふ時、私はかあいさうでたまらなくなる。

だが昔風の宿命を背負うてゐた——戦争以前の日本人は、皆さうだつたのである。もう數首、未完成の歌の中から拾つておく。

沙濱に 沙を盛りたる墓ありて、○○○○の空近く照る

幕舎近○○○の殘骸ありて、このきびしきの、夜々を身にしむ

まざぐと 地上に壊えし○○○のおびたゞしきに、心うたれつ

朝つひに命たえたる兵一人 木陰に据ゑて、日中をさびしき

ぬかづけば さびしかりけり。たこのかげ、蕙の下に 亡骸を据う

島の上に照る日きびしき 日ごろなり。夏すでに過ぐと思ふ むなしさ

彼自身、歌の息のいよく、細つて行くのを見つめてゐる間に、あめりか兵は、上陸して來たのである。

追ひ書き その一

「……今はひたすらに、皇軍の、勝ちさびとよむ日が待たれることです。たゞ頻りに心をうつのは、兵士等が健康のうへです。わづらふ者があると、責任と謂つたことをのり越えて、身にしてみて來ます。夜、目がさめて、寝ながら眞向ひの星空を見てゐると、何だか來たるべきものをひた待ちにして、ちつと穴ごもりして居るものゝやうに、思はれてなりません。歩いて、人生に觸れるものがないと言ふことは、あまりにも單調なことです。かうした處に、徒らに來たる者を待たねばならぬことを思ふと、敵愾が火のやうに燃え立つてまゐります……」

春洋の第一歌集『鶺鴒が音』を世におくる。私がまづその氣になり、春洋にも、そのよし、奨めて遣つたのには、段々の理由はあるが、時期に絡んだ、二つの問題があつたのである。併し戰場からの春洋の返書は、まだ私の手には届かぬのである。

時期の問題の一つ、——既に、歌集を持つて、世間に相當、名聲の聞えた作家たちの、力量の水

準には、十分達してゐること。さう言ふことが、此二・三年來、殊に、春洋の歌を見る毎に、感じられるやうになつて來た。

歌集を持たねば、歌人でない、と言ふことは、ある訣のものではない。が、其があつても、わるくない時期と言ふものは、確かにあるのである。春洋の技術の、そこに來てゐることを、私は信じてゐる。

自ら語ることは、こんな際には避けたいのだが、話をとりばやくする爲に、敢へて書く。數月前の私の長歌に、「……いとさびし　かゝる家居に、獨り棲む君を残して、また　我はいくさに向ふ。洋中の島の守りに　つれづれと日を送りて、ことあらば、玉と散る身ぞ。辛く得しひと日のいとま　さは言へど、君をし見れば、時の間にやつれたまへり。……」と言ふのがあるのは、久しかつた國の備へから、南の海の守りに移つた其出で立ちの春洋の心を想像して詠じたのである。「未練なことだけは言はずにおいて下さい。誰一人だつて、個人事情のないものはないのだから。」思ひ入つたことを言ひながら出て行つた彼の心は、教員からいくさびとへ、轉生しようとして居ることが、深く感じられた。この歩兵少尉が、身を國難に賭けて、海の守りに當つてゐる。其として、數ならぬ身分に過ぎぬのだが、明けても暮れても、鷺鳥の羽音を頭上に聞いて、渚の玉と碎ける日待ち望んでゐる、と謂ふやうな日々が続いてゐる以上、當然避けられぬ最期が、早晩來るには違ひない。その日の到る前、せめては、彼の研究・創作兩面の爲事のこと、今日まで

のところ一番價値ある業績として、短歌集だけは、纏めておいてやりたい。此が、この本を出すやうに獎めてやつた理由の二つである。

この愛國の熱情を寫した、多くの作品を包容する歌集が、彼と同年代の人の心を、どれだけ淨くし、又彼よりも若い世代に、美しい感情を寄與するであらう。若しさうなれば、彼も本懐に思ふだらうし、私は是非さうあらせたいと願ふのである。

殊に、近年分量も増し、價値も高く飛躍して來た彼の軍團生活の様々な方面に觸れた作品群は、反省力の豊かな武人の目にふれる機會さへあれば、その生活内容を増大させるものがきつと多いに違ひない。

とりわけ、春洋が大學で教へた人たちと、年輩・教養を等しうする人々には、同感からする吸収を促すだけの、若い世代觀の、漲つてゐることは、どうやら私にも感じられる。

今の時において、此集を世に示すことは若く欲する所と、清い貧しさを満すことになるかも知れぬ。幾分でも、此に似た効果が豫期出來るとすれば、彼の歌ひはじめから、世話をやいて來た私の、一時でも早く世に問はうとする焦躁感の由る所も、頷いて頂けることと思ふ。

若い果斷　淨い憎惡　これが此國の若い人生に向けて、今、一番求めらるべきものでないかと思ふ。煩瑣な倫理學の爲に因循になり、空漠たる人道觀によつて、敵愾心をすら銷磨した者のあり勝ちの世の中である。激しく興る愛國の至情と矛盾する、此世代の薄弱性は、どうすれば、善く

さばいてのけることが出来るのだらう。

句はしい古典と、凛々しい新しい感覚とが、之を救ふに當るべきことは、すべての國家・時代の文藝の上に見られる事實である。春洋の持つ文藝は、形態は小さいが、日本人を除いてはなし得ぬ種類の抒情であつて、又日本人のすべてが、必しも行き踰えることの出来るといふ境でもなかつた。其を踏み出さぬ限りは、藝術たり得ぬ、嚴しい制約によつて守られた文學である。

古往今來、數十萬・數百萬とも數へきれぬ高天の星屑ほどな、文藝人はあつても、眞の藝術家として光り残つたのは幾人か。春洋の全集の中から私の抜き出したものは、凡千首を數へるほどに過ぎぬが、其うち五十が一、百分の一でも、最新しい古代的な日本人の心に、沁みつき離れぬものが残るに違ひない。此は決して、春洋を愛し、春洋の文藝に溺れる爲の、私の判断違ひではないのである。

春洋は、今こそまことに、遠の關塞トホミカドの防人として、夜の守り・日の衛りにつかへて、寧い日とてはあるまい。最初に抜いた手紙は、遙かなるその濤の壘ナミトリの防備についたはじめに、おこしたものである。

私に、この古代文藝を守る一人の身の、無異を祈ることは、固より切である。だがもつと深く希ふは、言ひ残した語のやうに、豫ねて期した日が來たら、彼自身古代文藝となつて、碎け散ることである。悲しいけれども、彼の心の既く轉生した魂が、其なのだから。私は、其日が來たら、

此書の包容する古代文藝が、愈輝きを増すことを思ふのである。

この集を読む人は、まづ兵と共に日を暮す數篇の連作を読んで、春洋の生活を確實に受け入れて頂きたい。其から續いて、幾篇もある敘景歌群を見る、といふ順序をとつて貰ふのである。如何に彼がこくめいと言ふより、更に眞直に、客觀描寫から、主觀に切り入つて行くかを、覺つて頂くことが出來よう。さう願へれば、この創作時の態度は、彼を掲げることゝまらず、若干は、若いあなた方の爲にもなる訣なのである。

一つの虚構をまじへぬ春洋の實力を語つたのに過ぎぬが、やはり身近いものを褒めることは、嬉しいことのかたへに、心やましい所のあるものである。あまり其が、ぶざまに見えるやうだつたら、幾重にも、寛容を願ふ外はない。(昭和十九年十月)

追ひ書き その二

(缺)

十九年冬に、印刷の準備が整つたまゝ、十年近い月日が立つた。原稿の末に附けてあつた——その時、其ときの思ひつきを書きためた解説文の何枚かは、散逸してしまつたらしい。

あの當時、まるでその親友の原稿の編纂を果す爲だつたかのやうに、戰場へ立つて行つた春部(伊馬)のしみぐ、した別れの様を思ひ出す。でも其は、亂離流竄の憂き目を凌いで還つて來た。

だが春洋は、遂に戻らなかつた。——その間に、幾枚か書き綴つてあつた文章を断念して、これだけのことを新しく記しつけておく。

追ひ書き その三

敵一機 琵琶湖東岸を北上すと まさに受信し、哨兵に告ぐ

我々にとつて、思ひの深い歌の一つである。最初、この歌集を出さうとしたのは、まだ、春洋が硫黄島の守備に、生きてはたらい居た時である。東京では、情報局や、報道部で、今日明日にも、本土に上陸して来さうだ、と公言して廻りながら、ひどくなつた戦争の實情については、國民に告げる勇氣を失つてしまつた頃である。

さう鈍感でもないつもりだつた私どもすら、「たづがね」と言ふ古語が、かの島に渡つた人々の運命をそろ／＼前兆し初めてゐたのに、氣がつかかなかつた。其と言ふのも、さう言ふ心が、痛切には起つてゐなかつたからである。集の名を、古代の靈魂信仰に寄せて考へたのも、今になつて見れば、謂はゞ、いま／＼しいはずの名だが、思へば、さう言ふ軽い物思ひを壓倒するほどの感情が、「われ人よりも」の心にあつたのである。此は當時の烈しい心持ちに生きた人々は、誰しも記憶の底に持つてゐるに違ひない。

草稿が出来あがると、この原稿を整理してゐた春部が、亦せはしなく、中部支那の戦場になつて

行つた。

急いで、報道部の検閲を受けると、暫らくして數ヶ處の附箋をして返して來た。忘れもしない、此歌も、其一つであつた。ところ／＼、その時の検閲人の判が、歌の脇にある。親泊と言ふ苗字であつた。親泊は、沖繩固有の姓であつて、その同姓の幾人かを知つてゐる。たゞ偶然検閲人だつた親泊氏には、逢ふ機會がなかつたのである。確か當時少佐で、陸軍報道部に居たと言ふ人に違ひない。

戦争がすんで、いちやく自決した人々の中に、この人の名が見えてゐた。まるで他人とも思はれぬ默會する心があつて、私を寂しがらした。

この歌一つで見ると、實戦のものゝ様な誤解が起りさうだが……此は其よりずつと早い、昭和十七年はじめに召集せられた時の連作中の一首である。金澤の町における訓練空襲の夜、某百貨店の屋上に機關銃を据ゑた時の歌である。單に演習想定を心に持つて作つたに過ぎないので、親泊氏の指定では、一度「琵琶湖」といふ地名を消したらしいが、之を活して、「さしつかへなし」と書き加へてゐる。演習だと言ふことに、氣がついたからである。私だけの考へ方に過ぎないかも知れぬが、この一聯の歌などは、戦ひの歌として、範圍も、雰圍氣も、多くの人間の動きも、又都會の夜のしづけさも、ぴつたり把握してゐる。大きくて空しい時代の感銘——戦争の中の過ぎ去つた夢を、極めて靜かな、虚空に映寫してゐるやうな氣がする。

春洋の作物には、これに似た印象を興へるものがあつて、讀過の際、ちらとふりかへりたくなるものがある。「さうだつたか」と氣がついて、一步ひつ返すと、もう何處へ行つたか、影も形もない。さう言ふ句ひが感じられるか知ら。出来れば、心切に讀んでやつて貰つて、さう言ふ機會に接してやつて頂きたいものである。

追ひ書き その四

私は、二十年或は三十年前には、幾人かの弟子らしい禮儀を示す人を導き、其等の人の同人社から出す短歌雑誌の世話を見たこともある。併しその中、相手からも飽かれ、こちらもさう言ふ人の間に伍してゐるに堪へぬだけの良識は残してゐた。其で、雑誌は關繫をきり、弟子は皆解放したので、解散することも忘れてゐた。第一、歌なども問題にしないで、三十年近く、人間として、又、文人としての歸趨をあやまらせぬだけの指導をして來た。春洋が實は、その創立會員の一人であつて、眞に歌のてにをはの使ひはじめから手引きをして來たものであつた。最初彼等の作物が、如何にすさまじいものであつたか、本集の末にある「いかつり」の連作などを見れば、あまりはつきり訣り過ぎるであらう。

十九年に、この集の編修を企てた時も考へたことだが、今度こそは、此最初期の物だけは消してしまはう。また／＼さう思つてかゝつたのだが、やつぱりさうは行かなかつた。未練にさうなるのは勿論だが、ほんの短日月の間に、進みが著しく見えた。其様子を殘して置かうと言ふつもりなのである。

ともかく、鍛錬の精神を、私はアララギから傳へて、若い人々を鞭つてゐたのである。ともかく、『鶉が音』の古い初稿から、日の目を見ようとしてゐる終校の今に到るまで、苦勞して整頓してくれたのは、高崎英雄である。その志に對して、故人に代つて挨拶する。尙、十九年の初稿編成當時から、角川源義からも、深く配慮を受けた。厚情を喜ばない訣にはいかぬ。

追ひ書き その五

昭和二十七年一月三十日、硫黄島戦死者追福の爲、かの島に渡つた、舊海軍大佐和智氏の一行と別に、同じ日上陸した朝日・讀賣・毎日の新聞記者の中、朝日の飛行班に、短冊を托してその東海岸の沙中に埋めてもらふ。

同じ時、讀賣新聞飛行班の窪美氏のうつして還つた、春洋らの考科表の寫眞を見た。同氏に會つて、其が高野建設會社の職員の、同じ島元山の洞穴から發見したものなることを聞いた。

硫氣と、風化で、持ち戻る事が出来なくなつてゐたやうである。この寫眞は、石川富士雄君の厚

志による複寫影である。

その後、又一種、さう言ふ類の文書が、元山地區の洞穴から見つかった。新聞記事を見てみると、春洋の亡長兄と次兄と、嫁して宮永姓を名のつてゐる妹眞澄さんとの名があつた。此には春洋の名はなかつたが、私は、春洋に關する身上書だと判断した。併し此も、島に管理せられてゐて、いまだ見る時が來ない。

思へば、當然の事であるながら、故舊の者たちにとつては、不可思議な事が、いつまでも残つて、未鍛鍊の心をゆすりつゞけるのである。

折口信夫全集 第廿五卷

あとがき

○全集第廿五卷は、「歌論歌話篇」第一とし、著者の歌論の中、主として作歌論及び作品の評論を収録した。これらの論稿は依頼に應じ、或は興に乗じて自ら執筆した個々の論稿であるが、収録に際して編輯者が内容によつて適宜に部立てを行つた。排列は成稿の年次に據つた。

○論稿の中、引用歌などに著者の記憶違ひと思はれるものもあるが、立論に影響がない限り、敢て訂正しなかつた。その他、用語や假名遣ひ等も舊に據ること、ほぼ全集の方針のごとくである。ただ論稿に標題、或は初句のみを擧げた歌は、讀者の便を思ひ、編輯に際して補ひ、六號活字で組んで區別して置いた。

○「切火評論」は、著者が「アララギ」同人となつた因縁の作。島木赤彦氏との關係がこの論稿から生じ、また、解剖的な評論の手法を執つて、短歌論評に新生面を示した點も記録すべきであつた。しかし後にはかかる手法に自ら批判的ではあつたが。

○「島木さん」は、大正十五年五月十六日に芝の増上寺において行はれた島木赤彦氏の追悼會での談話筆記。

○「千樫追善記」・「古泉千樫集追ひ書き」及び「千樫集開板に臨んで、舊同人に寄す」の三篇は、古泉千樫氏の歿後、その門人の手に成る遺稿集の爲に依頼を受けて執筆した稿。著者が「日光」同人に加つたのは、

あとがき

古泉氏の勧誘によるが、著者としてはその後楯の心づもりであり、伊藤左千夫翁に對する恩義によつたのであらう。

○「左千夫先生のこと」は、國學院大學における講演の筆記。當時、同大學の文藝部で出してゐた『澁谷文學』に所掲。

○「空を仰ぐ」評」は、前田夕暮・古泉千樞・北原白秋の三氏との合評であるが、その中から著者の分だけを抜萃して收めた。

○「歌集『六月』を讀む」は、草稿のまま直接に土岐善麿氏に手渡された原稿であるが、著者の歿後、同氏の手によつて發表された。全集の編輯に際して原稿を恩借して校訂することを得た。深く同氏の厚意を感謝する。

○「土屋文明論」は、『短歌研究』に掲載された「五十首競詠」の中、土屋氏の「春郊行三」に對する批評である。

○「三度見た先生の印象」・「服部躬治先生」は、共に談話の筆記である。

○「早期の與謝野夫人」は、談話筆記。

○「根岸派歌人としての泣崖」は、平瀬泣崖の遺稿『胡桃澤勘内集』の爲に、今井武志氏の懇囑によつて執筆した序文。

○「石川啄木から出て」は、昭和二十三年五月五日に盛岡第一高等學校において著者が生徒の爲に講演した

筆記。

○「與謝野寬論」は、昭和二十六年四月十三日、三田文學會の「與謝野寬・與謝野晶子を偲ぶ講演會」における講演の筆記。

○「人に預けたるもとの門弟子に寄せて」云々は、短歌誌『橄欖』大正十四年十月號の欄外に著者が數頁に及んで書入れた草稿。恨むらくは未完である。文中の由利貞三氏は著者の傳記中の外傳的人物である。

○「去七尺狀」は、舊師武島又次郎翁に對す反駁の書。題名は「三尺」を「七尺去りて師の影を踏まず」と爲したもの。著者が齋藤茂吉氏等と共に改造社から自撰歌集を公刊した當時、武島翁がこれらの歌集に對して少々亂暴な添削を加へ、批評して雑誌に載せたことに對し、齋藤氏を始め大いに憤慨し、各々痛烈な駁論を書いたが、その一である。その後、幾許もなく著者は乗合の中で武島翁と逢つた。翁曰く、「いやあれはどうも、君のは有難いが、齋藤君のはどうもひどいね！」と。これは解説子の著者からの聞き書である。

○「歴代勅撰集と新萬葉集」は、昭和十三年十二月二十三日、大阪中之島公會堂における改造社主催の「新萬葉の夕べ」における講演筆記。曾て著者は改造社企畫の『新萬葉集』の撰者であり、昭和十一年八月は那須大丸塚の温泉に籠つて専らその選に當つてゐた。

○「萬葉維新」は、當初「短歌維新」と題して『毎日新聞』に載せ、後に『鳥船新集』第二に所掲の時、訂正加筆してかく題名を改めた。當時、著者は「愛國百人一首」の選を依頼されてゐた。

○なほ、この巻を讀まれる方には、第廿六卷以降の各巻をも併せて見ていただきたい。

○「アララギ」舊號の調査に際しては、アララギ發行所の五味保義・荒井孝兩氏から援助を戴いた。記して
厚く御禮を申し上げます。

折口博士記念古代研究所



折口信夫全集 第廿五卷

定價九五〇圓

昭和四十二年十一月十五日印刷
昭和四十二年十一月二十五日發行

編纂
折口博士記念
古代研究所

發行者
山越 豊

印刷者
山元 正宜

發行所
中央公論社

東京都中央区京橋二一
電話(五六一)五九二一
振替東京三四

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・口繪印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
函貼用紙 特種製紙株式会社
クロス 日本クロス株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

Original of 1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

1861

